



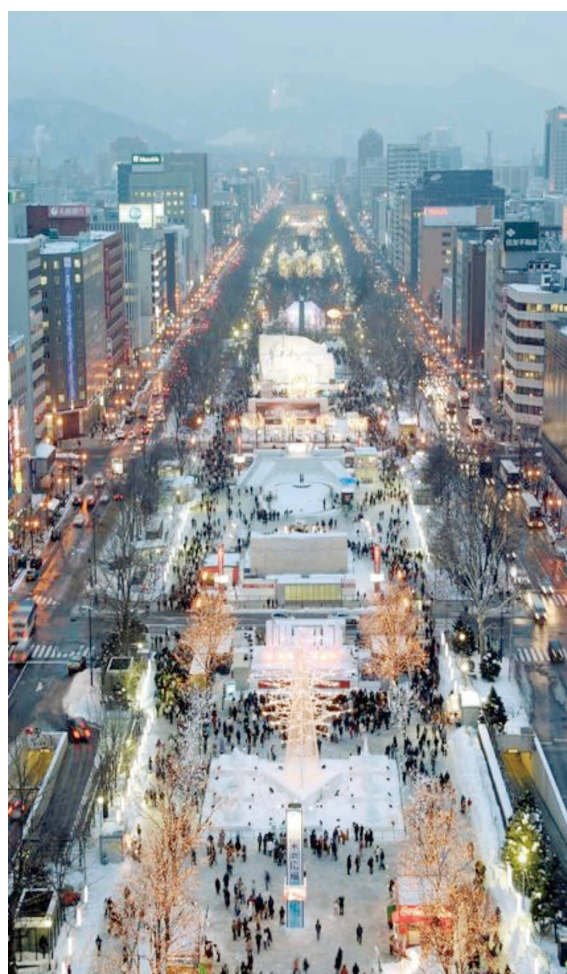
(財) 日本学校体育研究連合会

北海D@Plus One

第51回 全国学校体育研究大会 北海道大会 報告書

研究主題

「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」
～授業から日常へ、授業から未来へ～

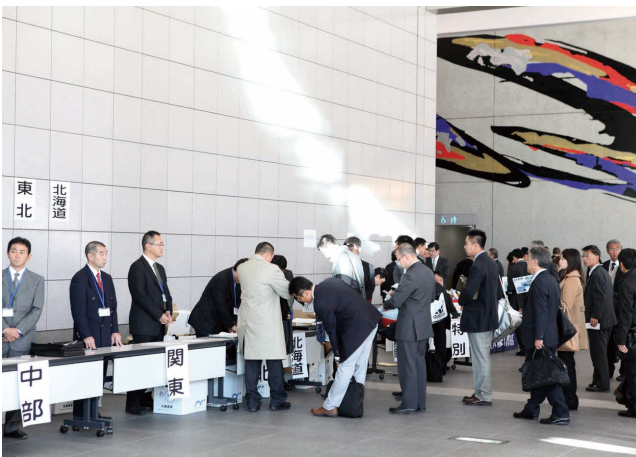


期 日

平成 24 年 10 月 25 日(木)～ 26 日(金)

第 51 回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会

ホームページ <http://www.h-taikenren.jp/>





開会のことば
北海道大会 副実行委員長 成田 純一



開会のあいさつ
北海道大会 実行委員長 飯沼 晃



主催者あいさつ
文部科学省 スポーツ・青少年総括官 山口 敏



主催者あいさつ
財団法人 日本学校体育研究連合会 会長 片岡 暁夫



主催者あいさつ
北海道教育庁 教育次長 吉田 一昭



来賓祝辞
北海道環境生活部 文化・スポーツ担当局長 山田 亨



歓迎のことば
札幌市 副市長 生島 典明



次期開催県あいさつ
東京大会実行委員会 会長 古家 眞



閉式のことば
北海道大会 実行副委員長 下山 信弘



開 会 式



基調報告
北海道学校体育研究連盟 研究部主任 嶋 本 剛



解説 文部科学省スポーツ・青少年局
体育参事官付教科調査官 石川 泰成



シンポジウム コーディネーター
筑波大学 教授 岡出 美則



シンポジウム
コーディネーターとシンポジスト



シンポジウム シンポジスト
信州大学 教授 岩田 靖



シンポジウム シンポジスト
東京都駒場高等学校 主任教諭 須黒 祥子



シンポジウム シンポジスト
佐賀県立香楠中学校 教諭 高木 健



シンポジウム シンポジスト
札幌市教育委員会 指導主事 三戸部 文彦



特別講演
東海大学 理事・副学長 山下 泰裕



公開演技
北海道恵庭南高等学校 男子新体操部



公開演技
よさこいソーラン演武 平岸天神



表彰式
全国学校体育研究優良校・功労者表彰

目 次

大会スナップ	
1 開催要項	1
2 開会式	
(1) 次第	3
(2) 開会のあいさつ	
(3) 主催者あいさつ	
・文部科学省	
・財団法人日本学校体育研究連合会	
・北海道教育庁	
(4) 来賓祝辞	
(5) 歓迎のことば	
(6) 次期開催県あいさつ	
3 基調報告	11
4 解 説	27
5 シンポジウム	35
6 特別講演	57
7 分科会一覧	71
8 研究のまとめ	73
9 分科会研究発表・研究協議等記録	
(幼稚園)	
第1分科会 札幌市立白楊幼稚園	79
(小学校)	
第2分科会 札幌市立白楊小学校	85
第3分科会 札幌市立宮の森小学校	91
第4分科会 札幌市立福住小学校	97
第5分科会 札幌市立資生館小学校	103
(中学校)	
第6分科会 札幌市立上野幌中学校	109
第7分科会 札幌市立月寒中学校	115
第8分科会 札幌市立向陵中学校	121
(高等学校)	
第9分科会 北海道恵庭南高等学校	131
第10分科会 北海道北広島高等学校	137
(特別支援学校)	
第11分科会 北海道札幌市立豊明高等養護学校	143
10 平成24年度全国学校体育研究	
最優秀校・優良校・功労者受賞者一覧 表彰者代表謝辞	149
11 主催・共催団体関係	160
12 北海道大会実行委員会名簿	162
13 北海道大会運営役員〈全体会・分科会〉	166
14 全国学校体育研究大会開催地及び研究主題一覧	168
編集後記	

第51回全国学校体育研究大会北海道大会

開 催 要 項

1 趣 旨

現代社会においては、子どもたちを取り巻く環境の変化に伴う運動機会の減少による体力の低下、生活習慣の乱れや精神的なストレスによる健康への影響等が依然として深刻な問題となっている。このような中、未来に生きる子どもたちに健やかな心身の育成を図り、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現していくことは極めて重要である。

本大会は、子どもたちが自ら進んで運動やスポーツに親しむ資質や能力を身に付け、体力の向上とともに健康な生活を実践することができるよう、教育関係者及び体育・スポーツ研究者が一堂に会し、公開授業・保育、研究発表、シンポジウム等を通して、これからの学校体育の充実方策について研究協議を行う。

そこで、本大会における研究主題は、新学習指導要領の趣旨とこれまでの北海道の体育研究の成果を踏まえ、『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』と設定した。

この主題は、発達段階を考慮し、心と体をより一体とした指導および実生活や実社会に生きる指導の充実を図ることが生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え、設定したものである。

北海道では、研究主題の具現化のために、体育・保健体育で育成したい力、すなわち「技能（運動）」「態度」「知識、思考・判断」の指導内容を確実に身に付けさせていくために【生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫】【児童、生徒が共同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築】【児童、生徒の確かな学力を保障する指導と評価の充実】の3点を柱として授業を中心とした研究を積み上げてきた。

本大会では、これまでの成果を踏まえ、公開授業・保育並びに分科会において、学校体育の充実の在り方について提案し、研究協議を行うものである。

2 大会主題 「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」

～授業から日常へ、授業から未来へ～

3 主 催 文部科学省 財団法人日本学校体育研究連合会

4 共 催 北海道教育委員会 札幌市教育委員会
北海道学校体育研究連盟

5 主 管 第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会

6 期 日 平成24年10月25日(木)・26日(金)

7 会 場 (1) 第1日全体会会場 北海道総合体育センター「北海きたえーる(愛称)」
(北海道札幌市豊平区豊平5条11丁目1-1)

(2) 第2日 分科会会場 全11会場

第1分科会 札幌市立白楊幼稚園

第3分科会 札幌市立宮の森小学校

第5分科会 札幌市立資生館小学校

第7分科会 札幌市立月寒中学校

第9分科会 北海道恵庭南高等学校

第11分科会 北海道札幌市立豊明高等養護学校

第2分科会 札幌市立白楊小学校

第4分科会 札幌市立福住小学校

第6分科会 札幌市立上野幌中学校

第8分科会 札幌市立向陵中学校

第10分科会 北海道北広島高等学校

- 8 参加対象者** (1) 全国の幼稚園，小学校，中学校，高等学校，中等教育学校，特別支援学校の教員並びに保健体育行政関係者
(2) 社会体育等の指導者および大学等の研究者
(3) 一般参加者 等

- 9 内 容** (1) 全体会（第1日）
 ①開会式
 ②表彰式
 ③基調報告
 ④解説「効果的・効率的な評価の在り方」
 文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付 教科調査官 石川 泰成
 ⑤シンポジウム 「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」
 コーディネーター 岡出 美則（筑波大学 教授）
 シンポジスト 岩田 靖（信州大学 教授）
 須黒 祥子（東京都駒場高等学校 主任教諭）
 高木 健（佐賀県立香楠中学校 教諭）
 三戸部文彦（札幌市教育委員会 指導主事）
 ⑥特別講演 「武道と人づくり」
 東海大学 教授 山下 泰裕氏
 (2) 分科会（第2日）
 ①公開授業・保育
 ②研究発表・研究協議
 ③指導講評
 ④閉会式

10 日 程

全体会 10月25日(木) 北海道立総合体育センター「北海きたえーる」

9:30	10:00	10:40	11:30	12:10	13:10	14:00	15:50	17:00
受 付	開会式	表彰式	基調報告	昼 食 (公開演技)	解 説	シンポジウム	特別講演	

※昼食時に恵庭南高等学校新体操部と平岸天神(ヨサコイソーラン)の公開演技があります。

分科会 10月26日(金) 札幌市・恵庭市・北広島市 11会場

9:00	9:30	12:00	13:00	15:00
受 付	公開授業・保育	昼 食	研究発表 研究協議	指導講評 閉会式

※第2日(分科会)の日程は、会場により多少の違いがあります。

※(財)日本学校体育研究連合会理事・評議員会、都道府県代表者会議は10月24日(水)14時からホテルライフオート札幌にて行います。

11 参 加 費 5,000円

12 問い合わせ先 北海道大会実行委員会事務局
 札幌市立手稲北小学校
 〒006-0860 北海道札幌市手稲区手稲山口653番地 2
 T E L 011-681-4182 F A X 011-681-7359

開会式 次第

1 開会のことば

北海道大会副実行委員長

成 田 純 一

2 国歌斉唱

3 開会のあいさつ

北海道大会実行委員長

飯 沼 晃

4 主催者あいさつ

文部科学省 スポーツ・青少年局長

財団法人日本学校体育研究連合会会長

北海道教育庁 教育次長

久 保 公 人

片 岡 暁 夫

吉 田 一 昭

5 来賓祝辞

北海道知事

高 橋 はるみ

6 歓迎のことば

札幌副市長

生 島 典 明

7 次期開催県あいさつ

東京大会実行委員会会長

古 家 眞

8 閉式のことば

北海道大会副実行委員長

下 山 信 弘

開会のあいさつ

第51回全国学校体育研究大会

北海道大会実行委員長 飯 沼 晃

皆様、おはようございます。四季の彩り鮮やかな「北の大地北海道」、時計台の鐘が鳴りわたる「ロマンの街」札幌市へようこそおいでくださいました。皆様のご来道、ご来札を実行委員一同、首を長くしてお待ち申し上げておりました。心より歓迎申し上げます。

平成2年度・平成14年度に続く三度目の北海道開催となる「第51回全国学校体育研究大会北海道大会」を、学校体育研究に携わっておられる多くの方を全国各地よりお迎えして開催できますことを、大変嬉しく感謝しているところであります。

また、本席には公務ご多用の中、北海道環境衛生部文化・スポーツ担当局長 山田 亨様、札幌市副市長 生島 典明 様のご臨席を賜っておりますことに、心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

今年の北海道の夏は大変長く、9月中旬になっても気温30度を超す日があるなど、記録的な猛暑となりました。その影響で札幌近郊の山々はもとより、道内あちこちの地域では、紅葉の時期が遅れ、ようやく色づき始めたところです。

その一方では、大雪山の旭岳や利尻富士では、この14日に昨年より2～3週間遅く初冠雪を記録し、札幌近郊の標高1,023メートルの手稲山も、19日の朝には頂上付近が真っ白になり、平野部での初雪の便りも時間の問題かと思えます。朝晩は、気温が10度を下回ることもありますので、ご参会の皆様には、どうぞ風邪などをひかぬよう、ご留意いただきたいと思えます。

さて、体力テストの結果から「北海道の子どもたちは、体格はいいが、体力・運動能力は全国平均を下回っている」という実態が現実であり、道内各学校では体力・運動能力向上に向け、様々な取組が行われております。しかし、テストの数値データ向上を第一義として、一方的な指導を行うことは、学校体育の学習の場では、決して好ましいことではありません。子どもが自ら運動に取り組む、楽しもうとする意欲を高めることが重要です。私どもは、「仲間とのかかわりを通し、人間的な成長を促すための体育授業」を基本に据え、全道一体となって研究を重ねてまいりました。今大会の研究主題は、これまでの北海道における学校体育研究の成果と新学習指導要領の趣旨を踏まえ、心と体をより一体化した指導や実生活・実社会に生きる指導の充実を図ることが、生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子どもの育成につながると考え「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実～授業から日常へ、授業から未来へ」といたしました。

この主題には、子どもたちに「確かな体育の力を身に付けさせたい。」「子どもたちの日常に発展し、将来につながることを意識した体育活動を充実させたい。」「子どもたちに楽しく明るい生活を営む態度を育てたい。」という私どもの強い願いを込めたつもりです。

明日の全11会場においての授業公開・保育公開では、道産子たちの「運動を楽しむ姿」「運動に挑戦する姿」「本気になって取り組む姿」「伸びる・できる・分かるを実感する姿」をご覧いただき、北海道学校体育研究に対する忌憚のないご意見、ご指導の程をよろしく願いいたします。また、小・中学校7つの分科会では、道内各地での実践提案があります。こちらにつきましても、ご指導いただければ幸いです。

今日の全体会、そして明日の授業参観や研究協議と研修詰めで、さぞ頭も体もお疲れになることと思います。せっかく「でっかいどう、北海道」にいらしたんです。すぐお帰りになるのは、何とも、もったいないことです。去年の長野大会において、次期開催地代表としてご挨拶させていただきました時に、私から「来年は北海道大会。夜のススキノ。居酒屋で一杯。豪快にビール園でジギスカン。なんて、いいんでないかい。ラーメン横丁も、いいっしょ！みんなで札幌へ行くべや！」と、PRさせていただきました。黙って帰るわけにはいきませんよね。ススキノもネオンを灯して待っています。温泉街も湯気を上げてお待ちしております。地域活性化のためにも、どうぞ皆様、北海道の味覚と晩秋の大自然を大いに満喫してお帰りください。

終わりになりますが、本大会を開催するにあたりお力添えをいただきました文部科学省、財団法人日本学校体育研究連合会はじめ関係諸機関、講師、指導助言者、シンポジストの皆様にご心からお礼申し上げます。併せて、この度表彰をうけられます学校、指導者の皆様にご心からの敬意とお祝いを申し上げご挨拶いたします。

主 催 者 あ い さ つ

文部科学省スポーツ・青少年局長

久 保 公 人

皆さん、おはようございます。ただいまご紹介いただきました、文部科学省スポーツ・青少年局で総括官を拝命している山口でございます。本来ならば、スポーツ・青少年局長の久保がお伺いいたしまして、主催者としてご挨拶を申し上げるところではございますが、本日公務のため出席できませんでした。私が預かってまいりました挨拶を代読させていただきます。

第51回全国学校体育研究大会北海道大会の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本研究大会にご参加いただきました皆さまには、平素よりわが国の体育・スポーツ活動の振興に多大なるご尽力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、新しい学習指導要領は、小学校では昨年度から、中学校は今年度から全面実施となり、高等学校では来年度から年次進行で実施となります。今回の学習指導要領の改訂におきましては、児童生徒が生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視した内容としたところでございます。

各学校におかれましては、今回の学習指導要領の改訂の趣旨を十分にご理解いただきまして、引き続き円滑な実施に努めてくださいますようお願いいたします。また、文部科学省では昨年施行されましたスポーツ基本法に基づきまして、本年3月にスポーツ基本計画を策定いたしました。このスポーツ基本計画はスポーツ基本法の理念を具体化し、今後のわが国のスポーツ施策の具体的な方向性を示すものでございます。この計画では、今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策の一つとして「学校の体育に関する活動の充実」を掲げております。教員の指導力向上やスポーツ指導者の活用による授業の充実、運動部活動の活性化等により学校の教育活動全体を通じて児童・生徒がスポーツの楽しさや喜びを味わえるようにするとともに、体力の向上を図ることを目的としております。このことを踏まえ、文部科学省ではスポーツ基本計画の目標を達成すべく平成25年度予算の概算要求におきましても、学校における体育・運動部活動の関係予算を計上し、引き続き学校体育の充実に努めてまいりたいと考えているところです。

本研究大会は、主題を「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」として、基調講演や研究協議等を行うこととしております。参加されます皆様方の活発な協議や情報交換等が今後の学校体育の充実につながり、ひいては次代を担う子どもたちの健やかな心と体をはぐくむうえで、実り多いものになるよう期待しております。

終わりに、本研究大会の開催にあたり、ご尽力いただきました財団法人日本学校体育研究連合会をはじめ、公開授業の運営等に携わっていただいた関係教育委員会の皆様、諸学校の皆様に深く感謝を申し上げますとともに、わが国の学校体育のさらなる発展を祈念いたしまして、開催にあたりましてのご挨拶といたします。

代読 文部科学省スポーツ青少年局総括官 山 口 敏

主 催 者 あ い さ つ

日本学校体育研究連合会

会 長 片 岡 暁 夫

皆さんおはようございます。主催者を代表してごあいさつ申し上げます。私は、今ご紹介にあずかりました、日本学校体育研究連合会会長を務めております片岡と申します。

第51回学校体育研究大会は北海道札幌市を中心に行われることになりました。本大会の開催に当たりご尽力をいただきました文部科学省をはじめ、北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道学校体育研究連盟、そして第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会の方々、そして関係各位に日本学校体育研究連合会を代表いたしまして心から御礼申し上げる次第です。

本大会では「未来へつなぐ健やかな心と身体を育む学校体育学習の充実」という主題を掲げ、副題として「授業から日常へ 授業から未来へ」を加えて大会主題としております。全国からの参加者の期待が大きい内容だと思います。そこで、この主題について少々述べたいと思います。

まず、主題のはじめに「未来へつなぐ」という言葉が飛び込んできます。「未来」は大変重要な言葉です。人間は未来に実現する設計図を作ることができます。それを実現して生きる力をもっております。目標が、あるいは目当てが立てられて実現しようとされていくものです。そこには様々な設計図があるでしょう。短期のもの、長期のものがあります。そこで一貫するのは個人や集団の態度です。粘り強く諦めず、目標を実現する態度です。それぞれの人と集団の個性に応じた態度を築いていく、形成していくことが重要でしょう。困難や障害を乗り越える意志の形成、冒険を恐れず、愛好する態度を培うことは世界的に活躍する民族の特徴であります。人類の未来のために活躍する人間の形成は、日本人を育てる教育課程において重要課題であります。北海道の大地から人類の未来を担う人々が育つと期待されるものであります。

そして、次に「健やかな心と身体」であります。そのためには自分たちの心と身体を深いところで知ることが大切であります。心と身体が融け合う、そういうことを知らなければなりません。そのためには達成意欲のある練習が大切であります。その時々、目標は変わるでしょう。しかし、その目標と融合する心と身体は練習により未来へとつながっていきます。健やかという生き方には、未来を実現する心身のエネルギーに満ちた生命力溢れる人間に支えられるのであります。そのような人々が少なくとも12年間委託されるのが学校体育であります。幼小中高の15年間を未来に向けて、日本の体育の基礎を作ることが期待されます。

「授業から日常へ、授業から未来へ」という副題についてであります。教育の働きが展開していく有様に期待するものであります。北海道からスケールの大きな人物が輩出されております。特色ある風土であります。本大会の主題を巡ってさらに深い考察が展開されることと思います。

ここでは、私の所感の一端をのべさせていただきました。

最後になりましたが、2日間にわたって行われるシンポジウムや公開授業、そして研究討議、研究発表を元に、スポーツ基本法の時代背景の下、指導要領の理解を深める研究討議が展開され、全国各地に成果を持ち帰られることを期待いたしまして、ご挨拶いたします。

ありがとうございました。

主 催 者 あ い さ つ

北海道教育庁

教育次長 吉 田 一 昭

皆さん、おはようございます。

第51回全国学校体育研究大会北海道大会が、全国各地から多数の御参加をいただき、このように盛大に開催できますことを心から感謝申し上げます。

本大会が、文部科学省及び財団法人日本学校体育研究連合会の皆様の御指導と全国の学校体育関係者の熱心な取組によりまして、年々充実・発展を遂げられておりますことに、深く敬意を表する次第です。

また、本日、優良校及び功労者表彰を受賞されます皆様方には、心からお祝い申し上げますとともに、今後とも学校体育の発展に一層の御尽力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、幼稚園、小・中・高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等が改訂され、順次実施されておりますが、子どもたちに「生きる力」を確実に身に付けさせていくことの重要性が改めて強調されているところであり、そのために、「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和を一層重視した教育を展開していくことが重要であります。

子どもの体力の低下や運動する子どもとそうでない子どもの二極化の傾向が課題として指摘される中、体育科・保健体育科については、「健やかな体」を育む観点から、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することができるよう、指導内容の明確化や体系化などの改善が図られ、学習指導要領で示された指導内容を確実に身に付けさせることが求められております。

特に、体力については、健康の保持増進のほか、意欲や気力といった精神面の充実に大きく関わっており、人間の発達・成長を支え、知性を磨き、知力を働かせて活動をしていく源となるものであり、学校、家庭、地域がそれぞれの役割をしっかりと果たしながら、社会全体で、将来を担う子どもたちの体力・運動能力の向上に取り組むことが必要です。

このような中、本道におきましても、学校、家庭、地域が子どもの体力づくりに取り組んでいくための具体的な方策や北海道教育委員会の支援策などを示した「体力向上支援プログラム」を作成し、各学校の創意工夫を生かした継続的な体力づくりの取組である「1校1実践」や子どもたちが縄跳びなどの記録に挑戦する「どさん子元気アップチャレンジ」などを積極的に推進しているところです。

本大会では、「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」を大会主題として、参加者の方々の活発な議論が展開され、その成果が体育学習に生かされるとともに、諸課題の解決に役立つことを心から願っております。

最後になりましたが、本大会の開催に当たり、御尽力を賜りました関係の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、御参会の皆様様の益々の御健勝と御活躍を心からお祈り申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

来賓祝辞

北海道知事
高橋 はるみ

本来であれば、高橋知事が出席し、ご挨拶を申し上げるところ所用のため出席ができませんでしたので、知事から預かってまいりましたメッセージを私から代読させていただきます。

第51回全国学校体育研究大会北海道大会が、盛大に開催されますことをお祝い申し上げますとともに、ご来道の皆様を心から歓迎いたします。

本日ご参会の皆様におかれましては、子どもたちの心身ともに健やかな成長を目指して、日頃から教育活動に熱心に取り組まれていることに深く敬意を表します。

また、本日、これまでの学校体育の研究と実践活動により、全国表彰を受けられる皆様に、重ねてお祝い申し上げます。

子どもたちを取り巻く社会情勢が大きく変化する中、次代を担う子どもたちが、豊かなスポーツライフを実現するためには、学校における体育活動が大変重要と考えます。

本大会では、授業づくりをテーマとしたシンポジウムや幼稚園から高校まで、様々なテーマでの公開授業が行われると伺っており、今後の体育授業づくりに寄与されるとともに活発な情報交換が行われ、実り多い大会となることを期待いたします。

終わりに、大会の開催にご尽力された関係の皆様に深く敬意を表しますとともに、本大会のご成功とご参会の皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げ、あいさついたします。

代読 北海道環境生活部文化・スポーツ担当局長 山 田 亨

歓迎のことば

札幌市副市長
生 島 典 明

皆様、おはようございます。

全国各地で体育教育に携わっている、今日お集まりの皆様を、192万札幌市民とともに、心から歓迎申し上げます。

本研究大会のテーマの「体育が体を造ることに加えて、心を創っていくこと」は、この時代に非常に望まれていることです。特にチームスポーツを考えると、“弱い人の分を強い人が補っていく”，“一人が失敗をしたならそれを後ろでカバーしていく”等，人間相互間の信頼や連携する心を培うことが、今一番求められていることです。また，“苦しい練習を乗り越えて、輝かしい勝利をするような強い心を育てていく”ことでも，体育の役割は非常に大きいと思っております。

未来につなぐことを考えると，ご存知の通り，日本は高齢化がものすごい勢いで進んでいます。長寿社会を迎えることは非常に素晴らしいことですが，皆が健康で活力のある長寿社会でなければならない。小さい時から体を動かすことが身に付き，習慣となり，生涯スポーツにつなげていく。それが，皆が豊かに暮らせる長寿社会を迎えられることと考えております。その意味でも，今日集まっている皆さんの責任は重大だと考えております。

学校教育を終え，卒業する時に『体育の時間は楽しかったな。これからもスポーツを続けよう。』という気持ちで学校を巣立っていくような教育を目指してほしいと思います。

私は今日，二種類のバッチを付けております。一つは，札幌市長が“札幌スマイルバッチ”と呼んでいるもので，札幌を訪れた人がみんな笑顔になるような，まちづくりを奨励しているものです。もう一つは，マイス（M I C E）という言葉のバッチ（M＝ミーティング，I＝インセンティブ，C＝コンベンション，E＝イベント）です。

今日のこの場はC＝コンベンションで，札幌の街に多くの人が集まっているのです。人が集うという意味で，札幌はM I C Eを盛んにしていこうと思っています。

先ほど実行委員長がM I C Eの意味をよく理解して話してくれましたが，本当に良い時期に，ここ北海道札幌に皆さんをお迎えすることが出来たと思います。素晴らしい景色と食の王国であります北海道を，存分に楽しんでいただきたいと思います。

結びになりますが，この研究大会の成果が輝かしいものになりますこと，それと，皆さま方のご健勝・ご活躍を心から祈念致しまして，歓迎のご挨拶と致します。

本日は誠におめでとうございます。

次期開催県あいさつ

東京大会実行委員会会長

古 家 眞

皆様、おはようございます。

私は、東京大会会長を仰せ付かっております港区立江南小学校古家眞でございます。第51回北海道大会の開催、誠におめでとうございます。

さて、東京大会は、昭和54年度、55年度の連続開催以来、33年振りの開催でございます。全体会の会場は、日本のスポーツ文化の殿堂、両国国技館でございます。3500人が入れます。東京スカイツリーも出来上がりまして、全国からの皆様方のご参会をお待ち申し上げております。

さて、この間私たち実行委員会は、福岡大会、長野大会、そして北海道大会の実行委員会の皆様のご意見を拝聴しながら、そして文部科学省、学校体育連盟のご指導を頂戴しながら研究を進めてまいりました。そして、現在プレ授業を全ての幼稚園、学校で実施している最中でございます。

なお、来年2月8日には、私の学校港区立江南小学校で、全国へ向けてのプレ大会を実施いたします。新幹線JR品川駅から徒歩10分でございます。また、羽田空港からも20分という大変近いところがございますので、ぜひこちらにもご参会お願いいたします。

最後になりましたが、東京の教員が校種を超えて、あと1年しっかりと準備して、東京大会を成功させることをお誓い申し上げ、簡単ではございますが、次期開催県からのご挨拶とさせていただきます。

基調報告

報告者

札幌市立幌南小学校
嶋 本 剛



中島公園 豊平館(札幌市 中央区)

基 調 報 告

発表者：第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会研究部

嶋 本 剛（札幌市立幌南小学校）

1

第51回全国学校体育研究大会 北海道大会

基調報告

会場の皆様，全国各地から，この北海道の地にご参集いただきありがとうございます。

只今から，第51回全国学校体育研究大会北海道大会実行委員会の研究部を代表して，大会主題及び研究内容につきまして，基調報告をさせていただきます。私は，札幌市立幌南小学校の嶋本剛と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

2

研究主題

未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実

～授業から日常へ授業から未来へ～

私たちは，本大会の研究主題を『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』

研究副主題を「授業から日常へ 授業から未来へ」と設定しました。

3

研究主題

未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実

～授業から日常へ授業から未来へ～

北海道
の
体育研究

北海道
の
子ども

学習指導
要領の
趣旨

この研究主題は，北海道の体育研究の取組，北海道の子どもの実態，学習指導要領の趣旨の3点を踏まえ，設定したものです。

それではまず，1点目の北海道の体育研究の取組について説明いたします。

4

北海道の体育研究

平成2年

『自己の課題を達成する喜び』

北海道では，平成2年と平成14年に全国学校体育研究大会を開催しました。平成2年の大会では，子ども自らが自分の能力に応じた課題をもち，その課題に向かって自発的・自主的に考え，工夫し，達成することができる子どもの側に立った学習指導の改善が図られたことが成果でした。

5



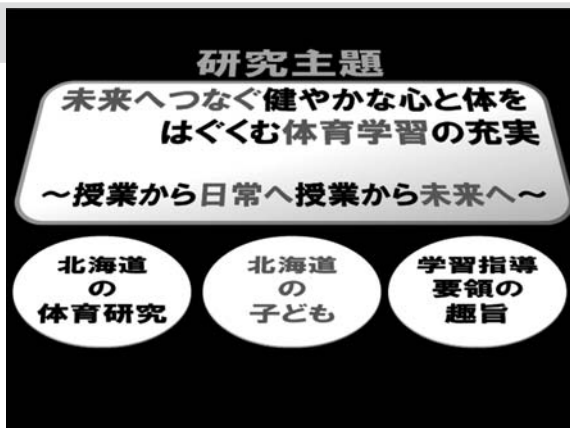
平成14年の大会では、「基礎・基本」となる動きや技能を確実に身に付けることができる教材を工夫し、仲間とのかかわりを通して、それを追求していくことを目指すことで、子どもたちができる喜びを実感することができました。

6



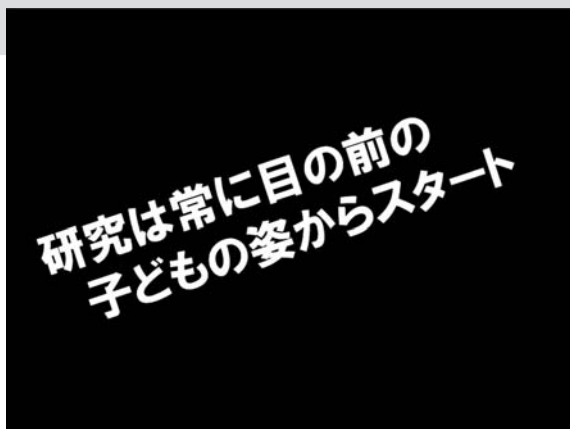
そして、今回の研究では、これまでの北海道の各地域の研究成果に加え、身に付けさせたい確かな体育の力を明確にして、どの子にもそれを確実に獲得させていくことができる指導と評価について提案させていただきます。

7



続いて、2点目の北海道の子どもの現状について説明いたします。

8



これまで私達の研究は常に目の前の子どもの姿からスタートすることを大切にしてきました。広大な大地で育った北海道のこどもたちの体力・運動能力は高いというイメージをお持ちの方が多いと思います。確かに、体格は小学校中学校の男女とも全国平均を上回りました。

9

But. . .

しかし、

10

平成23年度体力・運動能力調査結果

	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	持久走	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ボール投げ	体力合計点
小学校男子	18.11	18.98	32.76	40.04		42.89	9.59	150.67	25.05	53.15
小学校女子	17.35	16.45	36.16	37.03		32.39	9.86	142	14.92	52.93
中学校男子	30.84	26.05	40.91	48.45	408.24	78.62	8.25	192.6	21.37	39.59
中学校女子	23.87	20.54	41.77	41.27	308.87	47.1	9.32	159.52	12.82	43.53

北海道の子もたちの体力・運動能力については表の結果となっています。

これは平成23年度に北海道教育委員会が独自に実施した道内の児童生徒の体力・運動能力、運動習慣等調査結果です。

22年度の全国平均を上回っていたものは赤色で示されている小学校男子握力と長座体前屈の2種目、小学校女子握力とソフトボール投げの2種目、中学校男子握力とハンドボール投げの2種目のみです。

11

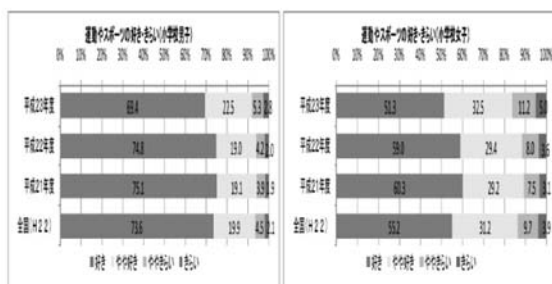
全国平均を下回っている

体力合計点

体力合計点は小中学校の男女とも平成22年度の全国平均を下回っています。

12

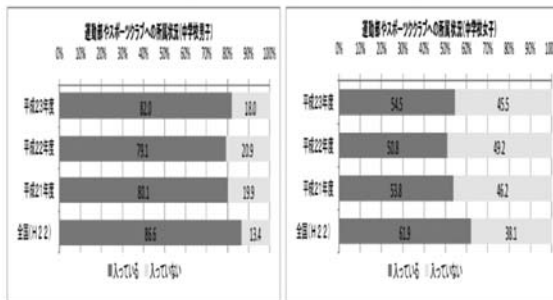
運動やスポーツの好き・きらい



このデータは、大会紀要にも掲載しておりますが、小学校の運動やスポーツに関する意識の状況です。運動やスポーツをすることが「好き」または「やや好き」と回答した割合は、平成22年度の全国平均と比べると、男女とも同程度ですが、平成22年度の北海道の平均と比べると、女子の割合が減少しています。

13

運動やスポーツクラブへの加入状況



このデータは中学校の運動部やスポーツクラブへの加入状況です。

運動部やスポーツクラブに「入っている」と回答した割合は、22年度の全国平均と比べて、男女とも下回っています。

14



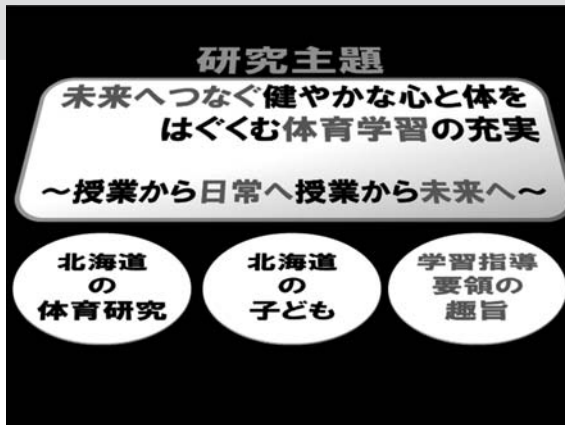
体力テストの数値だけを見て教師が一方的に指導し、数値を向上させることだけを目的にすることは、決して好ましくありません。

子どもが自ら運動を楽しもう、体力を高めようとする意欲をもてるようにすることが重要です。

全ての子どもが行う体育学習の場で、運動やスポーツがもっと好きになるようにし、運動が日常化していくようにすることが、何よりも大切だと考えています。

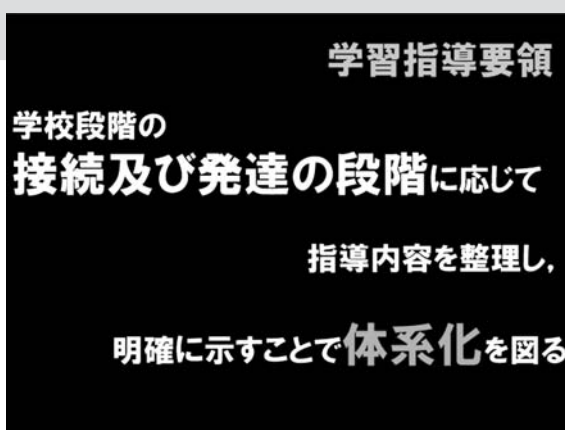
それが、生涯スポーツにつながっていくと考えています。

15



続いて、3点目の学習指導要領の趣旨との関係について説明いたします。

16



今回、改訂された学習指導要領は、小学校が平成23年4月から、中学校は今年の4月から、高等学校・特別支援学校は平成25年度の入学生から、年次進行により段階的に適用することとなっています。平成20年1月の中央教育審議会の答申において示された、体育科の改善の基本方針には、「学習したことを実生活、実社会において生かすことを重視し、学校段階の接続及び発達の段階に応じて指導内容を整理し、明確に示すことで体系化を図る。」とあります。

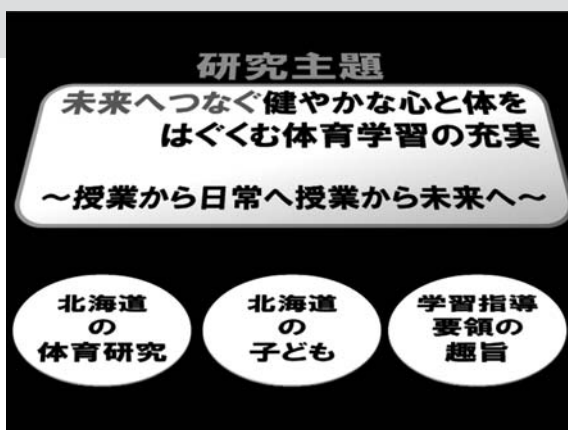
17



また、幼稚園教育要領解説のねらい及び内容の「健康」の領域においては、十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすることが新たに示されています。

これらのことは、運動することの楽しさや必要性を実感し、生涯スポーツの基礎となる知識・技能や思考力・判断力、態度が身に付くように体育学習の充実を図ることで、生涯にわたって運動・スポーツに親しむ子どもを育成することを目指す北海道の研究と重なるところです。

18



次に、研究主題に込めた私たちの願いについて説明させていただきます。

まず、「未来へつなぐ」ということについてです。

19



スポーツには力があります。

ロンドンオリンピックで活躍するアスリートの姿からたくさんの感動や勇気を私たちはもらいました。

生きる力をもらいました。

スポーツが日本の活力をつくるのです。

スポーツが日本の将来を担う子どもたちを未来へとつないでいくのです。

20



未来へつなぐためには、生涯にわたってスポーツに親しむ資質・能力を育む学校体育に、大きな期待がかけられているのです。

そのため、体育学習では

1) 本時だけではなく、次の時間の学習でも夢中になって粘り強く運動に取り組むこと

21



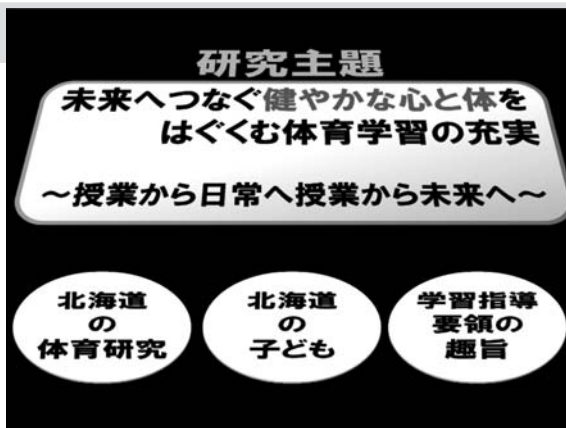
2) 次の校種や発達の段階でも意欲的に運動に取り組むこと

22



3) 次のライフステージでも主体的に運動・スポーツに親しみ続けること。
この三つのことが生涯にわたってあらわれるようにするきっかけ作りが求められているのです。

23



次に健やかな心と体について説明させていただきます。
健やかな心と体については、そのあらわれとして、次の4つの姿を考えました。

24



1) 体を動かす気持ちよさを体験し、運動好きで自ら進んで体を動かそうとする姿、

25



自らの学びを創っていく姿

2) 運動の必要性や楽しさ、親しみ方や学び方を理解し、自らの学びを創っていく姿、

26



仲間と共に課題を解決していく姿

3) 仲間と共に協力したり、教え合ったりして、課題を解決していく姿、

27



達成感や自信を得ていく姿

4) 自他のよさを生かしながら運動に粘り強く取り組み、達成感や自信を得ていく姿です。
このような姿が明日の授業でも随所に見られることと思います。

28

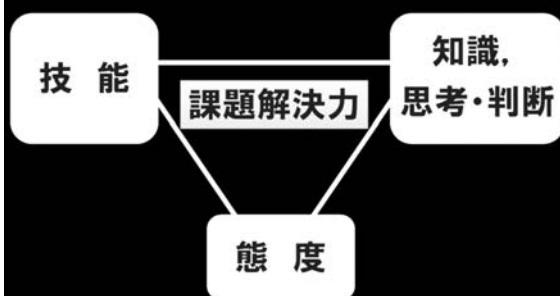
目指す子ども像

**生涯にわたって
生き生きと運動・スポーツに
親しむ子ども**

そこで、私たちは、目指す子ども像である「生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども」に迫るためには、身に付けさせたい確かな体育の力を明確にする必要があると考えました。

29

確かな体育の力



今回の研究では、学習指導要領に指導内容として明確化された「技能」「態度」「知識、思考・判断」の3つを確かな体育の力としておさえております。そして、この三つの力をバランスよく育みつつ、課題の解決に向けて、必要な思考・判断などの課題解決力を、特に重視しました。

30

研究仮説

**生涯スポーツにつながる
教材の開発・工夫及び、
協同的、課題解決的に取り組む学習
過程を構築し、
指導と評価の充実を図ることで、
確かな体育の力をはぐくむことができる**

私達は、子どもの側に立って次のような研究仮説をたてました。それは、生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫及び、協同的、課題解決的に取り組む学習過程を構築し、指導と評価の充実を図ることで、確かな体育の力をはぐくむことができるということです。

31

3つの視点

**視点1 生涯スポーツにつながる
教材の開発・工夫**

**視点2 協同的、課題解決的に取り組む
学習過程の構築**

**視点3 確かな学力を保障する
指導と評価の充実**

そこで、確かな体育の力をはぐくむ手だてとして3つの視点をもって授業実践を進めてきました。

32

研究視点 1

**生涯スポーツにつながる
教材の開発・工夫**

視点1は生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫です。

33

- ◆身に付けさせたい動きや技能の明確化
- ◆子どもの実態に応じた教材の開発・工夫
 - ◆運動との出会いや場の工夫
 - ◆生涯スポーツへの視点

教材の開発・工夫のためには、次の4つのポイントが大切だと考えています。

34

- ◆身に付けさせたい動きや技能の明確化

具体例について、体づくり運動「ダブルダッチ」の実践を通して説明します。

「ダブルダッチ」は、2本同時に回るロープに入って跳び続けて抜けるところに楽しさがあります。楽しむためには、中に入るタイミングをつかませること。一定のリズムで跳び続けられるようにすることが技能のポイントになります。

35

- ◆子どもの実態に応じた教材の開発・工夫



2色のロープ

技能のポイントをつかませる教材の開発・工夫の例について説明します。2本のロープがあることで、子どもは混乱します。そこで、2本のロープを色分けして、タイミングを図りやすいようにしました。

36

- ◆子どもの実態に応じた教材の開発・工夫



ロープの動きが見える

また、冬の間、水道管が凍結しないようにするための発泡スチロールをロープの代わりにしました。回転スピードを遅くしてロープの軌跡を見えやすくすることによって、中に入るタイミングをつかめるようにしました。

37

◆運動との出会いや場の工夫

この学習に入る時に、子どもにあこがれや目的意識を強くもたせるように、モデルとなるVTRを見せました。

38



◆生涯スポーツへの視点

仲間と協力しながら、中に入るタイミングをつかみ、一定のリズムで連続して跳べるようになった喜びから、休み時間も遊ぶ姿が見られました。授業時間だけでなく、休み時間や放課後など、自分の生活の中でもやりたいと思えるような教材の開発・工夫が大切だと改めて実感しました。

39



育成したい力の系統性

授業から日常へ、授業から未来へとつながっていくようにするために、育成したい力の系統性をしっかりと押さえた教材の開発と工夫を重視し、今大会の指導案にも位置付けました。

40

研究視点 2

協同的、課題解決的に 取り組む学習過程の構築

視点2は協同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築です。

41



課題解決的に取り組む学習の構築とは課題把握，課題追求，課題解決からなります。

42



共通の学習課題に対して，運動のコツを探ろうとする問題意識をもったり，自らの興味や能力に合った課題を設定したりして，仲間と動きを見合ったり教え合ったり，コツを見付けながら追求します。そして，それぞれが追求したものを，全体やグループで，交流し，解決できるようにすることで，「分かったことを試してみたらできた」「みんなのおかげでできた」「勝てた」と動きを通して，それぞれの課題を解決し，成就感や達成感を味わうことができるようにしていきます。

43



◆課題把握

学習のスタートにあたっては，「自分にもできそう」「おもしろそう」「挑戦してみよう」など，子どもの心を動かすように単元や一時間ごとの授業の導入を工夫することが大切です。その上で，動きを試すことを通して，チームや個人の課題をもてるようにしました。

44



課題追求では，きまりやルールなどの条件を変化させたり，活動場面を限定したりするなどしてコツを追求できるようにしました。

45



◆課題解決



課題解決では、学級全体やチーム、共通のめあてをもつグループで、作戦や動き方のコツなどを交流しながら、動きを通して、課題を解決できるようにしました。

46

**協同的な学びによる
思考力・
コミュニケーション能力
の高まり**

この過程では仲間と交流をして解決の糸口をつかむ、協同的な学びを大切にしました。
協同的な学びにより、思考力やコミュニケーション能力、

47

**協同的な学びによる
他者を理解する心や
思いやりの心、感動する心
の育ち**

他者を理解する心や思いやりの心、感動する心

48

**協同的な学びによる
共に高め、追求し、
尊重し合っていこうとする
意欲や態度の育ち**

共に高め、追求し、尊重し合っていこうとする意欲や態度を育てることができました。

49

研究視点 3

確かな学力を保障する
指導と評価の充実

視点3は確かな学力を保障する指導と評価の充実です。

50

適切な評価によって
確かな学力を！！

授業においては、適切な評価によって確かな学力を身に付けさせていくことが重要です。

51

◆ 評価規準

評価規準と指導の手立て等

【安全に関する運動事項】
○用具（マットや平床台等）の扱い方や、運動する際の安全について、確かめるように指導する。

【程度】
順番やまわりを守ったり、友達と仲よく運動したり、場の安全に気を付けてたりして取り組もうとしている。

【手立て】
○関わり合いの関わりで、確認したり認めたりして、よきを感じられるように継続して指導する。また、全体へ広げることのできる関わりも大切にす。

【思考】
友達のよい動きを見つけて、マットを使った運動遊びを工夫している。

【行動】
○友達のよい動きや工夫を紹介して、運動を試す方法や場を助言する。

評価

【評価方法】
各運動ゾーンでの子どもの動きの様子から見る。

【手立て】
○動きを工夫するといったことを確認して、アドバイスしたり、補助したりする。

評価については、国立教育政策研究所の「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」を基に、内容のまとまりごとの評価規準、単元の評価規準、本時の学習活動に即した評価規準を設定し、指導案に位置付けました。

52

評価方法

- ◆ 行動観察
- ◆ 発言
- ◆ 発表
- ◆ 学習カード
- ◆ ネームプレート
- ◆ VTR撮影

そして、一人一人にねらった力を身に付けさせることができたかを見極めるために、行動観察、発言、発表、学習カード、ネームプレート、VTR撮影などの評価方法を明確にしました。

53

向上させる手だて

- ◆発問、切り返し
- ◆称賛
- ◆助言
- ◆補助や示範
- ◆活動の場や情報の提供

同時に、一人一人が確かな体育の力を身に付けたり、意欲を向上させたりできるようにするための手だてである

教師の具体的な指導の手だても指導案に明記しました。

54



授業者の声を聞いてください。

交流でつかんだ素早い動きを意識するように声をかけています。良い動きをしている子を積極的に称賛しています。一人一人が力を身に付けたり、意欲を向上させる教師の有効な手だての一つです。

55



運動したい！！

見取ることだけに集中するのではなく、幼児児童生徒が運動する喜びを感じ、ずっと運動したいという気持ちを高めていくことが重要です。

56

北海DC! Plus One

北海道プラスワン

このキャッチフレーズには

常に新しいものに取り組もうという、私たち北海道の体育研究者の心意気が込められています。

57



平成2年と平成14年に開催した全国学校体育研究大会北海道大会，日本各地における全国学校体育研究大会の成果を踏まえ，北海道から体育学習の在り方を全国に提案したいと考えました。

58

研究主題

未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実
～授業から日常へ授業から未来へ～

どうぞ明日の公開保育・公開授業ならびに分科会において，私たちが提案した『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』について，ご参会の皆様の忌憚のないご指導とご教示をよろしくお願いします。

59



以上で基調報告を終わります。
ご清聴ありがとうございました。

解 説

効果的・効率的な評価の在り方

報告者

文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付教科調査官

石 川 泰 成



大通公園 ライラック祭り(札幌市 中央区)

解 説 効果的・効率的な評価の在り方

文部科学省スポーツ・青少年局体育参事官付教科調査官

石 川 泰 成 様

ご紹介をいただきました文部科学省の石川でございます。よろしくお願いいたします。

いよいよこの時間から研修，研究大会が始まります。本日，明日は，体育・保健体育のことにどっぷりと浸かっていただきたいと思います。

高等学校の先生方にとりましては，今年度が移行措置の最終段階ということですが，もう準備等は進んでおりますでしょうか。入学年次の年間指導計画の作成は済んでいるでしょうか。決められた体づくり運動や体育理論についての時間数は，間違いなく配当されているでしょうか。既に単元の指導と評価の計画等，あるいは必要な教材づくりにも取り組んでいる学校もあるのではないかと思います。ぜひ4月から円滑に新しい学習指導要領の趣旨を踏まえた授業が実施出来ますようにご準備の方をお願いいたします。

一方で小学校・中学校の先生方は，既に新しい学習指導要領へ完全移行しており，それぞれの校種の目標等に向かって，実際の授業を充実させていただき段階と考えます。実際に授業を行っての成果や課題をしっかりと明らかにしながら，改善を積み重ねていただくことが大切です。改めて学習指導要領の内容等，十分にご理解をしていただき，それを踏まえた授業実践をお願いいたします。

指導要領の告示以降の体育・スポーツに関連する動きを少しお話させていただきます。ご存知のようにスポーツ基本法の成立をみました。このスポーツ基本法の理念を具体化し，今後の我が国のスポーツ政策の具体的な方向性を示すものとしてスポーツ基本計画が策定されております。この計画では，今後5年間に総合的且つ計画的に取り組むべき政策の一つとして学校の体育に関する活動の充実が掲げられております。

具体的には教員の指導力の向上，そしてスポーツ指導者の活用等による体育・保健体育の授業の充実，運動部活動の活性化等により学校の教育活動全体を通じて児童生徒がスポーツの楽しさや喜びを味わえるようにすること，体力の向上を図ることを目標としております。学習指導要領の方向性と一致した法的な整備もされてきているのです。幼児期からの子どもの体力の向上方策の推進等も掲げられており，文部科学省では，幼児期運動指針等を既に示しております。文部科学省のホームページからも見ることができます。

さて，学習指導要領に戻りますが，その改善にあたって，中教審の答申等では4つの課題を踏まえて生涯にわたって健康保持増進し，豊かなスポーツライフを実現するという方向性で改善が図られています。この学習指導要領で10年ほど経過した時に，この課題が解決できているかどうかということが非常に重要なことだと考えます。

新しい学習指導要領での実践に伴い，体力の二極化の傾向は無くなっていくのか，体力の低下傾向は向上の方へ向かっていくのか，生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が図られた

かといったことを、授業の中で成果としてしっかり出していくことが求められているということです。このことは是非、頭の何処かに常に置いていただき、それを踏まえた授業実践等をお願いいたします。

さて、本日の私のテーマは、「効果的・効率的な評価の在り方」ということですので、学習指導要領の改善のポイント等に触れつつ、学習評価について話を進めさせていただきます。

特に、指導内容の明確化を中心に評価との関連でお話しさせていただきます。

効果的・効率的な評価を行う上で、指導と評価の一体化を目指した授業づくりが重要です。ねらいと指導する内容が明確化され、具体化された状況で授業が行われることにより、評価そのものが効果的、なおかつ効率的に行えるものと考えています。

運動に関する領域については指導内容を技能、態度、(知識,) 思考・判断に整理統合して示してあります。この3つの内容について、具体的に指導をしていただくことが大切です。

「技能」については、中学校の第1学年及び第2学年の球技を例にとりますと、学習指導要領では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによって、ゴール前の攻防を展開すること、とゲームの様相を示しています。解説の例示では、ゲームの様相との関連で、ボール操作では、ゴール方向に守備者がいない位置でシュートをするとか、空間に走り込むなどの動きについては、ボールとゴールが同時に見える場所に立つとか、パスを受けのためにゴール前の空いている場所に動くといった動きが例示されています。実際の授業の中で、こうした動きに着目していただき、この動きを身につけさせるための指導の工夫をしていただく必要があります。

「態度」については、授業で身に付けさせたい領域における特徴的な、あるいは固有の態度を具体的に指導するということです。球技に積極的に取り組むとともにフェアなプレイを守ろうとすることや、分担して役割を果たそうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとするなどを示しています。例えばフェアなプレイを守ろうとするということでは、球技はチームや個人で勝敗を競う特徴があるので、勝敗を競う中で、ルールや相手を尊重するといったマナーを守ったり、相手の健闘を認めたりしてフェアなプレイに取組もうとすることを示しています。子どもたちに求めたい態度を具体的な形で示しているのです。具体的に育てたい態度をはっきりさせて授業に臨んでいただくということが重要となります。

同様に「(知識,) 思考・判断」についてですが、指導要領には、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにするとあります。例示には、ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身につけるための運動の行い方のポイントを見付けること等が示されています。運動の仕方のポイントを見つめる、自己やチームの課題を見つめる、自己やチームの課題に応じた練



習方法を選ぶ、といった活動を位置付け授業を展開をしていただきたいと思います。

このように、何を教えるのかということを明確化し、具体化していくことが評価との関係で、効果的・効率的に評価を進めることができる条件になると考えています。

その際、指導内容の技能、態度、(知識、)思考・判断、これらをバランスよく指導していただくことが肝要です。教える内容は技能だけではないといったことを改めて付け加えさせていただきます。

続きまして学習評価に関する基本的な考え方等について、お話しさせていただきます。児童生徒の学習評価の在り方については、評価の基本的な考え方を大きく3つにまとめてあります。

一つは、目標に準拠した評価による観点別学習状況評価・評定の着実な実施、二つは、学力の重要な要素を示した新学習指導要領等の趣旨の反映、そして三つ目は、現場主義ということであります。

各学校では評価規準を設定していただき、それに基づき学習の実現状況を判断していただくこととなります。なぜ評価規準をつくる必要があるのか、評価規準とはいったいどのようなものかということについて、ここでは、評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料で説明します。

まず各領域、各教科の目標、領域の内容、内容項目レベルの学習指導のねらいが明確であることが重要であり、それを押さえた上で、児童生徒の学習状況として実現された状態が具体的に想定されていることが必要ということです。そして、このような状況を具体的に示したものを評価規準と考えているのです。

「これを教えたときに、子どもたちがこのような状況になるであろう。」ということを設定して学習に入るとのことです。

先生方が、子どもたちの学びの姿から見つけだしていく、捉えだしていく、という作業になります。「授業の中において中学校1年生だったらどのような学習の姿になるのか」、「中学3年生ならこのような姿」というように違ってくるはずです。ぜひ、先生方は、具体的に生徒の活動する姿から、学習活動に即した評価規準として設定していただきたいと思います。

こうした目標に準拠した評価の推進とか評価規準を設定していくことの意義は、生徒の学習状況を判断する際の目安が明らかになり、指導と評価の着実な実施に資することであろうと考えます。そして、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすことに繋がり、さらには評価方法の工夫改善を進めるために役立つと考えています。ぜひ、観点別学習状況の評価を一層進じていただきたいと思います。

評価の妥当性・信頼性等を高めるという点です。評価結果について先生ご自身だけでなく、できれば同じ学校内の先生方と意見交換等をされたうえで「次回どうするか、次の学習をどうするか、次の評価方法をどうするか」というような検討を地道に続けていただくことをお願いいたします。実践事例の着実な積み重ねが、よりよい学習評価につながるものと考えます。

最終的には授業を充実させ、児童生徒に確かな力を付けるために評価が必要ということであり

ます。

さらに、以下の点にもご留意ください。評価結果と評価しようとした目標の間に関連性がある

こと、学習評価が学習指導の目標に対応するものであることが重要です。評価方法が、評価の対象である資質や能力を適切に把握するものとして、ふさわしいものであることが求められるということです。

授業を見せていただくと、先生方から、「思考・判断の評価」に関しての質問が多いですね。「結局、学習カードだとかを使ってその記述した内容を評価材料にして評価するとしたら、上手に文章を書ける子がよい評価を得るってことになってしまいますよね。」といったような趣旨です。国語における文章表現や、その説得力を見ている訳ではありませんね。その記述内容から、思考・判断の状況の評価しようとしているのであれば、まず、思考・判断の何を教えようとしたのか、その教えようとしたことが評価できる、学習カードであり、設問の工夫が大切です。文章が上手に書けていることが思考・判断の指導内容では無いはずです。

この後のシンポジウムでは「指導と評価の一体化」ということがキーワードですが、その際、「教えたことを評価する、教えた上で評価する」ということと、「学習指導の改善に生かしていく評価」という2点が非常に重要であります。

特に、学習指導の改善に生かすという視点が、抜け落ちてしまうということがないようにしていただきたいと思います。

評価の話をするときに、私が好きでよくたとえて話すのですが「可愛くば、5つ教えて3つ誉め2つ叱ってよき人にせよ。」があります。「5つまず教えるのですね。その後、3つ誉めて、2つを叱る。」順序性があるかどうかは、勝手な私の判断ですけども、教えることが先にあるのですね。その後評価をするわけですが、評価は、誉める方が先で3つ誉める。そのあとに2つ叱る。褒める方が多く、叱ることが少ない。「5つ教えて3つ誉め、2つ叱ってよき人にせよ。」です。指導と評価の一体化を考えるとわかりやすいたとえだと思うのですがいかがでしょうか。もちろん授業では5つも一度に教えないでしょうし、叱らなくてよいわけですが。

指導と評価の計画について学校の体づくり運動を、リーフレットを例に考えてみます。指導する内容として、運動と態度と（知識、）、思考・判断があり、それを単元の1時間目からN時間目までのところにバランスよく配置し、指導するという考え方であります。例えば態度を見ますと、最初の方に健康や安全のこと、そして3時間目あたりの体ほぐしの運動が始まったところから、協力を、そして仲間との学習が深まっていくにしたがって、責任や参画の態度を指導しています。

同じように、知識や思考・判断についても、運動を継続する意義とか、体の構造、運動の原則を順を追って知識の学習をさせた上で、思考・判断の自己の課題に応じた運動の取り組み方の工夫を配置しています。思考・判断するための活用すべき知識等を先に教え、実際自分の体験を踏まえながら、単元の後半の部分に思考・判断の学習を位置付けているのです。

このように単元の計画を作成する時点において3つの指導内容をどのタイミングでどのように配置をしていくかということ、それぞれを関連づけて作成していくということが非常に重要です。

指導のタイミングと評価のタイミングを併せて考えることにより、指導と評価の計画が完成すると考えます。

また、小学校の先生方はもうご存知と思いますが、小学校の5、6年生の体づくり運動は運動の技能についても評価をしていただきますね。中学校・高等学校になりますと、これがなくなります。参考資料やリーフレットをご覧ください。

中学校・高等学校は、運動の技能については斜線があつて、評価規準が設定されていません。従前は体力を高める運動において、運動の技能の評価を行ってきましたが、体ほぐしの運動は技能の習得や向上を直接のねらいとするものではないこと。加えて、体力を高める運動は、運動の計画を立てることが主な目的となることから、新しい学習評価の中では体づくり運動は技能の評価が中学・高校ではないということです。



運動の評価については、その出来ばえや伸びを評価するのではなく、課題に応じて運動を組み合わせたり、運動の計画を立てたりしたこと等を主に運動についての思考・判断として評価をすると整理をしています。

体育の指導内容は技能だけではなく、技能、態度、(知識,) 思考・判断がバランスよく指導され評価することが重要です。体づくり運動の中学・高校では、思考・判断が非常に重視されているということが、このことからもお分かりいただけるのではないかと思います。

文部科学省では学校体育実技資料第7集の改訂版を、多くの協力者の皆様のご協力を得て、示したところであります。文部科学省のホームページにアクセスしていただきますと、ダウンロードが可能です。実践事例等もかなり豊富に載っておりますので、ぜひご活用いただければと思います。

さらに、評価規準の作成・評価方法等の工夫・改善のための参考資料から、学習評価の具体についての話をいたします。

中学校第1学年及び第2学年における器械運動の技能の評価の事例です。技能では、「滑らかに」がキーワードです。滑らかに行うとは、解説上は「技に求められる動きがとぎれずに続けてできること」と示されています。「滑らかにできるっていうことは、こういうことなんだ。」と、知的に生徒にしっかり理解をさせていただくことが指導の1つでございます。

また、教師の手だてとして、具体的な練習方法を準備することが必要です。滑らかな技に求められる、動きが途切れずに続けて出来るためには、こんな練習方法がありますよという提示です。

その他、生徒が動きのコツを掴みやすいような授業中の教師の助言を準備するということが考えられます。そうした指導の上で、学習活動に即した評価規準の「体をマットに順々に接触させて回転するための動き方、回転力を高めるための動き方等、基本的な技の一連の動きを滑らかにして回ることができる。」で評価をします。

参考資料には、表にまとめて示しています。回転系や巧技系の基本的な技を滑らかにして、それらを組み合わせることが出来るようにするという目標に対して、先生方の指導の内容、指導の

手だてとして考えられることや、知的な理解を指導するという点にご注目ください。「滑らかに」を、動きとして現れる動作を確認し、先生方が求めているものと生徒がやろうとするものを一致させておくことが大切になります。そして練習や発表の場を工夫し、準備をすることは、観察によって評価する場面にもなるということです。

技能の評価方法は主に観察ですが、妥当性や信頼性等を高めるために、単元のなかで複数回の評価機会を設定するというような工夫を示しています。

大切なことは、まず努力を要する生徒、これをいち早く見つけだすことです。その生徒たちにとってどのような手だてを取るのかが重要です。評価規準による評価は、最終的に成績をつけるためだけのものではありません。

態度の評価のことですが、分担した役割を果たそうとするについて、解説には、「分担した役割を果たそうとするとは、練習などを行う際に、器械器具の出し入れなどの分担した役割に積極的に取り組もうとすることを示している。」と示されています。さらに、「分担した役割を果たすことは練習や発表を円滑に進めることに繋がることや、更には社会生活を過ごす上での必要な責任感を育てることに繋がることを理解し、取り組めるようにするということ。」とあります。なぜ、この態度を身に付ける必要があるのか、指導者がしっかりその意味・意義を理解させたうえで、生徒にその態度を身に付ける活動をさせていくことが大切です。生徒が納得すれば、こういう態度をしっかりと身に付けようという意欲が湧くのではないのでしょうか。そのことをしっかり教えていただきたいと思います。

評価方法は主に教師の観察になります。妥当性・信頼性等を高めるために、複数回の評価機会を設定するなどの工夫を示しています。

関心・意欲・態度や運動の技能については、評価方法としては教師の観察による評価が中心として捉えております。事例では指導後一定の期間を設けて適切な時期に評価機会を設定しています。

観察により学習状況进行评估する場合は、可能なものは、複数回の評価機会を設定しています。中学・高校のように小学校に比べますと単元の授業時数が比較的長い時間をとれる場合には、この複数回の評価機会というものが有効ではないかということです。さらに、観察による評価の場合、一単位時間で可能な観点到に絞り込むことが重要です。

思考・判断や知識・理解については、学習ノートを活用することで、その記載内容を評価材料とすることを事例では示しています。その時間に学習ノートをしっかり書かせられれば、授業中ではなく、授業の無い時間だとか、あるいは放課後の時間を使って先生が記載事項で評価できるだろうということです。必ずしもその授業の中で知識、思考・判断の内容を評価するという意味ではありません。

こういった考え方に基づいた事例が複数載っておりますので、ぜひ参考にさせていただきたいと思います。小中高、校種別に示しています。

以上、実際の授業をつくる上での教えることと評価すること、指導と評価の一体化を踏まえてお話をさせていただきました。

まとめです。効果的・効率的な評価につきましても、まずは指導内容の明確化、具体化をぜひ進めていただきたいと思います。何を教えるのかということをはっきりと明かにして授業に臨んでいただきたいと思います。そして、その際の指導内容は、技能と態度と（知識）、思考・判断であり、その内容をバランスよく指導し評価をしていただきたいと思います。



次に、教えたことを、教えた上で評価をするということです。各観点における評価方法の工夫についても十分ご検討いただきたいと思います。

各観点における評価機会については、教えたタイミングに合わせてどのタイミングで評価をすればよいのかという、指導と評価の計画、評価機会の設定に工夫が必要です。

最後に、評価のことは教えてそれを評価するというだけでなく、学習指導や評価方法、その改善に資するものであります。教えて評価してお終いではなく、次にどうするかというところへ向けた視点を大切にいただきたいと思います。

以上、私の解説で少し足りないようなところは、この後のシンポジウムや明日の研究協議の中で、じっくりと深めていただければと思います。限られた短い時間で、ボリュームのある内容を早口でご説明いたしましたので、若干分りづらいようなところがあったかもしれませんが、皆様それぞれのお立場でご研究を深めていただければと思います。

今日、明日と実のある研修になりますよう、心からお祈り申し上げて、解説を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

シンポジウム

「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」

コーディネーター
筑波大学教授
岡 出 美 則

シンポジスト
信州大学教授
岩 田 靖

東京都立駒場高等学校主任教諭
須 黒 祥 子

佐賀県立香楠中学校教諭
高 木 健

札幌市教育委員会指導主事
三戸部 文 彦



羊ヶ丘展望台 クラーク像(札幌市 豊平区)

シンポジウム

「指導と評価の一体化を目指した授業づくり」

コーディネーター	岡 出 美 則	筑波大学教授
シンポジスト	岩 田 靖	信州大学教授
	須 黒 祥 子	東京都立駒場高等学校主任教諭
	高 木 健	佐賀県立香楠中学校教諭
	三戸部 文 彦	札幌市教育委員会指導主事

【岡出美則】

最初に私岡出の方から、今回の趣旨を説明させていただきます。

石川調査官の方から、概略をご説明していただきましたが、指導要領の改訂・実施の時期に入ってきているということと同時に、石川調査官がお話しされていたように、指導と評価の一体化という中で、授業の質を保証していくことが求められています。

それに関わり、国立政策研究所等から多くの資料等が現在皆さんの目に触れるようになっていますが、このような状況の中で授業の質の保証ということに関わって、私たちはいろいろなことを考えていかなければならない状況にあるということになります。

そこで、ここで改めて教育評価という言葉を一応使わせていただきまして、私達は評価をするときに何をターゲットにしているのかということの確認をさせていただきたいと考えます。大きく3点についてお話しします。

1点目は、子どもの学習状況です。これは今、お話がありましたように、到達目標に照らして、子どもたちは何がどの程度出来ているのか、実態の評価をしていくということになります。

2点目は、その実態の評価を見たときに、高い低いという判断が入ってくることになりますが、その高い低いが生み出される背景には、授業の進め方の問題とか、時間配当数の問題、あるいは教育制度の問題、こういうものが必ず絡むことになります。そういう意味では教育方法の妥当性について検討していくということになります。

3点目は、教える内容の妥当性ということですが、改めて子どもたちに教えようとしている内容に無理がないのか、あるいは易しすぎないのか、ということが常に検討されながら学習指導要領が改善され、あるいは学校の授業が改善され続けていくという中で、改めて、指導と評価の一体化ということを考えてみたいということです。その際に、授業の質保証ということに関しても、3つくらいの観点をもつ必要があるだろうということになります。

1つは最初の設計図です。学習指導要領、あるいは皆さんが実施される授業の指導案、それから授業の実施条件、こういうものがある程度保証されていないと、質の保証ということについては、かなりハンディキャップを負うということになります。良い設計図がなければ、良い授業の実現は難しいということになるわけです。しかし、設計図はあくまで設計図でしかすぎず、それを形にされるのは実際に授業をされる先生方であり、教師集団であるということが言えます。改

めて、授業において教師が何をしているのかと、あるいはその設計図を形にしていける資質能力を教員が改善し続けていけるのかを検討する必要があるということになります。

評価者ということでも、実際に起こっていることを適切に評価される方がいないと、これは期待しているものが本当にできているのかどうか分からないという状態になってしまいます。そういう意味では、実際には児童・生徒たちは、私たちが意図している授業を確実に形にしているのかどうかを厳しく評価してくれる存在でもありますし、実際に同僚の教師に関しても、そのような役割を果たしてくれることになると思います。研究職というところに就いておられる方たちも全く一緒です。改めて設計図の良し悪し、授業者の良し悪し、そして、石川先生の話でもありましたが、評価方法の良し悪しということも考えていく必要があるということになります。

学習評価の在り方についての報告が既に出ていますが、ここでは石川教科調査官が言われたようなことが書かれています。この中で評価の4観点が記されていますが、今回私たちに課せられた課題は、「思考・判断」と言われているところと、「知識・理解」の2観点到して、どのような設計図が描け、どのような評価方法が考えられるのかを検討することになります。



これは高校の解説書の一覧に出ていることですが、知識、思考・判断の内容については、どのようなものを教えることになっているのかということが、時間経過で挙げられています。いろいろな内容が指導する内容として挙げられているということになります。

このようなことに関わり、4名のシンポジストにお話をさせていただくことになります。

シンポジストの方々のお名前は再度繰り返しません、岩田先生の方から三戸部先生の方に、いわゆる大学から小学校の方におちていくような順番でご紹介していただこうと考えております。

従来、大学のスタッフが出してきている内容というのは、かなり一般的なことでお話ししてきましたが、今回岩田先生には教員養成の場で、実際に「知識、思考・判断」に関わる評価について、学生たちにどのようなことを伝える試みをされているのかということもご紹介いただくことをお願いしております。

時間配分ですけども、この後には山下先生のお話がありますので、各シンポジストには15分ずつ4人にお話ししていただき、その後一度フロアの方からもこのことに関わってご意見等があれば伺った上で、後半実質20分位になってしまうと思いますが、ディスカッションがシンポジストの間で出来ればと思っております。

それでは、岩田先生からよろしくお願いいたします。

【岩田 靖】

紹介いただきました信州大学の岩田と申します。よろしくお願いいたします。

大学で私が学生に実際に話していることをもとに短い時間で喋りたいと思いますが、最初に前

ふりを少し話させていただきます。指導と評価の一体化というのは、指導をしたこととの対応の中で、評価を考えることであり、またその評価から得られた情報を次の授業改善に活用していくべきことを意味していると考えてよいと思います。このことからすれば、評価の観点になる事柄が指導の目標・内容として形式的に掲げられるだけではなく、実際の授業の中にまさに立ち現れ、その成果が確認できる対象として位置づけられることが、この課題解決の大前提であると考えています。その意味で「技能」、「態度」、「知識、思考・判断」の学習が単元の授業展開の中で密接に結びつく授業づくりを目指すことこそが、指導と評価の一体化を裏打ちするものになると思います。換言すれば、「できる・かかわる・わかる」ことが、子どもたちの学習活動において必然化していく授業づくりが求められ、それに向けての教師の授業の構想力、イメージーションが問われているのだと言ってもよいのではないのでしょうか。このことが今回のシンポジウムでの焦点になっている知識、思考・判断の評価を考えることの土台であると思われる。

「できる・かかわる・わかる」ことが結びついていく授業づくりを探究することにおいて重要になるのは、学習対象となる運動の本質的な課題性を解釈し、それに向けた学習プロセスを子どもたちに提供していくことです。そのためには特に運動技能に関わった課題性を核とした学習内容を抽出・設定していくことが不可欠であり、それを前提とした教材づくりが求められます。なぜなら、運動の技能的達成、つまり「できる」ことを目指した学習活動においてこそ、「わかる」こと、「かかわる」こととの関係性が濃厚に生まれてくるからです。「できる」ことに向かって「わかる」ことが、または、わかることを通して「かかわる」ことが重要になると言ってよいでしょう。

さらに、このような授業づくりを念頭に置いた場合、今日的な大きな課題は、子どもたちが運動についてわかるようになり、できるようになるために、何を伝える必要があるのか、また、わかち伝えることができるのか、といった具体的な学習内容や教材に関するさらなる探究が授業実践者である教師、また研究者に求められていると考えられます。

ここでは、教員養成学部における体育の指導法に関わった授業科目の中で取り上げている授業づくりと評価の関係を見通した思考についての具体的事例をもとに話題提供をさせていただきたいと思います。



さて、「生きる力」の支柱になる確かな学力の形成という指針、および今日における子どもたちの運動への二極化といった問題性を踏まえれば、体育授業の質の保証という観点からみて、学習目標・内容の明確な授業づくりのもとで、子どもたちの積極的な学習参加を促すことが大きな課題になっていると思います。

指導と評価の一体化を目指した体育授業づくりとは、まさに体育授業の質の保証の問題ですが、このことは今日、新学習指導要領の完全実施に直面する中で、現実の体育授業には問題はないのか、つまり子どもたちが体育授業に真の意味で、期待と信頼を寄せているかどうかを問い直すことを意味しているのではないのでしょうか。

そこでは、スポーツの形式を表面的になぞったような授業、また、子どもに何の手がかりも与

えずに課題解決をゆだね強いている授業からの脱却が大きな課題になるはずで。とりわけ、学習対象となる運動の本質的な課題性、面白さを軸に、わかる・できる・かかわることが密接に結びつく学習活動を組織できるかどうか、そしてそれを通して子どもたちがより大きな楽しさを味わい、運動への肯定的感情を膨らませていけるかどうかは鍵になると思われます。

ここでの指導とは授業以前になされる単元の授業構想・設計や教材づくりと単元展開の中での刻々の教師の働きかけ、別の表現を用いれば、教師の教授行為の総体を意味すると考えられます。これらの授業づくりに関わる「創造」的な仕事は、明らかにそれぞれの教師の「想像」力、還元すれば、生み出したい授業への教師のイメージネーションに支えられていると言ってもよいでしょう。つまり、実現したい授業の様相を先取りし、鮮明に描き出すことです。

それでは、教員養成学部での、特に単元の設計・教材づくり・指導案づくりに関わった授業の入口を紹介したいと思います。

私の所属する信州大学教育学部での中等の保健体育の教科の指導法に関する科目には、①中等保健体育科指導法基礎、②中等保健体育科教材論、③中等保健体育科指導法演習、④中等保健科指導法演習が位置づけられています。このうち私は①と②を担当しておりますが、ここでは具体的な授業づくりの問題に視点を向けている②の中等保健体育科教材論の授業を取り上げることにします。

この授業の中心的課題は、各運動領域の単元構想と学習指導案づくりです。3年次前期に4週間の基礎教育実習を経験した学生が受講対象になっています。20数名の受講生をグループ編成し、各グループの発表を受けて、全体でディスカッションする形式をとっています。

この授業では、中学校の学習指導要領およびその解説・保健体育編と、長野県教育委員会が作成した「長野県中学校教育課程学習指導手引書」、および高橋健夫ほか編「新版・体育教育学入門」を主要な参考資料として用いています。

この中での受講学生が単元構想・授業案づくりをするための、その思考過程をできる限り鮮明にできるように、長野県が作成した手引書の単元指導計画の箇所を重要な資料として有効に活用させてもらっています。そこには学習指導要領解説からねらいをつかみながら、「素材の研究」、「生徒の実態把握」、「運動の価値の決め出し」、「目標の明確化」、「教材観」、「単元の構想」、「1時間の授業の構想」といった授業づくりのプロセスが記述されておりまして、学生の指導に大いに生かすことができます。

この手引書では、単元指導計画の思考過程が、中学校2年生における陸上競技の長距離走の領域に沿って例示的なかみ砕きがなされており。具体的には「3分間走セイムゴール走」の授業実践がモデルになっています。

実は、この「3分間セイムゴール走」は2005年に私の基本的なアイディアのもとに構想し、研究室の学生とOBの授業者で実践化した教材であり、以来その実践校では継続的に体育カリキュラムに位置づけているものです。

したがって教材づくりを含んだ授業実践の意図を学生に伝えるのに好都合となっています。実践のいくつかの側面のデータを具体的に提示できますし、授業の映像によって教師の働きかけや子どもたちの学習活動の姿をイメージさせることができるからです。

教材づくりの基本的な視点については、学習内容の明確さと学習意欲の喚起の側面が重要にな

ることを確認した上で、3分間セიმゴール走の授業づくりや教材づくりの意図を学生に説明します。ご覧頂いている図は、これ私が1994年に作ったものです。

長距離走は身体的にもきつく、特に遅い生徒ほどその姿を長い時間にわたって友だちの前にさらさなければならぬという心理的抵抗も加わって、生徒から好意的に思われない傾向が強い運動です。そこでこの運動を学習内容の明確さと学習意欲の喚起の視点から好ましい教材づくりができないか、つまり、「わかる・できる・かかわる」ことを密接に結びつけながら、生徒の意欲的・積極的な学習の姿を促すことができないか、という授業づくりの課題意識のもとに3分間セიმゴール走の教材づくりの着眼点について説明を加えます。

この教材ではペースのコントロールを学習内容の中核として位置づけ、生徒の協同的な学習を生み出し、その過程がよりプレイフルな活動になるように教授学における「統一と分化の原理」と「個人的運動の集団化」の視点を大切にしています。つまり、個々の生徒の走能力に応じた目標の設定、記録向上への意欲的なチャレンジを促す課題の設定と場の工夫、個人的達成に基づくチーム間競争、そしてチームにおける走者以外の役割付与と積極的な関わりの創出について工夫しています。

単元序盤に測定した3分間の走距離を個々の生徒の基準の記録とし、ゴール位置から生徒の基準記録を逆算した地点をその生徒のスタート地点として設定し、3分間後にゴールよりもさらに遠い地点まで到達できるようにチャレンジします。ゴールよりもどれだけ距離を伸ばせたかを得点化し、チーム合計で競い合うというものです。少しばかりですが、授業場面の断片の映像をご覧ください。

単元は7時間前後で構想していますが、生徒は単元の過程において毎時間この3分間の走運動に自己のペースを設定してチャレンジします。そして毎回トラックに設定したチェックカーのラップタイムを測定しグラフ化しその記録や実際の自分の身体感覚をもとにチェック間のペースを振り返り、修正し、次回のチャレンジに向き合います。チームのメンバーも仲間のグラフを検討しつつわかり合い、支え合う学習を展開していきます。

したがって、この単元の目標を簡潔に表現すれば、「関心・意欲・態度」として走距離の向上を目指し、チームの仲間と協力して取り組もうとすること。「技能」は、ペースのコントロールできる走法や呼吸法を身に付けながら、走距離を伸ばしていくことが掲げられます。また、ここで課題となっている「知識・理解」「思考・判断」の側面では、ペースのコントロールの重要性がわかり、そのための走法や呼吸法が理解できること。ラップタイムや身体感覚をもとにしながら、ペースの設定やその修正をしていくことができるということが期待されます。

私はこの「知識、思考・判断」、つまり広い意味での認識的側面について、かねがね運動の「課題認識」、運動の「実態認識」、運動の「方法認識」という言い方で、その繋がりを表現してきました。課題意識とは、習得の対象となる運動や取り組むゲームの技術的・戦術的な課題がわかることであり、実態認識は、現時点での自己やチームの運動のきばえや問題点がわかることを意味しています。また、方法認識はその課題を達成するための手段や練習の仕方がわかることを指しています。これらの認識ができること・かかわることを結びつけていくキーポイントであると考えられます。

実際の大学の授業ではこの事例をサンプルにしながら、指導目標間の関係を意識した単元構想

や学習指導案づくりを促すように働きかけています。

わずかですが、大学での授業において私が学生に伝えていることのサンプルを少し紹介させていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

【須黒祥子】

皆さんこんにちは。東京の駒場高等学校から参りました須黒祥子と申します。このような場は不慣れでして、皆さんにお役に立っていただけるような情報をご提供できるかどうか、あるいはわかりやすくご説明できるかどうか不安ではありますが、しばらくの間お付き合いいただけますでしょうか。よろしくお願いいたします。

私が今勤務している学校ですが、比較的運動意欲も高く、学校全体も運動部活動も盛んで、運動嫌の生徒もいないことはないのですが、授業については明るく積極的な雰囲気で行っているように感じております。

しかしながら、その裏には我々が実際その行動によってごまかされてしまっているという部分があるのではないかというのは、常々危惧しております。我々の力が無くても、子どもたちの明るさや活動力によって、あたかも体育の授業がうまくいっているかのような毎日が、実際にはあるのではないかとこのを心配しているところです。

そこで本校の教員などに尋ねてみたところ、あまりそういう意識がない教員もいて、「そんなこと気に掛けているんじゃない、毎日やること沢山あるんだよ。」というような言葉が返ってくることも、残念ながらあるのは事実です。

そうした中で、3年生の生徒と一緒に授業をしておりまして、「皆は高校を出たらこれ以上運動する機会ってなくなってしまうかもしれないね。」ということを生徒と話しますと、「先生、本当だね。嫌だ。」というような声が返ってきます。実際のところ子どもたちは体を動かすことが好きで、汗をかいたり、皆で楽しく動いたり、あるいは何かを学んだという意識をもちながら授業をしている姿は、本当に素晴らしいことだと感じています。

しかし、子どもたちの中でもこの時期、高校3年生を過ぎたら運動をする機会が減ってしまうのではないかとこのことを薄々ながら感じているようです。そこにはかなりの問題点があるように私は感じておりますし、実際に今回の答申で指摘された課題としてあるような、運動する子・しない子の二極化、あるいは体力の低下、それから運動の技能や知識など生涯にわたって運動に親しむ資質などが養われないまま、学校を出ていくのではないかとこのような点については、我々も今後気を付けていかなければいけない部分だと思っています。

実際、授業を観察していきますと、こちらが提示した内容について子どもたちが活発に活動したり、楽しく動いたりしている様子を見て安心しているだけでは、我々の責務が全うできていると思いません。

特に、私は球技が専門になるのですが、球技についてはそのもの自体が比較的楽しいというもののなので、どうしても我々が的確に課題をもって指導しなくても雰囲気だけが楽しくなることが



あります。例えば、ある子が行った仕草がおかしい、あるいは、ある子が滑って転んだとか、ある子がたまたま投げたボールが偶然にゴールに入ったとか、そういったようなことで授業が盛り上がり、さもその授業が活発なような雰囲気ではあるけれども、実際にはそこでは何も学びが無く、ただ楽しかった、汗をかいたという授業に留まることがあるのではないかと思います。

今回の学習指導要領の改訂では、小学校から高等学校までの12年間、指導内容の体系化が示されております。高等学校段階では卒業後に少なくとも1つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期とされております。私たちはその最終段階として位置付けられているところを任されているわけですから、その点はかなりの意識を持って指導をしていかななくてはならないと感じます。

そして、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てることというのは、本当に心に刻んで授業をしていかななくてはいけないと考えています。この目標を達成していくためには、1つは、生徒の実践を育むための計画と指導、それから評価の在り方が必要であると考えます。また、明確な目標をもたせることによって具体的な課題が発見できる、そして積極的に取り組むことができるというふうに考えています。

先ほど石川調査官の方からもありましたように、PDCAサイクルの件になりますが、指導と評価の一体化はPDCAサイクルで成立しているということは先ほどご説明もありました。生徒の活動の中にも当然、それが組み込まれていくことが必要であり、それによって子どもたちの活動が生まれてくるのではないかと考えております。

指導内容の明確化、つまり私達の身に付けさせたいことは何か、実践・指導法の工夫ということでは、どのような授業を我々は仕組んでいくのか、そして指導の結果、身に付けさせたいことが身に付いたかどうかを把握する到達度のチェック、これらのことが必要になってくるのです。そして、身に付いていなければどのような授業改善をするのかということ、螺旋状に情報を伸ばしていくような指導が必要だというふうに感じています。

新学習指導要領における球技種目から、バスケットボールを例に取りますが、球技は楽しいのですが、しかしながら難しいという側面ももっております。球技が苦手な生徒への配慮を支援して、ゴール型の特性に触れる授業。体育の授業と体力の向上といった点を念頭に置いて話を進めていきたいと思っております。

ゴール型の特性として、敵・味方が入り乱れながら攻防を繰り返すことが挙げられます。シュートやトライをめぐる攻防を展開させるというところに、ゴール型の特性があります。その中でも空いている空間に走り込むなどの動き、それから、マークを外して空間を作り出す動き、空間を埋めるなどの動きというのは、非常に子どもたちにとっては難しいところです。その1つの例に、今日も朝、テレビを見ておりましたら、フットサルの代表の試合がありましたが、その時に、小学生がその試合前にインタビューを受けていました。「今日はどのようなことを期待しているの?」という質問に対して、「カズ選手のドリブルで抜いた後のゴールを期待している。」というようなことを言っていました。多くの子どもたちはボールを持った動きにはかなり着目するのですが、ボールを持たない動きについては、目を向けていないとか気付かないということが、非常に多いと思っております。指導者我々は、そこに重点を置いた指導をしていくことが必要だと思っております。

諸々の問題点ということですが、私たちの授業の中でよくあるのが、経験者がボールを持っていってしまうということや、経験者が技術の未熟な生徒に対して、シュートチャンスを作り、ゴールの近くまで持って行って、外にいるフリーの子どもにボールをパスするのですが、実際にはシュートを打てないというような状況が生まれてきたり、あるいは守りについても経験のある者が1人でカバーしてしまうというような点も多々あります。そういった点の解消していくことも必要かと考えております。



バスケットボールを題材としてゴール型に共通する特性に触れ、攻防を楽しむことができる授業の一例ということをし、この後挙げていきたいと思ひます。

まず授業の最初の段階で、本校ではアイパッドなどを使用して、生徒にシュートのシーンと、パスやカットを用いて空間に走り込んで得点をするというシーンの2つを見せまひ。その際に子どもたちがどのような反

応をするかということをし出ししていくと、多くがボールを持った選手が得点をするシーンが良かったという答えが返ってきます。まだこの段階ではボールを持っている動きに対するイメージはあっても、ボールを持たないことに対する考えが、できてきていないと考えられるわけでは。ウォーミングアップやその次の練習の段階を経て、空間を認識する技能を身に付けさせていきたいと考えることになります。

まずはウォーミングアップで、しっぽ取りゲームというようなものをやったりするのですが、最初の段階ではただ逃げ回ることがメインになってしまひ、状況を見るということが非常に少ないのです。相手に背中を向けてしまひということが非常に多い状態です。ところが何回か繰り返していくと外側に回って中の状況を客観的に見る生徒が現れてきます。こういった生徒が現れてくると中の状態を把握して、どこが広いのか、あるいは敵はどこにいるのか、自分の仲間はどこにいるのかということをし断しながら動いているというふうと考えられます。

また、コーンタッチゲームなどを用ひて、ゴールを守ることに、空いているところに攻めるということを授業の中で組み込んでいきます。走り抜けるコーンの高さを右と左で変えています。左の方が若干遠くて、右の方が手前にあると、そのところで、短い方がディフェンス、遠い方を回ってくる方がオフェンスという形で攻防をしまひ。その際にオフェンスの最終目標は、手前にあるコーンにタッチをすること。ディフェンスの最終目標は、このコーンにタッチをさせないようにする。ただし、手で押さえてはいけないよという指示をしまひ。そのような過程の中で、生徒は自分が守るべき方向はどちらかということ、守るべき相手に対してどのように体を使うのかということをしびまひ。また、そのような細かい指示を最初の段階でしておくようにしまひ。

うまく止められた例ですが、止められた方は自分にとって左側、この写真でいったら右側の方が空いていることに気付き、かわしていくというようなシーンが生まれてきます。また、思考・

判断を促すために2対1の攻防なども用いてその意識を高めています。

ボールを持っている人間に対して、均等な位置、ちょうど二等辺三角形になるような位置で立っている場合に、子どもたちはかなり混乱をきたしますので、最初の段階でこのディフェンスの位置を把握させます。自分に近ければ相手にパス。相手に近ければ自分で攻めるという簡単な二択の選択をさせるような練習を最初に行いました。

実際に自分からディフェンスが離れていってしまったときに、この子はどのようにするのかという点を見てみると、思わず相手にパスをしてしまうというようなことが起きます。また、自分につかれているのに自分でドリブルをしてしまうというようなことも多々あります。このような段階では状況の判断などが十分になされていないというふうに見られます。しかしながら、もう1人の生徒が、どこが空いているかということを理解してゴールの下に飛び込んでいきました。そのことによって、もう1人の生徒に気づきが生まれ、ゴール下にパスをするというシーンが出てきました。

3対2の攻防についても同様に、最低限の知識を与えます。このように両側にディフェンスが離れているときにどうしたらいいのかというところを、やはり子どもたちは迷うところです。1人の子は、自分で攻めようとして引きつけて、空いたところに走り込ませてパスをするということをします。こういったことを授業の中で実際に行った後に、このようなシートに生徒に考えたことを記入させるようにしています。さっきと同じような場面をもととの図に記入しておきまして、このような時にどうする？というような形で生徒に記入させます。そうしますと、最初の段階ではかなりこちらの指導したものと違うような答えが返ってくるのですが、徐々に空いているところに走り込む、あるいは、空いているところにパスをするというような動きが出てくるようになりました。

実際に授業の中での振り返りと次への課題ということで、このような形でやったこと、それから、グループ化しておりますので、グループでどのような課題が出てきたか、あるいは、良いところといったことをここから学び取っています。

また、個人の振り返りということで、動きやチームでの役割などを分析できているかどうか、この子の場合には今日授業でやったことについて、しっかりと振り返りができているというふうに読みとれましたが、次の子については、楽しかった、あるいは、シュートが入らなかったなどの内容が多く、まだその辺のところの定着が図られていないということがわかります。

教師の指導したことがどのくらい身に付いているか、技能のポイントがわかる、あるいは言えるかどうか、それから、逆に努力を要する生徒や先ほどの個人のカードでも的確な言葉が返ってこないような生徒を早く見つけだして、適切な支援を行うことが我々にとって非常に重要であると考えています。

また、このように自分自身で理解をして出来るようになるということが、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力に繋がることになるということは言うまでもありませんので、その辺をしっかりと指導していきたいと思っております。

非常につたない発表でしたが、ご静聴いただきましてありがとうございました。

【高木 健】

皆さん、こんにちは。佐賀県から参りました高木と申します。非常にこのような場所は不慣れでして、うまくお話しができるかどうか、ちょっと自信がないところですが、どうぞよろしくお願ひいたします。



テーマにしましたのが、「体づくり運動」です。体づくり運動はもちろん体ほぐしの運動と体力を高める運動とあります。今回、体力を高める運動の計画を立てるということに着目をしました。発表には、体ほぐしの運動が出てきませんが、授業でやっていないわけではありませんので、どうぞ誤解のないようお願いいたします。

中学校3年生で取り組みをいたします。中学校3年生というのは、高校で運動部活動続ける者、それから中学校までは運動部だったけれども、ちょっと運動部はいいかなという者、中学校でも運動部ではないし高校でも運動部には入らないという者、このような三者がでてくるわけです。しかも、中体連の大会、中学総体が終わった後は、本校の場合は高校の方の部活動の練習にも行けるようになります。受験がないのでこうなるわけです。また、そのような状況の中で放課後全く運動しないという生徒もでてきます。この現状で良いのかという疑問もあって、そこに中3生への思いということであげていますが、中学校を卒業しても健康な生活を送ってもらいたい、体を動かしてもらいたい、との思いで、体力の維持・向上を願って今回取り組むことにしました。

取り組もうと思ったときに、授業で取り組むときに戻る場所というのがあると思います。先生方もそうだと思いますけれども、戻る場所というのは指導要領ですね。学習指導要領をみていきますと、体育分野の目標、とりわけ3年生の部分、そして体づくり運動の部分を解説も見ながら考えてみました。

そこで、本校は中高一貫校なので高校までの子どもたちを見続けることができますが、そうでない学校についてはやっぱり義務教育終了という中学校3年生までに何とかしなければならないだろうと思い、卒業した後も健康的な生活が出来るような体力の向上を目指すための方法をしっかりと中学校までには身に付けさせようと思ったわけです。そのためにはやっぱり、体づくり運動という非常に良い領域がありますので、ここを授業としてしっかりと扱い、生徒に知識とやり方、思考・判断にも関わってくる部分を身に付けさせたいと考えたわけです。

具体的には、ねらいに応じた運動の計画を立てることで、体力の向上の日常化を図ろうということを考え、授業に取り組もうと思いました。

今回のテーマが「知識、思考・判断」ということでしたので、授業とか部活動とかでよく「もっと考えろよ。」とか、「考えてやってるの。」という話をするのですが、実は自分でも言いながら、考えさせるための材料を子どもたちに与えていたのか、その材料が無い中で「考えろ」と言ってもなかなか考えきれないのではないかということから、そのための考える知識というのをおさえるところからスタートすべきと考え、まずはベースとして、思考・判断をするための知識に着目

をしました。

授業展開のイメージとしては、自己に応じた運動の計画を立てるということで、自己のねらいと、最終的にはねらいの達成という入口と出口を示すことを考えました。

その途中では、知識をベースとして、思考・判断を繰り返しながら、行ったり来たりと生徒自身が持っている知識を発揮させながら、「あれ、やっぱりわからないや。」「どんなことがあったっけ。」という試行錯誤の意識を持たせながら、ねらいの達成に向かう姿勢を持たせての授業をやってみようと思って取組んでみました。

スライドにある部分では、「知識の整理」としてありますが、解説をそのまま抜き出してみました。「思考・判断の整理」についても同じです。いったん書き出してみないとわからない部分が多く、まとめてみたところです。

評価基準に関しては、「評価基準の作成、評価方法等の工夫・改善のための参考資料」を参考にしております。今回の授業で評価規準として取り上げた内容については、中3と高1で授業展開して指導ができますので、本校の場合は中3を卒業した後に、高1でも同じ生徒を見ることができるところから、中3のところで設定をしております。

授業の実際については、ねらいはそこに書いている通りです。授業への手だてとしては単元構造図というのを作成しております。この中にデータを入れ、これが授業の設計図になろうかと思っています。何をどこで教えるか、いつ評価をするかということが一目瞭然というふうな形を一応とっています。

それから、生徒に対しましては、ワークシート・学習カードを使っています。知識の整理をする欄を check 欄、それから運動の計画とか運動の実践、計画の改善と思考・判断に関わるところを think 欄として、2つ分けて作っております。

これはまず、7時間計画の計画例ですが、第1時間目は1年次・2年次の振り返りということで、その知識をチェックさせています。これは、解説に記されていることをそのまま持ってきていますので、もう少しわかりやすい言葉で、あるいはイメージしやすい言葉に変えた方が良いのかなとも思いました。まだまだ教師の改善の余地があるところです。

カードは、A4版で1枚の縦書きで作っています。1年生・2年生の時にやった運動例をあげてみようという個所は、体のやわらかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する運動ということをあげさせております。ここがもとになって次の運動の計画ということに入りますので、1人で思い出させたり、グループ4～5人で、「こんなのあったよね。」「あんなのあったよね。」と、話をさせたりしながら書かせています。

それから、1つのねらいを効率よく、次の時間に複数のねらいをバランス良く、という指示も加え、振り返りをさせています。

そして、いよいよ3年生での内容ですが、「知識の整理」というチェック欄が2つ、次のワークシートということで用意をしております。それから、いよいよその計画に入っていきます。まず自己のねらいの設定ということで、コースを2つ用意しました。「健康に生活するための体力を高めるコース」と、「簡単に健康体力コース」の2コースです。想定したのは運動に積極的ではない、運動部以外の女の子、女子生徒というのをちょっと念頭におきながら設定しています。

それから、「運動するための体力を高めるコース」については、運動部に入っている生徒向きのものとして一応考えています。

どちらのコースについてもねらいがはっきりしていないとゴールがぼやけるということなので、
どういう自分になりたいかということを考えさせています。

まずは3時間目・4時間目で自己分析と生活面から、そして体力面からということで、4、3、2、1の4段階で評価をさせております。

そして下の欄の現状の分析から目標を立てようということで、ここでは、目標を言葉で立たせております。それをもとに次は運動を選択します。運動を選択するところでは、何が今自分に必要か、高めたい体力を決定し、どういう運動が適しているのかということ、1・2年生の振り返りシートで挙げた運動例を参考にしながら決めさせます。そして、運動の回数であるとか、強度であるとか、頻度であるとかを考えさせます。それをもとに1週間の運動計画を立てさせるのです。

実際自分の生活サイクルに入れ込むときには、運動にかかる時間を含め、1週間のプログラムを作る段階で、第1回目の修正が入ってきます。いったん計画を立てた後に、時間を1週間って実践をさせ、その後にチェック欄の「運動の原則」に照らし合わせチェックをさせ、反省と感想、良かった点と修正した方がいい点ということで挙げさせながら進んでいきます。

実践をしたところで、上手くいかなかったところについては、改善を加えて完成版となっていくのです。後はグループごとに発表会をして、その中から「おまへの良いね。」「ちょっと皆にこれ教えてあげよう。」というのを取り上げて発表させています。

評価の流れと教師の働きかけについては、国研の資料を参考にしているものです。

評価については、非常に迷ったところ、これがたぶん全てではないし、先生方からすると「それはちょっと違うのではないか。」とか「こういうのがいいんじゃない。」ということが出てくると思います。そこがものすごく迷ったところで、ぜひ先生方のご意見もお聞きしたいと思ったところ、そこです。

例に挙げた②③については、②というのは、自分のねらいや体力に応じて回数とか頻度とか強度を設定することができる評価規準になっております。③の方は継続しやすい運動を選ぶというところの評価規準になっております。

BとAの判断をそこにしていますが、実はこの前にプレ発表みたいな形で佐賀の方でいろいろな先生方にご意見いただき、その話の中で、教師が手を入れていけば、「十分満足できる状況」のAというところに最終的には行き着くのではないかという意見が出まして、そうしたらBという、「概ね満足」が「十分満足」という段階と重なり、ABCという3段階の必要はないのではないかという話にもなりました。手を加えていけば、このたぶん「十分満足できる状況」のAのところまで行くのではないかという考えにも、ぜひご意見をいただければと思います。

Aというのは、いったん考え、実践をして、改善をしていく中で、1番初めの計画が良ければ、そう改善することはなく、これは評価としてAということであり、その後に適切な修正・改善をしていった場合についてもAとするというふうにしております。

するとBの規準が、非常に弱いとか具体性がないとか曖昧であるというふうに思われ、本当に悩んだところ、そこです。

実際に生徒が立ててくれたプログラムの例ですが、これは運動部でない放送部の小柄な眼鏡をかけた女の子が立てたものです。日頃から体を動かしていない、握力などの筋力や柔軟性・持久

力など全面的に体力の向上をさせ、健康を維持したいということで自分のねらいを定めています。毎日ジョギングをしたり、腹筋・背筋・ストレッチをしたりということをあげています。反省としては、腹筋・背筋はわりと楽に出来、修正すべき点は、運動を日頃していないのに10分のジョギングはきつかったとあります。計画を立てた段階で話をし、「20分。どう？大丈夫？」という話はしたのですが、頑張り屋さんなので、「いや、先生、なんとか出来ると思います。」という回答が返ってきて始めたのですが、やっぱり20分はきつかったということです。「それでは考え直してみようか。」ということで、今度は「きつくなったら歩くけど止まらないようにする。」となりました。次には、「走る距離を少しずつ伸ばしていきたい。」となり、「腹筋・背筋の運動についてはわりと楽だったので、20回を2セットにしてみました。」という改善が行われました。この結果から評価は、Aということにしたのです。プログラムについても、選んでいる運動、それから続けられるかというところは、その生徒にとっては十分ということでAとしました。

この生徒との会話指導や学習後の感想では、「何かやるときに、3日、3週間、3ヶ月だよ。」というふうに話をしました。3週間くらいたった後に「どう？」と訊いたところ、「最初の頃に比べて少しだけ楽になるとすごく嬉しくてやりがいを感じました。これからも運動プログラムを続けて健康を維持できるようにしたいです。」という回答が返ってきました。「ああ、やって良かったな」という感想ばかりではないのですが、成果として評価したいということです。

やはり授業をしますと、ある程度8割くらいの生徒が、「やっぱり大事だよな。やってみようかな。」とは思ってくれます。ワークシートの記述の例で、直接評価基準とかに関係しない部分もありますが、授業してみて気付いたところで、例えば、「運動時間とか内容に無理はなかったけれども、夕方はちょっと暗くて安全とはいえなかった。」というのがありました。ウォーキングをしようと考えた女の子が、夕方はやっぱり危ないから明るいうちにウォーキングを取り入れようというふうに考えてくれています。あとは、「この通りにやれば効果はあると思うけど、続けられる自信がない。」ということで、「少しメニューを変えよう。」ということもありました。

課題として、その生徒にとって、その生徒の体力に応じた運動の選択とか強度とか時間とか回数とか頻度というのを、どう判断したらいいのだろうかというところです。同じ内容でもAくんには良いけど、Bくんにはちょっと足りないということもあろうかと思います。

逆の場合もあるかと思います。その判断を我々教師がどうみたらいいのだろうかということも非常に迷ったところなので、一応同僚の教師とか、高等学校の先生も含め7名で、いろいろと話をしています。学校によっては、中学校1人配置というところもたぶんあると思います。そのような場合には、部活の先生とかにも協力してもらって、その生徒の体力とか持っているものがどの程度で、どのくらいの運動なら適切かっていう判断を、話し合いをしながら進めていかなければならないと感じています。

もう1つは高校への接続をどうするかということです。今の中3が来层高1になりますから、この接続についても考えていかなければならないし、高校に入ってから、本校は一応進学校と言われているので、授業時間が延びてくる、勉強はしなければならない、その状況の中で運動できる時間がどこで確保できるんだろうということを、実際の生活の中で考えさせる必要があると思っています。

まとめとしては、やっぱり非常に大事な領域だと感じると共に、それが卒業した後も、「やはり運動続けたいかん、続けた方が良く、ぜひやってみたい。」というふうに、我々教師の方で

思わせる必要があると思いました。運動を続けようとか健康に生活しようという生徒を、1人でも多く育てていければと思ったところです。

【三戸部文彦】

皆さま、ようこそ札幌においでいただきました。本当にお待ち申し上げておりました。全国からということですが、今回は、次年度が東京開催ということで、東京の方がたくさんいらっしゃると思います。

東京の私の知り合いが札幌に出張に来たときのお話をちょっとしたいと思います。同じこの季節に、新千歳空港を降りて札幌駅に来たときに、駅を降りて大変寒いと感じて、駅前には大丸もありユニクロもあったので、「お、ユニクロがある。」ということで早速ヒートテックを買い、「これでばっちりだ。」とお店で着たそうです。その後、北海道に来たので夜はちょっと鍋でもつつきましょうということになりましたが、北海道は人も建物も内側が暖かいのです。建物には断熱材が入っています。さらに暖房が入っているこの季節。そこで鍋をつついて、ビールは美味しいということで汗をかきまして、その後外に出て、風邪を引いて次の日の出張仕事がダメになるというパターンがよくあるという話でした。今、インナーに何か厚いものを着ている方は、夜、鍋の時には十分ご注意ください札幌の夜をお楽しみ頂ければと思います。札幌市教育委員会の三戸部と申します。どうぞよろしくお願いいたします。



私は現在教育委員会におりますが、昨年度までは今回の北海道大会に向けて取り組んできた、北海道学校体育教育連盟の一員で、明日小学校会場になっております白楊小学校に勤務しておりました。

今回のシンポジウムで求められているのは、小学校の「思考・判断」ということで、私の話はだまかに3点。小学校で育てたい思考・判断の力。2つ目は、実際の授業場面での指導と評価。そして3つ目に、学校全体・市全体に広める取組。その中で教育委員会として、あるいは体育専門の私達一人一人、それから研究団体としてなすべきことを提言したいと思います。行政側の立場ということではありますが、北海道にいる体育を志す一人の教師としての立場から、ご提案できればと思っています。

私の話の中のキーワードは「繋ぐ」という言葉をあげたいと思います。本題に入る前に、今年の夏は日本全国、ロンドンオリンピックで大変盛り上がりました。水泳、サッカー、体操、卓球などメディアに多く登場する種目だけではなくて、アーチェリーの女子団体とか、バレーボール女子のハラハドキドキのメダル獲得という、専門としてそれらの競技に携わっていない人、あるいは、特に子どもたちに、スポーツの素晴らしさを伝えてくれたと感じましたが、私が心に残っているのは、選手一人一人のコメントです。

例えば「なでしこジャパン」。岩清水選手が試合後に「立ち上がりの失点で勢いに乗っていけなくなった。ただ、試合内容は良かった。ボール回す時間も増えたしチャンスも本当にあったので、決めるところを決めていたら。アメリカの守備を左右に吊っているのも見えていた。」というふうにコメントをしています。ただ闇雲に運動をするのではなく、まるで将棋の羽生さんが自分の棋譜をずっとお話しされるように、わかって動いているのです。さらには運動の言語によるイメージ化が素晴らしくて、「守備を左右に吊っている」という言葉は、まさに的確な表現ではないかと思いました。

さらに、宮間選手は「仲間のことを誇りに思う。ここまで来られたことに仲間とバックアップの選手、スタッフ一同に感謝している。」と、運動を通して人との関わりの良さを感じて、周りへの感謝を述べるというコメントが他の選手にも多くあったのです。

学習指導要領の体育科の改訂の趣旨には、「身体能力を身に付けるとともに集団的活動や身体表現などを通してコミュニケーション能力を育成すること」や、「筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに」というような文言があります。メダルの獲得を支えたのは高い技能は勿論ですが、こういった思考・判断の部分や、態度・心の部分、教科としての体育が目指す部分と非常に重なると感じていました。

さて、小学校体育授業における、指導と評価の基本的な考え方としてここにありますように、「捉える、関わる、そして見取る」という、一連の評価観をもつということを大切にしたいと考えています。

育てたい力を明確にもつ。それは、今の時間、あるいはこの単元という焦点化したものから、この学年でとか小学校でという位置においてという見方で、目指す方向性を確かにすることです。その方向性の中で、どの程度身に付いているか、その学習状況を捉え、その捉えからどんな手だてが必要なのかを具体的にもって関わり、さらに、育てたい力がどのくらい身に付いたかということを見取ること。評価から指導に繋ぐ営みと、方向性をもった捉えや見取りを、今の指導や次の時間の指導へ繋ぐ営みを大切にしたいと考えています。

その育てたい力というのは、これはまさに学習指導要領の目標にあたるわけですが、特に「思考・判断」の場合については、「気付く、選ぶ、見付ける、工夫する」という力を一人一人が身に付けていく授業を展開します。この気付く、選ぶ、見付ける、工夫するという姿はどこからきているかという、まさに解説を読んでいくと浮かび上がってきます。体づくり運動の思考・判断の文言でいうと、低・中・高学年にそれぞれにこういう姿が生まれることを目指し、そういう姿が表れる授業を構成します。選ぶ力を育てたいという目標から選ぶ場面がある授業が必要であると考えます。何をどのように選ぶかというあたりに体育の教材研究の醍醐味があると感じています。体づくり運動以外でも、知る・選ぶ・見付ける等については、このような文言が出ております。

つまり、良い動きや攻め方を身に付ける力を育てるならば、互いに授業の中で動きの良さが見える場、あるいは学習展開、授業場面を構成していくことが指導と評価の一体化、さらに言うと、指導と評価と学習展開が一体化するというふうに考えます。

ただ、場や学習展開を準備すればそれで良いというわけではありません。特に教師が目指す子どもの姿に向けて、どう関わるかということが大事になってくると思います。低学年では良い動

きを見付けるといことでいくと、1年生に良い動きを紹介するという関わりが担任として必要になってくると考えます。中学年では練習方法を選ぶ、場を選ぶということが、練習方法や場の意図を理解できるようにしなければなりません。高学年では、自分の課題に応じたというわけですから、自分の課題に応じて、今自分がどのくらいにいるかということを、しっかり自分で捉えるということが必要になってくると考えます。

写真を見ながら説明します。台上前転、4年生の授業の写真ですが、左下の写真は、台の上で横に落ちてしまうという課題をもっている子が取り組んでいます。2台の跳び箱を並べて真ん中に頭が通るところができて落ちづらくなるわけですね。くぼみができることで、安心して取り組める場。右側の下は、台上前転の後に向こう側にすぐ落ちてしまう、お尻から落ちてしまうことが非常に怖いという子のために、跳び箱の向こう側が長い台を使って、練習できる場。それから、上の方の写真は、出来てはいるが、低い台で自信を積み重ねたいという子の場。それらの場の練習方法やメリットを子どもたちが正しく理解することで自分に合った意識で運動に取り組むことができますと考えます。このように、評価観を授業に繋ぐということが大切になると考えています。

さて、具体的に授業の中で方法、評価についての方法ですが、授業の中では効率的・効果的に評価することが求められます。例えば5時間構成の単元の中で3観点評価とすると、単純に考えると 3×5 で15回の評価になるわけですが、これを40人学級で行うと、かける40ですから600回になるということになります。小学校の先生は1時間目から6時間目までいろいろな教科を教えますから、例えば1時間で600回を6時間になると、3千回以上となります。3千回以上評価をしていては、私が申し上げている、評価を授業に繋ぐ、評価を指導に繋ぐということには繋がらないということは言うまでもなく、だからこそ効果的な評価が必要になると考えます。

私は特に「思考・判断」の中では、単元の中で重点的な場面を設けて1～2箇所では評価する方法と、もう1つは毎時間同じ評価の物差しを持って、その部分をクローズアップで見続ける方法を単元の領域や運動の特性によって使い分けていくということが良いと思っています。例えばゲーム領域の授業などでは、単元の中で、ある程度思考・判断の高まりが見られそうな場面、ゲームにも慣れ、用具の扱いにも慣れてきて、動き方や作戦などに対する意識が芽生えて育つ時間にその視点を集中的に絞って、思考・判断の観点から子どもの状況を見取り評価に繋ぐことが有効です。器械運動の領域などでは、自分の今の学習状況を自分でつかんで、自分に合った課題をもって場を選択していることがフィットしているかどうか。そういう評価の眼鏡を持って、子どもの取組を見続ける。言ってみれば、同じ景色を長く見続けることで、変化を見取るという、定点観測のような方法が合っていると思います。

さて、評価をどのように授業に繋ぐかということですが、1つの方法として学習カードが挙げられます。このカードの記述で見取り、それを次の授業の初めに紹介して、全体の課題に繋げるという場面の写真です。これは授業をゆるやかに方向付けるということとともに、取り上げられた子どもの自信にもなり、課題に共感しながら学ぶことに繋がります。同じ視点から単元を通してどのような課題意識をもっているかということをトータルで見取るということに繋がります。

さらに、それらを授業中に見取り、全体交流の中で位置付けるという授業への繋げ方もあります。全体の場面では運動課題の解決のきっかけを子どもたち自身の言葉で出し合い、共有し、次

の活動へ繋ぐことも大切です。この全体での交流は運動への課題解決において重要な部分になります。北海道が大切にしてきた、共に学ぶ姿、体育ならではの人との関わりを通して学ぶ姿、さらには、運動の課題解決を支える言語活動の充実によって、互いに学習が響き合う姿に繋がる大切な場面だと思います。むやみに交流の場を長くすると実運動時間が少なくなるということになりますので気を付けなければなりません、子どもの言葉から出てきた気付きや解決の糸口を板書、あるいはキーワードにまとめる、あるいは図を有効に使って位置付け、共有化していきます。この場面の見とりは単元の中でも1～2箇所絞って、思考・判断の表れが顕著になると予想される場面で、発言内容や場面によってはネームカードで判断した足跡を残して捉えていくということです。この写真のように、何気ない場面のように見えますが、子どもの中に入って、子どもの声を聞き取って思考の流れをつかみ、即時的に子どもに返す取組というのも大事だと思います。先ほど申し上げたように評価をチェック的な側面のみに追われてしまうと、このような教師の姿は見られません。チェックボードを持って遠くから眺めていてはわからない、こうした子どもに寄り添って思いを引き出す、子どもの中に入ってきめ細かに見取る姿勢が、小学校教師としては大切な評価活動の1つと考えています。

子どもの輪に入っていって、それぞれが持つ課題や意識を聞き取り、方向付けたり価値付けたり、あるいは直接指導をしたりと、子どもを先の活動へと繋ぐ評価活動です。こうした関わりの中で引き出したことを蓄積していきます。

このように思考・判断の観点に関わる評価活動は、その運動の質、その単元の構成にあった形で、計画的に、かつ柔軟な方法で見取りつつ、子どもの学習活動に繋ぐことなのです。つまり、評価を指導に繋ぐ活動が大切になると考えています。

さて、最後に体育の良さを全体に繋ぐという話をします。小学校の先生方は私も昨年までそうでしたが、体育だけではなくて国語も音楽も、高学年は家庭科も、私はミシンもやりました。全て授業を行う小学校の先生方の中に、体育を専門としている先生は約1割です。この1割の先生方の授業だけではなくて、残りの9割の先生方、体育専門外の先生方への働きかけが大切であると考えます。札幌市教育委員会では評価基準と指導の手だてについて、図を用いながらわかりやすく表した「札幌市教育課程編成の手引」を全ての先生方にお持ちいただいております。学年で打ち合わせをするときなどに、ぱっと見て、目標や場、教師の声かけ、安全に関する配慮事項まで、わかりやすい構成になっています。じつは私は、国語とか理科とか音楽などの指導で、ちょっと困ったときにこの1冊で授業のイメージを作ることができました。体育専門以外の先生方に安心して授業に取り組んでいただくのが大切ですし、そこから札幌市全体の子どもの体力向上に繋がればという願いをもっています。

札幌市教育委員会では「子どもの体力向上リーフレット」というものを市立学校、幼児・児童・生徒全員に配付しました。例えば、日常の中でエスカレーターに乗らないで階段を使ってみよう



など、いろいろな運動の機会を紹介し、試してみようというような運動への啓発を日常生活の視点から働きかけています。

また、体育授業の充実を目指して、札幌市教育研究推進事業、通称札幌教研事業といいますが、市内10区で年2回研究事業を行い、実践交流、実践研究から専門性を高める取組、実技研修会等も行っています。

さらに、これは北海道学校体育研究連盟の札幌支部の取組ですが、連盟研究部が中心となって体育専門の先生方以外の先生方を対象に実技研修会を開催しています。研究の成果を札幌市全体に返す取組として、毎年多くの参加者を集めています。連盟の研究推進を内側だけで帰着させるのではなく、札幌市全体の体育授業の充実、ひいてはそれが札幌市全体の子どもの体力向上に繋がることを願って行っています。

私のお話しした内容は小学校での体育授業における指導と評価の一面でしたが、これらの評価、指導を子どもに返していく中で、子ども自身が、運動を授業だけで終わらせるのではなくて、授業を核として休み時間や放課後など日常の遊びに広がること、それから将来に向けて運動できる体と運動を求める心、運動を考える思考・判断の力、そして人生を通しての運動への関わりへと繋ぐことを、授業を通して目指してやってきました。

また、明日はそういう授業をご提案できると確信しております。その願いが、午前中の研究部からの提案にありました、授業から日常へ、授業から未来へと繋がるかと思います。

もし時間があれば、「ピンチの今こそ学校体育のチャンス。北国の挑戦」という話もお話したいと思います。どうもありがとうございました。

【岡出美則】

どうもありがとうございました。後ろの時間を気にしないとダメになってしまっているという状況かと思います。山下先生の講演の時間等の関係で、私が最初ご紹介した時間の通りには、進められないかなと今判断をしているところですが、フロアの方からご意見、あるいはご質問があれば少し伺いたいと思いますが、どなたかございますか。

いらっしやいませんか。大丈夫ですか？大丈夫でしたら、残りの時間が実質、もう10分少々となっていました。今、シンポジストの各方々が語っていただいたことの中で、私たちはいくつか確認をしなければならないことがあると思っています。

何点か挙げたいと思いますが、石川調査官は評価観点をバランス良く授業作りの中に生かしていただきたいというご指摘をされました。実際に授業の場面を考えていただきますと、意外にこの「思考・判断」を適切に評価する場面を位置付けるときにかなり苦労されている、あるいは設定していないということが起こっているのかなと思います。

二例お出しするとわかりやすいと思いますが、例えば球技の授業等で、子どもたちに「自分たちのゲームを見て自分たちのチームの課題は何かを話し合ってごらん。」と投げかけ時間提供すると、いつまでも話をし続け、話が終わらない。下手すると1時間それで終わりましたということがあるのです。単元の中でそういう1時間が位置付けられることも悪いとは思わないのですが、結果的にそういうふうになってしまったというケースはたぶんあると思うのです。次は逆に、

「そういう時間は、運動量確保から考えると好ましくない所以我は一切設定しません。」と。そんな時間あるくらいだったら、もっと子どもを動くようにするんですと発言される方もおられると思うのです。

今のは、極端な二例だと思いますが、このようなケースから言えることは、改めて評価観点として「思考・判断」が設定されても、実際には授業される先生方が「これはあまり大事じゃないな。」と思われた場合には、その場面が授業の場面から消えていってしまうということなのです。あるいは、そこだけがものすごく強烈に時間をとってしまって「まあそれでもいいや。」という形で取り入れられ、単元全体、あるいは体育の授業全体で目指していくところとは、全然違う授業が展開していくリスクを常に負っていることだと思います。

このことは、何故体育の授業の中で知識、あるいは思考・判断なのかということを私たちが改めて問い直すことが必要だということの例なのです。そのことに関わっては4名の先生方から具体的に、その手続きも含めてご紹介していただいたということになるのです。

また、今日は設計図というお話をさせていただきましたが、設計図と授業の計画を立てられる際に、子どもたちが持っている、子どもたちなりの知識だとか運動能力だとか、それをどのように先生方が見越しているのかという話にもなっていきます。例えば、須黒先生がご紹介されたようなことは、「子どもたちは当然知っているでしょ。」というふうに言われる方もいれば、「子どもにはそんなこと難しくて出来るわけないでしょ。」との捉えもあります。例えば、こういう話もあるのですが、私達自身が学習指導要領が変わる前に、「小学校4年生の子どもたちに、ボールを持っていないときの動きを教えてみたいんですけど。」という話をする、「そんなものは部活でやることであり、授業で教えることじゃないですよ。」と言われたことがあります。

これでは、子どもたちは、「何故ボールを持っていないときの動きが出来ないのかということに関しては理由がよくわからなくてもいい、教える必要がない。」ということで切られちゃうわけです。でも、子どもたちなりにやっぱりいろんなものは見えていますから、全然知らないわけではないわけです。私たちが知ってほしいということを知っているわけではなくとも、そういう感覚というのは必ず子どもたちは持っているのです。

例えば今日、須黒先生がお話しされたようなことでいえば、ボールを離しちゃダメな時に、離すんですよね。それはボールを持っていることが攻撃をするときには、チームとしてはものすごく大事だということが、子どもたちの論理の中には欠けていることを意味しています。責任回避をするっていうことですよ。「誰かに渡しておけば、私の責任にはならない。」と。だからチームとしてやるということに対して必要な課題が何かについていることに関しては、ある意味、知識が欠けているとなります。このようなことを改めて問い直してみますと、子どもたちが、私たち指導者が期待している行動を子どもたちがとれない理由は、実は子どもたちの経験の中に根ざした知識だとか、あるいはある種のイメージが学習を妨げていることに求めることもできます。

他方で、先生が言ったからすぐに変えられるかという、そうではないことも事実です。学習には時間がかかり、子どもが納得できるようなプロセスをきちんと踏んでいく必要があるのです。



それは今日、例えば、高木先生のお話からいえば、いろんなところで試さないといけないということに繋がります。計画を作ったけれど、これがまともかどうかは試さないといけない。試したけど上手くいかないとか、試したけど自分が上手くなっているかどうか評価できない。こういう子どもたちというのは当然出てくると思います。そうしますと、お互いの中で、「これは上手くいったのかよ。」とか、「なんで君はそういうことを言うんだよ。」とか、そういう話し合いをする時間も当然必要になってくるのです。これは、子どもたちが学習したことを、子どもたちが納得できるようにしていくプロセスというものを、どのように私たちが保障できるのかというところにもう一度戻るってということだと考えます。

そのようなことを踏まえますと、シンポジストの方にお話しする機会を取れない形で終わらせていただいて申し訳ないのですが、二つお話をして締めくくりたいと思います。

一つは、指導と評価の一体化にかかわり、授業の質保証という話を私がしましたが、一番大事なのは子どもたち、児童・生徒の学習をいかに豊かなものにもっていけるのかが、そこが原点になるということの確認です。そのため、先生が満足するために授業をしているわけではなく、子どもたちが豊かな学習をし、それが生涯にわたってスポーツに親しんでいくような資質能力の獲得



というところに、各々の発達の段階を踏まえて、私たちがいろいろなトライアルをしていくということになるかと思います。改めて子どもたちの学習を豊かにするために、私達は授業の計画、それから実際に授業中の行動、それから成果の評価というサイクルをどのように生み出していけるのかを思考・判断、知識のところが大変わかりやすいターゲットだと思いますので、そこを切り口に考え直していくことができればいいのではないかと思います。

もう一点は、私たち自身が意外に意識していなくて「これは大事ですよ。」と言われているものの中に、評価をするときに、評価方法をセットにしているかということです。どの場面で評価をするかということは、当然単元計画等を考えるときに、何時間目に何の評価をしますということで、単元計画の中にその場面が設定されるわけです。

しかし、「これは、どういう形で評価されるのですか。」と問われると、三戸部先生がいみじくも言われましたが、一クラスに40人の子どもがいて、40人の子どもが1時間終わったときに、「何がどのくらい出来ていたか、先生言ってください。」と聞かれると、その根拠は何かも含めると、たぶんパンクしてしまうことが多いのです。

その時間の中で、あるいは単元全体の中で、子どもたちの実態を評価して、なおかつ授業の改善に繋がるような評価の方法というのを、何を評価するのかということと同時にセットで予め考えておくことが大切であり、大変なことなのです。これはバックワードデザインという形で、指導と評価の一体化というものが提案されたときから言われていることではありますが、具体的な話になると辛いんですよね。わからないというか、意識されないままにきている問題だと思います。

そういう観点から、改めて本授業、あるいは単元計画、あるいは年間計画というところに戻っていただくと、授業の質の改善ということについては、新たな可能性が見えてくるのではないかなと思います。それは、先生方が一人一人で行っていただけるというものではなくて、やはり集団として、組織として共有していくことが大切です。こういう機会を通して一緒にやっていけるようなお仲間が増えればというふうに思います。



50分から山下先生のお話が始まるということで、もうこれがタイムリミットということです。司会不手際で申し訳ありませんが、最後に4名のシンポジストの方々に盛大な拍手をいただければと思います。どうもありがとうございました。

特別講演

「武道と人づくり」

講師

東海大学理事・副学長

NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

山下 泰裕



北海道庁旧本庁舎 赤レンガ(札幌市 中央区)

特別講演

「武道と人づくり」

NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長

東海大学理事・副学長 山下 泰 裕

山下泰裕先生のご紹介をさせていただきます。

山下先生は昭和32年、熊本でお生まれになり、幼少期虚弱だったことから柔道を始められましたが、東海大学2年生の年に全日本選手権で優勝を果たし、怪童から怪物と呼ばれるようになりました。無敵伝説の始まりでもあり、同大会を9連覇。そして、その勢いで59年、ロサンゼルスオリンピックでは、対戦中に肉離れを起こしながらも勝ち続け、金メダリストになるという素晴らしい業績をあげられました。日本人にとってはエジプトのモハメド・ラシュワン選手との対戦は忘れられない名勝負、名場面だったのではないのでしょうか。

その後、いろいろな分野で活躍され、現在は東海大学理事副学長、体育学部長の要職に就任され、また柔道を通じた国際交流にも精力的に取り組んでいらっしゃいます。

私たちは、教育現場において、遊びや体力づくりから、心づくり学びづくりへと絶えず考えている中、本日の演題「武道と心づくり」を山下先生からいただきました。それでは山下先生、どうぞよろしくお願いいたします。

ただいまご紹介いただきました、東海大学、柔道の山下でございます。

全国学校体育研究大会北海道大会の特別講師としてお招きいただいたこと、大変光栄に思っております。そしてまた、大会のためにご準備されてこられた関係者の方々のご尽力に、心から敬意を表したいと思います。

今日は、「武道と人づくり」という演題でお話をさせていただきますが、主として私の体験を通した話をさせていただきたいと思っております。私の話の中心は柔道ですが、これは武道全般、あるいはスポーツ全体そのままにあてはまることと思っております。少しばかり写真も準備してきましたので、これを用いながら話を進めさせていただきたいと思います。



まず、1枚目の写真ですが、これは私が保育園時代に同い年の同級生と一緒にバスの前で撮ったものですが、どこに私がいるかわかりますよね。真ん中にいるのが私ですが、実は私だけが台の上に乗っているのではないのです。いかに小さい頃から大きかったかということです。体が大きいだけではありません。非常に元気がありました。元気があり過ぎました。このあり過ぎた元気・エネルギーが悪い方にいって、実は私は小さい頃から大変な問題児でした。

これは今から28年前にロサンゼルスオリンピックで優勝して、郷里・熊本に帰ったときに小学

校時代の同級生が集まってくれまして、お祝いの会を開いてくれた時の写真です。そのお祝いの会で友人たちにもらった記念が、この表彰状でございます。ちょっと、読んでみます。

「表彰状 山下泰裕殿。あなたは小学校時代、その比類稀なる体をもてあまし、ケンカをして相手を泣かせたり、教室で暴れたりして、我々同級生に多大な迷惑をかけました。しかし、先のロサンゼルスオリンピックにおいては、我々同級生の期待を裏切るまいと、持ち前の闘魂を発揮し、不慮の怪我にも関わらず、堂々と金メダルに輝かれました。このことは、小学校時代の数々の悪行を精算して余りあるどころか、我々同級生の誇りとするところであります。よってここに表彰し、偉大なるやっちゃんに対し、最大の敬意を払うとともに、永遠なる友情を約束するものであります。」

当時いかに私が悪かったか、この表彰状がその全てを表していると思います。

私が柔道を始めたのは小学校4年生の時ですが、4年生に上がる前に学校で大きな問題が起きました。なんと、私のクラスメイトの中に学校に行けなくなった子が出てきて、いろいろ調べたら、その子は「やっちゃんが怖い。やっちゃんが怖くて学校に行けない。」ということでした。これがきっかけで両親は私に柔道を勧めました。「このままいったらうちの息子は将来、人様から後ろ指をさされるような人間になってしまうのではないか。」と心配したのです。

我が家で柔道、あるいは武道の経験者は1人もいません。でも、両親の頭の中には、「柔道っていうのは、武道っていうのは、もっと大きく言いますと、スポーツっていうのは、単に勝ち負けを競うだけじゃない。その技術・体力を磨き高めるだけでもない。人間を育み、育ててくれるものではないか。柔道をやらせたら、少しは周りに迷惑をかけない子どもになってくれるのではないか。」こんな期待があったようです。

激しいスポーツである柔道。私は、柔道に惹かれ、夢中になりました。何と言っても、教室で暴れると、物を壊したり仲間に怪我させたりするわけです。でも柔道場だったら、先生の指示に従ってルールを守ってやれば、いくら暴れても、暴れまわっても、誰からも叱られることはない。柔道は、私の有り余ったエネルギー・闘争心を存分に満たしてくれたのです。

話は変わりますが、私は、意外に思われるかもしれませんが、過去を振り返るのは好きではありません。どんなに頑張ったって自分の過去を変えることはできない。そして、私が見ているスポーツの世界の範囲では、過去を大事にしてる人ほど、今があまり輝いていないような気がしてならないのです。私は、過去の栄光に生きる人間ではなくて、今に生きる、あるいはこれから生きる、そんな人間でいたいと思っています。

私は現在55歳です。ロスのオリンピックで優勝したときが27歳でした。三段跳びに例えると、あのオリンピックで優勝するまでが私のホップであり、去年までがステップ。そして、55歳のこれからが俺の本番、ジャンプなんだと思っています。いくつになっても前を向いて、夢や理想に向かって現実を直視しながら歩いていきたいという思いで生きております。

そんなことから、私の目に着くところには、一切過去の栄光の品々というものはないんですが、たった1つの例外がこの表彰状ということになります。我が家の小さな書斎の入口にこれを掛けております。

これを見ると、小学校時代の同級生の顔が浮かんできます。私の生まれ育った九州山地の近くにある、山や川が浮かんできます。童心に戻れるような気がしますし、小学校時代の同級生の「やっちゃん頑張れよ！俺達も頑張るからな！」そんな声が聞こえてくるような気がするんです。いくつになっても前を向いて、この瞬間を大事にして生きていきたいなあと考えております。

私はこれまでを振り返って、非常に恵まれた人生を歩んできたと思っております。特に人との出会いに恵まれました。今、写っておりますのは、私の柔道の二人の恩師でございます。中学・高校時代の恩師が向かって左側の白石礼介先生。そして右側が、高校途中から現役を引退するまでずっとご指導いただいた佐藤宣践先生です。二人とも日本では指折りの柔道の指導者でした。しかし、二人に共通していたのは、「単に柔道のチャンピオンづくりを目指すのではない。人生のチャンピオンづくりを目指すのだ。柔道は人づくりである。人間教育である。」このあたりが、指導者としてのすごい実績を残されながらも一番大事にされていた部分であったと思うのです。この二人の先生の情熱・愛情を存分にいただいた私は、柔道選手としてすくすくと順調に成長していきました。

白石先生のもとで、熊本から日本へ。佐藤先生のもとで、日本から世界へ。私自身は羽ばたいていくことができました。今日は、中学校時代の白石先生から学んだことを、少しお話しさせていただきますと思っています。

私が進んだ中学校は、私が入ったときには9年間公式戦無敗。私が中学1年から3年まで全国中学生柔道大会3連覇というすごいチームでした。そこを率いるのが白石先生でした。先生が教えられたのは、試合で勝つための技術・体力・戦術だけではなくたのです。柔道家や人間としての生き方・在り方・心構えを我々に繰り返し繰り返し話されていました。

私は、先ほどのように小学校時代までは本当に問題児でした。生意気で親の言うことも聞きやしなかった。しかし、柔道だけは好きだったのです。この恩師から、勝ち負けだけの柔道じゃない、人づくり・人間教育の柔道を繰り返し繰り返し指導を受けて、このことが私の頭のとっぺんから体に染み渡るように入っていき、私自身が変わっていったような気がします。

先生の教えで、特に心に残っている一つは、「ええか、皆が目指すのは、単に柔道のチャンピオンじゃないぞ。皆が柔道を通して学んできたこと、例えば、目標に向かって頑張ること。誰よりも努力すること。失敗しても失敗しても立ち上がって向かっていくこと。仲間と力を合わせる。ルールを守ること。辛抱すること。あるいは、弱い人には手を差し向けること。闘った相手を尊重すること。こういったことは柔道だけじゃない。普段の生活、あるいは人生でも大事にしていかなければいけないことなのだ。柔道を通して学んだこと、これを日常生活や人生で生かすことが大事なんだ。どんなに柔道で頑張ってもチャンピオンになったとしても、精一杯頑張っても、30前後で現役は終わる。そういうことをしっかり学んで実践していけなかったら、柔道ではチャンピオンになれても、人生のチャンピオンにはなれない。この30名くらいいる部員の中で、1人でもそういう柔道チャンピオンが出ればいいけれど、例え柔道のチャンピオンが出なくても、そういう意識で中学校生活を送り、一生懸命柔道に勉強に普段の生活に励んでいけば、皆が人生のチャンピオンにはなれるはずだ。大事なことは柔道を通して学んだことを普段の生活、あるいは人生で生かしていくことなんだよ。そして、人生のチャンピオンになるためには、勉強も大事にしていかなければいけないんだよ。」そんな話をよくされたことをしっかり覚えています。

面白いものです。それ以降の私は、中学・高校・大学時代も授業を受けるときには一番前の最前列に座って授業を受けるようになりました。その習慣は50近くまで続きました。全日本中の監督をしている当時は、私だけではなく柔道チームのコーチングスタッフ・サポートスタッフ皆が、一番前の席でいろんな勉強会・講習会等を聞いていたものです。ちょっとにぶいものですから気付かなかったのですが、一番前の最前列の真ん中に私が座っていると、講師の人が非常にプレッシャーを感じて、講師の人のリズムを崩してしまうということに、50歳になって気付くようになりました。今は決して、最前列の真ん中には座りません。前から3分の1くらいの、右か左の端の席に座るように心掛けております。何が言いたいのかというと、中学生時代の教えというのは、その後に大きな影響を与えるということです。素晴らしい指導者との出会いが、私にそういう習慣をつけさせ、人生を変えたのでした。



もうひとつ、先生の教えとしまして、「皆、柔道強くなりたいか。だったらまず最初に心掛けることは、自分のことを思いアドバイスしてくれる人の話を素直に聞ける人間になることだ。ええか。俺の話だけじゃないぞ。お父さん、お母さん、先輩、いろんな人の話だぞ。時には厳しい話もあるだろう。しかし、自分を思ってくれてくれる人の話を素直に聞くこと。これが強くなるために一番大事なことだよ。」これは何度も話されていたことでした。

我々は普段、「強くなるためには人一倍の努力だ。目標を明確にもつことだ。やらされる稽古ではなくて、自分から進んでやることだ。自分で考えて、創意工夫を発揮していくことだ。」と、こんなことを話します。どれも大事だと思いますが、今私が柔道選手が強くなるために何が一番大事かと言われたら、おそらく私は恩師と同じ答えをします。「皆のことを思ってくれる人の話を素直に聞ける人間になれ。」と。

そして現在55歳、東海大学で体育学部長や副学長を務めておりますが、大人になればなるほど、子ども時代よりも、この精神というものがより大切になってくるのではないかと感じております。

併せて、先生はこんな話もされました。「柔道の試合会場に行ってみろ。高校生、大学生、警察官、社会人、ちょっと『俺は偉い』と勘違いしている連中が、偉そうに肩を怒らせて歩いているだろう。ええか。彼らは一流じゃないからな。自分の強さをそうやって人前でひけらかし示そうとする。そんなのは本物じゃない。二流、三流だ。決して、あんな柔道家にだけにはなってほしくない。強くなればなるほど、謙虚さが必要なんだ。そして本当の強さをもった人間ってというのは、相手の痛みがわかるものだ。強くなればなるほど、優しくなれるんだぞ。ならなきゃいけないんだぞ。」と。この教えも非常に心に残っております。

現役時代の私は、相手の選手から見たら鬼みみたいな選手として、相手の選手の夢を全部潰していく選手でした。現役終わって27年、全日本の監督が終わってから12年経ちました。闘うことは止めたいと思って、この12年間を生きてきました。むしろ私が目指したのは、「私の体全体から優しさがしみ溢れるような人間になりたい。」という思いです。

強くなればなるほど、優しくなれる。これからも、この恩師の教えを大事にしながら、併せて、少しでも傲慢にならずに、謙虚に誰からでも学ぼうという姿勢を大事にしながら、教育者として

のこれからの人生を歩んでいきたいと思っております。

この写真は私が大学2年生、当時19歳史上最年少で全日本柔道選手権で優勝したときの写真です。向かって左側が、私の祖父でございます。右側が、東海大学創設者、松前重義先生です。松前先生は私と同じ、熊本のご出身でした。若いときに、柔道を通して心身を磨き高めたことが自分の人生の土台をつくったとして、東海大学・学園を通してスポーツを非常に奨励してきたのです。

同じ熊本出身であり若い頃柔道をやっていたということで、松前先生は私を非常に応援してくれました。亡くなられた後、関係者の方から聞きますと、「山下君、松前先生は君をじつの孫のように思っていたんだよ。」こんな話も聞きました。先生は私をいつも、チャンスがあれば自分の近いところに置いていろんなことを学ばせようとしていたようでした。そんな先生の行動、あるいは発言を身近で感じながら、私自身も人生をいかに生きるべきか、人間はいかにあるべきかといったことを真剣に考えるようになっていきました。

先生は亡くなられる前に、何回か私を呼ばれ、こんな話もされました。「山下君、僕は君を真剣に応援してきた。僕はなんで君をこうやって真剣に応援してきたかわかるか。試合で勝ってほしい。もちろんこれもあった。しかしそれだけじゃないぞ。君には日本で生まれ育った柔道を通して、世界の若人と友好親善を深めてほしい。いや、それだけじゃない。君には将来、スポーツを通して世界平和に貢献できる人間になってほしい。だから僕は君をこうやって応援してきたんだよ。わかるか。わかってくれるか。」

何度かそんな話をされました。頭ではわかります。しかし、私に何が出来るのでしょうか。何も見えませんでした。しかし、時間がありましたら後ほどお話したいと思っておりますが、2006年からNPO法人を立ち上げました。様々な国際交流も展開し始め、先生の世界に一步でも踏み出したことになるのでしょうか。

28年前のロスのオリンピックの決勝でございます。足を怪我した私にとって、大変苦しい戦いでありましたが、実はこのロスのオリンピックの決勝は、逆に大変幸運な戦いだったのです。下になって一生懸命逃げようと頑張っているのは、決勝の相手・エジプトのラシュワン選手です。実はラシュワン選手、決勝の前にはやる気満々でした。ものすごく張りきっていました。もう、「勝つのは俺だ!」と確信しているような感じでした。彼の恩師、エジプトの監督は、日本人の山本という先生だったのですが、山本先生からはラシュワン選手に対して、「いいか。山下は足を怪我しているから何も出来ない。まず1分間、両腕を突っ張って山下の動きを封じろ。そしたら彼は何も出来ないから、必ず動揺が走る。1分過ぎたら思い切って攻めていけ。そしたらおまえの勝ちが決まったようなものだ。」こういうアドバイスをされていたらしいんです。しかし、彼は早く勝ちたかった。その1分間を待てなかったんですね。試合が始まったら、ガーっと私に向かってきて、思い切って技をかけてきました。彼が技をかけたときに、私がスッと足を開きさばいたら、なんと空振りして彼の技は空を切って勝手に倒れたんです。これは勝手に倒れた相手を一生懸命押さえ込もうとしている写真です。そして、彼が立ち上がれることはありませんでした。私は金メダリスト、28年前に優勝した話です。

実は中学2年生のときに、「将来の夢」という題の作文を書かされた中で、私は次のようなこ

とを書きました。「僕は柔道が大好きで、一生懸命柔道の稽古に励んで、柔道の強い高校、強い大学に行きたい。そして僕の夢は、柔道選手としてオリンピックに出場することだ。オリンピックに出場して、メインポールに日の丸を仰ぎ見ながら、君が代を聴けたら最高だろうと思う。また、現役が終わった後は、柔道の素晴らしさを世界の人々に広げられるような、そんな仕事がしたい。」こんなことを作文に書いていました。オリンピックは、夢が現実になった瞬間でした。先ほど、過去は全部忘れてもいいといった話をしました。しかし、この瞬間だけは、あの思いだけは、一生忘れることはないと思います。私は、表彰台の一番高いところで思いました。「ああ、俺は世界で一番幸せな男なんじゃないかな。自分も一生懸命頑張ってきた。素晴らしい恩師とも出会った。しかし、オリンピックっていうのはそれだけで勝てるような、そんな簡単なものじゃない。私の周りにはたくさんの素晴らしい稽古仲間がいた。同級生や先輩・後輩。そして、私のこの夢の実現のために、多くの人が私を励まし支えてくれた。こういう思いがひとつとなって、私は金メダルを取れたんじゃないか。」そんな思いでいっぱいでした。

今から14～5年前、日本で最初の女性宇宙飛行士・向井千秋さんが母校に帰られて、高校生を前に講演をされたことがあり、その講演録を読んだことがございます。こんなことが書かれていました。「私はいろんな人から、『向井さん、あなたどうして宇宙に行けたの。あなたが宇宙飛行士になれた一番の大きな理由は何ですか。』こんな質問をされる。私が宇宙に行けたのはいろんな理由がある。その中で一つだけその理由をあげると言われたら、私は迷わず次のことをあげたい。それは、私が高校生の頃、皆さんと同じ年代の時に、私は宇宙飛行士になりたいという夢を持った。そして、その夢を持ち続けてきた。これこそが、私が宇宙飛行士になれた一番の大きな理由じゃないかな。私はそういうふうに思っている。」そんなくだりがありました。「ああ、同じだ。そうだ、そうだ。夢を持つこと、持ち続けること。その実現を心から願うこと。このことなんだ。」と思いました。

しかし、残念ながら今の子どもたち、少年少女、若者たちは、そういう夢を持っているだろうかと思うのです。私の見知りする限りでは、今の子どもたちには、夢を持てない人が非常に多いような気がします。子どもたち・若者・少年少女に接するときには、いつもこの夢を持つことの大切さをお話しするのですが、時々「先生の話聞いて、夢を持つことの大切さがわかった。でも、どうしたらその夢が持てるんでしょうか。」こんな質問も受けます。

子どもたちが夢を持てないのは、子どものせいだけではないと思います。我々大人に、より大きな原因があるのではないかと思います。私たちが夢を持って生きないで、私たちが生きることの素晴らしさを子どもたちに伝えないで、愚痴や不平不満を子どもたちの前で言って、どうして子どもたちに夢がもてるんだろうかと思うのです。

私が小・中学生の頃の今から40年以上前、当時の我々生活ぶりをもし収録したものがあって見られるとしたら、たぶん我々はそれを見て、「ああ、これはまさに今の発展途上の国々と同じだな。」と思うかもしれません。しかし、その頃は誰もが夢を持っていました。夢があり、瞳が輝いていました。明るい笑顔がありました。子どもらしく生き生きと生きていたように思います。物質的に恵まれた今の時代よりも、私は当時の我々の方がより子どもらしく生き生きと生きられたんじゃないかとさえ思います。

子どもたちが夢を持って元気に、瞳を輝かせて、明るい笑顔で生きていく。そういう社会を創っ

ていく。これは我々全ての大人に課された課題ではないでしょうか。そして、そのために体育・スポーツが、何らかの役割を果たせるのではないのでしょうか。私はそう思っております。なんとか多くの体育人の力で、スポーツ人の力で、子どもたちが夢や希望をもてる、そういう時代を少しずつでも創っていきたいというのが、私の思いでございます。



この2枚のポスターは、2001年になって日本の柔道界でもう一度、柔道創始者・嘉納治五郎師範の理想の原点に立ち返り、柔道を通しての人づくり・人間教育を大事にしていこう。そういう柔道家に生まれ変わっていこうという、全日本柔道連盟と講道館の合同プロジェクト・柔道ルネッサンス委員会誕生で最初に作ったものです。私が委員長を務めております。

私は、バルセロナオリンピックが終わった後の1992年から、全日本柔道男子監督を引き受けました。そして、世界の強豪を相手に1996年のアトランタ、2000年のシドニー、という2つのオリンピックにおいて、日本チームを率いて闘ってきました。

アトランタオリンピックの頃から、日本の柔道人のマナーの悪さ、モラルの低下、これがいろんな形で表れてきました。例えば、柔道大会がある体育館だとか武道館の使い方が非常に悪い。インターハイや国体、全国持ち回りで開催する大会等においても、地元は一生懸命頑張って準備はしても、選手や監督・役員・関係者もなかなか決まりを守ってくれない。なかには、「もう柔道はいい。もう柔道の大会は開きたくない。」こんな声さえ出るような状況でした。

私は、当時日本において最も、柔道界の中で結果を求められる立場にありましたが、柔道界の偉い先生方に言っておりました。「柔道界はこれで良いんですか。柔道創始者・嘉納治五郎師範が目指したものは、人づくり・人間教育ではないのですか。勝つだけでいいんですか。」と。

2000年のシドニーオリンピックで私は全日本の監督を辞めました。2001年に先程の講道館と全日本柔道連盟合同プロジェクト「もう一度創始者の原点に立ち戻って、人づくり・人間教育の柔道界を目指していこう」を立ち上げたときに、私がその委員長に任ぜられたわけです。

私の好きな言葉に「伝統とは形を継承することを言わず。伝統とはその魂を、その精神を継承することを言う。」といった言葉があります。我々柔道人は、本当に嘉納師範が目指した柔道、このポスターにも書かれてありますように、「精力善用」、「自他共栄」って言葉がございます。これは嘉納治五郎師範が表した柔道の理念でございます。これを目指し、求めて、我々は柔道をやってきたのだろうか。勝ち負けや技だけを求めてきたのではないだろうか。そんな思いからこの運動はスタートしました。

私が全日本の監督を務めているとき、我々全日本柔道男子チームが目指したものは明確でした。我々が目指したのは、最強の選手づくりではなかったのです。我々が目指したのは、最高の選手づくりであり、ただ強いだけの選手はつくらないとの思いでした。

この特別プロジェクトは10年間で活動を終わりましたが、これからも嘉納治五郎師範が目指し

た柔道は何であったのか。どうして「柔の道」と名付けたのか。「道」とはいったい何なのか。そこのところを常に我々柔道人は心に留め、そして行動・実践していく必要があると考えております。

2006年から私、神奈川県体育協会の会長を務めております。神奈川県では、歴代、知事が県体協の会長を務めておりました。ですから私の前任者は松澤知事でございます。知事が、東海大学湘南校舎の私の研究室に2回来られ、口説かれました。「私に代わって神奈川県体育協会の会長を務めてほしい。」と。その時の知事の話によりますと、知事になった瞬間に、あて職が何と263にもなったとのことでした。263のうちの一つが神奈川県体育協会の会長の職というわけです。松澤知事は大学時代は、ラグビーをやられており、ジョギングや短いマラソン等にも参加されていたスポーツマンです。「私は誰よりもスポーツの大切さ、スポーツの持つ価値、それをわかっているつもりだ。しかし、私の知事という立場でこの県体協の会長を務めていくことは無理がある。自分に代わってこの職に就いていただけないだろうか。」

最終的に、この知事からの要請を受けました。そして現在まで、神奈川県体育協会の会長を務めております。会長になって真っ先に取り組んだのが、スポーツを通した「いじめ防止活動」でした。前述した中学時代の恩師から、繰り返し教わったこと「柔道を通して学んだことを普段の生活、日常生活や人生で生かすことが道なんだ。道場で学んだことを普段の生活で実践していくことに価値があるんだ。」という教えを受けてきた私は、スポーツで最も大切なフェアプレイの精神を、普段の生活の中でスポーツ人が発揮していけば、何かを変えることが出来るのではないかと考えたのでした。

神奈川県では、中学校で6割弱、高校で4割5分弱の子どもたちが、部活を中心としたスポーツ活動に励んでおります。彼らが最も大切にしているフェアプレイの精神を、道場やグラウンド、コートだけではなく普段の生活で発揮していけば「いじめはなくなる」との思いであります。この写真は、加盟団体の代表者の方々に集まっていただき、私の考えや思いの理解を求め、取組を提案しているところでございます。

県の会長と言っても、神奈川県体育協会と言っても何の力もありません。しかしご承知のように、県体育協会には、ほとんどの競技団体が加盟しており、市町村にある体育協会には、市町村の競技団体・チームが加盟しているわけです。スポーツ少年団や、中体連・高体連も加入しています。ですから、我々本体に力なくても、こうした加盟団体と一緒に行動すれば、何かを変えられるのではないかという思いで、緊急集会を開いて提案をしたのでした。

その結果は、全員が賛成してございまして、「会長やろうよ！」ということで、神奈川県体育協会としての活動として展開することになりました。まず最初にポスターを作ろうということになり、「日常生活でもフェアプレイ」をモットーにしました。そして、このポスターを2万3千部作りました。全ての教育機関、交番、公民館、図書館、公の機関、県内を走る全てのバス路線、それからJR、私鉄等々に貼らせていただき、活動を展開していったのでした。

1枚目のポスターだけは失敗でした。私がイメージとなっているのです。私より年輩の各競技団体、支所の体育協会代表の方々は、「いや、最初はやっぱり言い出しっぺの会長がならなきゃ！」と言われて、1枚目だけはそれに従わざるを得ませんでした。

私がイメージするのは、やはりターゲットは小学生・中学生・高校生。そういった彼らや彼女たちが憧れるようなポスターを作らなければいけないと考えていました。ポスターがパッと貼ってあったら、それを誰もいなかったらはがして家に持ち帰って自分の机の前に貼りたい。そんなポスターでなければならないとイメージしていたのです。毎年ポスターを作っていますが、だんだんと良いポスターができてきました。

ちょっとお見せしますが、これは中村俊介選手で、南アフリカのワールドカップの前年につりました。おそらくワールドカップでは、中村俊介選手が大活躍するだろうと思って作り、友人の岡田武史さん（岡ちゃん）に間に入ってもらってお願いしました。

これは、巨人軍の原監督。ちょうど前回のWBCで優勝し、ペナントレースでも日本シリーズも制覇した年をお願いしました。私の高校・大学の一つ後輩でございます。

これは杉山愛ちゃん。彼女が現役を引退した年のものです。男・男・男ときていましたので、彼女に協力してもらいました。昔、あるハムのメーカーの宣伝で一緒に出たことがありまして、そういう縁もフルに活用させていただきました。

これが去年のポスターでございます。今年のロンドンオリンピック、金メダルを取った内村航平選手です。ちょうどこのポスターができて貼り始めた10月半ばに、日本での世界体操選手権で、素晴らしい成績で優勝しているのです。

この10月、最近貼り始めたのが、なでしこジャパンの川島選手です。このポスターを神奈川県内に、2万3千枚くらい刷りまして、いろんな所に貼っております。

しかし、最も大切なことは、これを子どもたちに求めるだけではダメだということです。大変残念ながら、我々大人の社会でもパワーハラスメント、セクシャルハラスメント、いろいろなことが起きております。お年寄りの世界でも陰湿ないじめがあると聞いています。少なくとも子どもたちにこういうものを求める以上、まずは我々大人のスポーツ関係者が自らこれを実践すべきであると考えます。そして、こういう活動を展開していく上で何より大事なのは、現場の指導者の意識・姿勢ではなかろうかと思うのです。試合に勝つことだけを大事にする指導者から柔道を教わっていたら、今とは全く違った私が出来上がっていたかもしれません。

今から3年前には、神奈川県内でスポーツを通した「いじめ防止の標語」を募集しました。一番上に載っているのが全体の最優秀作品です。「光る汗 一緒に流せば ほら仲間」この言葉を見たときに、私は脳裏にあることが浮かんできました。現在でも多くの子どもたちが学校に行けないでいる現状があり、友だちがいない子や、笑顔を忘れ心を閉ざしている子どもたちも多く存在するのです。こうした子どもたちに対して、スポーツをやっている子どもたちが、「ねえ、一緒に走らない。」「一緒にバレーやろうよ。」「テニスやらない。」と声をかけて、一緒にスポーツを勧める。そうした活動が展開していけないものかと考えました。いじめに関しては、残念ながら我々神奈川県体育協会の取組は甚だ不十分です。今までの活動によって、県内でいじめの数が減ってきたというデータは出ておりません。しかし、さらに取組を工夫・強化しながら、もう一歩踏み込んでいきたいと思っております。神奈川県内だけでやっても意味は薄く、なんとか神奈川で成功させて、これを日本全国に伝えていきたいと思っております。

この写真は、2006年に立ち上げた「NPO法人 柔道教育ソリダリティー」であります。2009年から国税庁の認定になりました。「ソリダリティー」という言葉は、なかなか聞き慣れませんが、新渡戸稲造先生も著書「武士道」の中で、この「ソリダリティー」という言葉が使われております。「ソリダリティー」が一躍有名になったのは、ポーランドのワレサ議長、日本では連帯とされていますが、このワレサ議長が叫んだのが「ソリダリティー」なのです。I O Cを中心として世界のスポーツ界でもよく使われております。「弱者とハンディを持った人と発展途上の国々の人と手を携えて一緒に活動していく」ときにこの言葉が使われます。「連帯とか団結とか結合」という意味でございます。

メインの活動の一つに、リサイクル柔道着の送付があります。主として、高校で体育の時間に柔道をやり、その後に柔道はもうやらないといった生徒たちが、柔道着を綺麗に自分のとこで洗ってきて、それを学校単位でまとめて、着払いで我々NPOの方に送っていただく。それを海外の国々に、柔道部の学生がボランティアとして仕分けして送っていくという、メインの活動です。

それ以外にも、指導者や学生のボランティアを海外に派遣したり、海外から指導者や選手を受け入れたり、一部の事例として、まだ使える畳の提供をいただき、入れ替えをしたり送付したりするという活動を展開しております。

現在世界では、約200の国々が国際柔道連盟に加盟しておりますが、半分くらいの国は非常に貧しい状況の貧困国です。ですから、なかなか柔道着を買うお金がなく、日本人から見たら信じられないことですが、短パン・Tシャツで柔道らしきものをやっていることがあるのです。砂場とか草むらで柔道をやっていることを見るのも珍しくありません。また、これも日本では信じられませんが、一着の柔道着を子どもたちがまわして着ている国もあります。日本で考えますと極めて不衛生となります。

この8月・9月の夏休みの時間に、学生ボランティアとして、ミャンマーに東海大学の柔道部の学生二人を、ボランティア指導員として1ヶ月間派遣しました。ミャンマーのナショナルチームの選手達と寝食を共にしながら一緒に稽古しながら柔道の指導にあたったのですが、この二人の学生がまず最初に驚いたのが柔道着だったんです。日本では毎回使うたびに必ず柔道着を洗濯します。少しでも汗の匂いがあると、稽古する相手に失礼であるということからです。ミャンマーのナショナルチームの選手たちは、みんな持っている柔道着は1着なのだそうです。ですから、1日1回の練習でも2回の練習でも、毎回同じ物を着ることになるのです。最初は驚き違和感をもったようですが、1週間たったら慣れたそうです。1週間使って、日曜日の休みの時に、足で踏みながら柔道着を水洗いする。うちの柔道部の学生も同じようにしてきたことですが、慣れてくると最後は全く抵抗がなかったと言っていました、これが世界の現状なのです。

他にも教材を作ったりと、さまざまな活動を展開していますが、こうした支援は実は表の顔でして、本当の目的というのは、活動を通して柔の心、和の心、日本の心、これを世界に伝えていくことを考えているのです。少し考えていただきたいのですが、外国の人が柔道着を着て畳の上に立つだけでも、これは立派な日本伝統文化の体験になるのです。柔道着は着物であり、着物を着て帯を締めるのです。欧米の女性ですと、裸足になることには抵抗がありますが、裸足で畳の上に立ち、日本式の正座をして座礼をする。そして、ここで使う言葉は日本語。それだけで立派に伝統文化の体験になっていくのです。

私もさまざまな国々を訪れたことがあります。現地に行って柔道の指導を求められるときには、必ず柔道の講演も行うようにしています。普及のメインは、柔らの心を世界に伝えていくことと考えているからです。

どんな短い講演でも、必ず話すことが二つございます。一つは、「柔道において最も大切なことは、闘う相手に対しての敬意・尊敬の気持ちをもつことだ。柔道では闘う相手は敵ではない。」ということです。相手がいるから、自分を磨き高めることが出来る。自分が成長するための、相手ってというのは貴重なパートナーなのです。その相手に対しての敬意・尊敬の気持ちをもつことが非常に大事であり、この日本式の表し方が「お辞儀」である。ですから柔道では、柔道を始める前に「よろしくお願いします。」終わった後は「ありがとうございました。」この礼が大切なのだということを教えるのです。

ご存知の方もおられるかもしれませんが、イスラムの国では、基本的にアッラーの神以外には頭は下げません。ですから、柔道の初心者はこの日本式の礼をすることに対して、非常に抵抗を感じるそうです。ですが、どうしてもしなきゃいけないって言うと、腰だけ曲げて頭下げない礼をするのです。しかし、だんだん稽古を重ねるに連れて、彼らも理解していきます。柔道でのこの礼は、アッラーの神の前にひれ伏すのとは違うんだ。相手に対しての感謝・尊敬の気持ちの表し方なんだとの理解で、きちっとした礼が、経験を積みれば積むほど出来るようになるのです。

二つ目は、柔らの道についてです。道とは何か。先ほどからお話していますが、柔道創始者・嘉納治五郎師範が目指したのは、「柔道を通して心身を磨き高め、そのことを日常生活・社会生活の中で実践し、よりよい社会を作っていく、そこにある。」という小手です。

「私は柔道世界チャンピオン、世界のトップになったけれども、それだけでは真の柔道家とはいえないんだ。本当の柔道家というものは、そうやって柔道を通して培ったものを普段の生活で生かしていく、それができて初めて真の柔道家といえるんだ。大事なことは柔道を通して体得したこと、学んだことを日常生活や人生で実践することだ。」この思いを必ず伝えるようにしているのです。



これは、2010年に中国南京に外務省と協力で建てた、「日中友好南京柔道館」の開館式の写真でございます。2年前の3月に建てました。2007年に青島に、「日中友好青島柔道館」を外務省と協力して立ち上げました。この建物を通して、柔道を通じた草の根交流、臨界外交を展開していこうと考えたのです。どちらの柔道館も指導者は、我々NPOで招聘して、半年間日本で勉強してもらい、その後に現地で指導していただいております。外国から指導者を受けるときには、必ず柔道だけではなく、日本語や日本の文化といったものに出来るだけ触れさせるようにしています。日本の伝統文化を、日本の心を理解して、日本とその国の架け橋になってもらいたいという思いでおります。その思いで隣国の中国と交流をしております。

これは、2005年に、今回大統領に返り咲きましたプーチンロシア大統領が、大統領として2005年の11月に日本に来られたときに一緒に撮った写真でございます。私の一番大切な宝物を大統領にこの場でプレゼントしました。この写真を撮った時には、世界中のマスコミが約100名くらいいたのですが、ここで私は、この嘉納治五郎師範が書かれた「自他共栄」という書を示しながら、「日本とロシアがともに協力しながら、発展することを願って大統領にプレゼントします。」と言って大統領にお渡ししました。大統領は若いときに、柔道家としてかなり柔道に励んでおり、「柔道は単なるスポーツじゃない。柔道は哲学だ。柔道を通して学んだことが自分の人生に生きている。あるいは自分の人生を変えた。」そこまではっきり言うような方なのです。

この書をお渡ししたときの、大統領からの言葉が大変面白かったです。大統領はちょっとびっくりされました。出てきた言葉が「これは本物ですか。コピーですか。」でした。私はちょっと胸を張って「これは本物でございます。」と言うと、大変びっくりされて、「これは僕だけのものにはできない。これは皆の財産にしなきゃいけない。」と言われました。実は、この書については、私の恩師・佐藤宣践先生が「この書は俺が持ってるより、おまえが持っていた方がずっとふさわしい。おまえにあげる。」と言って、私にくださった書でありました。先生のご了解を得て、これを大統領にプレゼントしたわけです。

その後、帰られてからすぐに手紙がきました。「ロシアに来てほしい。そして、山下さんと一緒に柔道着を着て子どもたちに指導しているところをDVDで収録したい。それをロシアの柔道の普及に繋げたい。よかったら柔道着を持ってロシアに来てくれませんか。あなたも私も少し年を取ってきた。だから、できれば若い選手を連れてきてくれると、なお有り難い。」という内容でした。

この写真は柔道教室が終わって、一緒に握手をしようとしているところの写真ですが、真ん中に写っているのが私の教え子で、シドニーオリンピックの金メダリスト・井上康生であります。この後、一緒に食事に行きました。6～7名の少ない人数での食事会だったのですが、大統領がまず初めに、ワインを片手に持ってスピーチを始めました。「山下さん、日本とロシアとの間には前から難しい問題がありますね。しかし、この問題以外に何の問題も存在しない。これ以外の問題を作ろうという気持ちもない。だから何も心配しないでください。安心してください。」そして、そこで一度グラスを置きました。「この難しい問題も、両国が知恵を絞って解決できれば、日露の間に何の問題も存在しなくなる。さあ、乾杯しましょう。」

大統領の隣に座って、終始笑顔で一言も喋らずにいた、次の大統領になった当時の第一副首相・ガスプロム会長のメドヴェージェフさんが、「乾杯！」と言ったときに、その向こうに私をずっと育ててくれた東海大学創設者・松前重義先生が微笑んでいる写真が見に入ってきました。

2005年でしたか、北オセチア・ベスランでテロによって300人以上の子どもたちが亡くなったときに立った新しい柔道場の写真でした。ここに我々NPOの方で、畳と柔道着を寄贈しました。そして、この北オセチア・ベスラン、非常に柔道の盛んな地域ですが、ここの子どもたちも日本に招聘しました。ちょうどその写真の1ヶ月後でした。

大統領とこの時お会いして、大統領から出た最初の言葉が「山下さん、テロで傷ついたロシアの子どもたちを、柔道の交流を通して励ましてくれる計画が進んでいると聞いております。ロシア国民を代表して、その行為に対して、心から感謝とお礼を申し上げたい。」これが、大統領の第一声でした。まだやっていない、1ヶ月後に行う計画ですが、「なんでこんなことまで知って

いるのか。」と思いました。後からわかったのが、強面の大統領、大統領が喜ぶ話だと、こんな小さな話でも、全部大統領まで伝わるんですね。ですから、私が日露の草の根交流でやっていることというのは、ほとんど全部、大統領の耳に入っていたのであります。

中国もロシアも決して今は発展途上の国ではない。しかし、隣国の巨大な国です。ですから、そういう意味では相互理解を深めるための柔道を通した交流、私は意味があると思っております。

最後になりますが、私と井上康生で3年前にはイスラエルとパレスチナも訪問しました。二つの国で、ナショナルチームや指導者たちを集めて、講演や柔道指導を行いました。最後にイスラエルとパレスチナの子どもたちを両方一緒にエルサレムに集めて、柔道教室を開きました。NHKが同行して、これを番組で放送してくれました。この時、NHKのプロデューサーの方が、私に「山下先生、できればちょっと、イスラエルとパレスチナの子と一緒に組んでいる場面が撮れば大変いいんですけどねえ。」そう言われました。私は人間がまだ出来ていないものですから、「そんな無茶なこと言うんですか。両方の国の子どもたちが同じマットの上に立つだけでも大変なのに、そんなこと言うもんじゃないですよ。」と言ったら、「あ、あ、どうも失礼しました。」となったのですが、パッと、私とNHKの人が振り向いて見ると、何と両国の子ども二人が組んで乱取りを始めていたのです。左側の短パンの方がパレスチナの子どもの、オレンジ色の帯を締めているのがイスラエルの子です。とても心配しました。どう見ても、イスラエルの子どもの方（上下柔道着）の力が上なのです。まず、イスラエルの子が、ポンとパレスチナの子を投げました。ハッとしました。どうしようと。そうした後になんと、次にパレスチナの子どもの技をかけたときに、イスラエルの子どもが見事に飛んであげたんですね。それを見て、なんか胸が熱くなりました。お互いにお互いのことなんか絶対信じられない。憎悪が非常に入り組んだ難しい関係なのです。でも、そんな子どもたちでも柔の心を理解してくれているのかなあと思いました。その後、両国の中学生と一緒に日本に受け入れました。一昨年12月です。2週間両国の指導者も含め一緒に行動しました。昨年12月にも1ヶ月間受け入れて、一緒に日本で研修してもらいました。両国は、どちらもエルサレムの出身で、車で10分かかる場所に住んでいるのですが、その時は、「帰ったら少しお互いに交流しようか。」そんな信じられないような会話も交わされました。また、今年12月に1ヶ月間、イスラエルとパレスチナの子どもたちを招聘するつもりです。

少々時間がオーバーしております。最後になりますが、私は今の日本は病んでいると思っています。毎年自殺者が3万人以上おり、これは極めて異常な情な現状です。膨大な医療費の負担も日本の財政を圧迫しております。90年代から精神的な異常を訴える人が非常に増えてきています。若者のコミュニケーション能力の不足も深刻な状況です。大人においても、心の健康の不安を訴える人が非常に増えてきております。

病んでいる日本に対して、私は、大人も子どももお年寄りも、一人一人が人間らしく輝いていくために、単に柔道・武道だけではなく、スポーツ・体育、これが果たせる役割というものがあるのではないかと思うのです。そして、もし現場で体育の授業に携わる人たちの意識が高まっていけば、単にスポーツをやっている人間だけではなく、全ての子どもたちが必修で行う体育の授業の中で、相手を思いやったり、ルールを守ったり、自分を律したり、力を合わせたり、そうい

うことが守られていけば，子どもたち一人一人がより輝きを増すことが不可能ではないと思っています。

明日は分科会ですね。公開授業等が展開されると聞いております。学校体育を通して，より子どもたちが子どもらしく，明るい笑顔で生き生きと生きていくという社会が開かれていくことに繋がるような分科会が展開されることを心から願っております。

まとまりのない話になりましたが，最後まで熱心にお聞きいただいたことに心から感謝・お礼を申し上げたいと思っております。

そして，この全国学校体育研究大会が，ますます盛んになり，そこでの発表・議論が現場に生かされ，現場での体育の授業がより活性化され，実り大きなものになることを心から願いまして，私の講演を終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。



分 科 会 一 覧

	分科会	会 場	研 究 主 題	指導助言者
幼稚園	1	札幌市立 白楊幼稚園	遊びを中心とした生活の中で幼児期にはぐくみたい力とは ～たくましい心と体を育てるために～	札幌学院大学 教授 大垣 清美
小 学 校	2	札幌市立 白楊小学校	楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！ 体育学習 ～今こそ確かな体育の力を！～	宮崎大学 教授 三輪 佳見
	3	札幌市立 宮の森小学校	何度も挑戦し、仲間と動きを高め合う 体育学習	北海道教育大学 理事 城後 豊
	4	札幌市立 福住小学校	仲間との自分を見つめる学び合いで、 「できる」喜びを味わう体育学習	東京学芸大学 准教授 水島 宏一
	5	札幌市立 資生館小学校	「わかる」「できる」夢中になる体育学習 ～体を動かす心地よさや、動きの高まりを 共に喜び合える子どもを目指して～	宮城教育大学 教授 木下 英俊
中 学 校	6	札幌市立 上野幌中学校	未来へつながる保健体育学習 ～自ら、仲間と高め合いながら、 心と体をはぐくむ生徒の育成～	東海大学 教授 中村なおみ
	7	札幌市立 月寒中学校	「わかる」「できる」楽しさを味わう 授業のあり方 ～仲間と関わりながら、 健やかな心と体をはぐくむ～	国土舘大学 教授 田原 淳子
	8	札幌市立 向陵中学校	仲間とともに学び合う保健体育学習	北海道教育大学 教授 古川 善夫
高 等 学 校	9	北海道 恵庭南高等学校	「運動好きな生徒を育て、豊かなスポーツ ライフの基礎をはぐくむ体育学習」 ～仲間と共に心と体をはぐくむ 「体づくり運動」と「剣道」の実践～	東海大学 教授 小澤 治夫
	10	北海道 北広島高等学校	仲間と共にスポーツの楽しさに触れ、知的 に理解することを通して、生涯にわたって 豊かなスポーツライフを継続する資質をは ぐくむ体育学習の追求 ～新学習指導要領の先行実施を通して～	早稲田大学 教授 友添 秀則
特別 支援 学校	11	北海道札幌市立 豊明高等養護学校	「生徒が主体的に取り組むための学習と 支援の在り方」 ～円滑な社会活動を行うための 知識の会得と実践力の育成～	北海道教育大学 教授 安井 友康

公開授業・保育①	公開授業・保育②	研究発表者	
心と体を動かしながら楽しむ遊び 青柳 貴子,上月 暁子,本間 真純 橋本 由貴,木村亜矢子,川口いずみ 太田 緑,村上由規乃,今 つち子 和田 尚美,渋谷かおり	学級活動 青柳 貴子,上月 暁子 本間 真純,橋本 由貴	札幌市立白楊幼稚園 橋本 由貴	
1年 ゲーム 「鬼遊び」 千葉なつき	4年 体づくり運動 「多様な動きをつくる運動」 岩田 悟	札幌市立白楊小学校 岩田 悟	北海道学校体育研究連盟 十勝支部 更別村立更別小学校 青木 真理
3年 走・跳の運動 「幅跳び」 石村 宣人	6年 ボール運動 ゴール型 「フラグフットボール」 山崎 稔英	札幌市立宮の森小学校 前田 潤	北海道学校体育研究連盟 函館支部 函館市立八幡小学校 酒井 光史
6年 体づくり運動 「体力を高める運動」 上木 一也	1年 器械・器具を使って の運動遊び 「マットを使った運動遊び」 石田 愉良	札幌市立福住小学校 村岡美千世	北海道学校体育研究連盟 旭川支部 旭川市立千代田小学校 塩崎 真美
6年 器械運動 「マット運動」 山本 敦史	2年 ゲーム 「ボールゲーム」 長谷部舞里	札幌市立資生館小学校 生駒 大地	北海道学校体育研究連盟 上川支部 当麻町立当麻小学校 中山 敬史
2年男女 武道 「柔道」 伊東美美枝 (上野幌中)	3年男女 ダンス 「創作ダンス」 齊藤 研介 (光陽中)	札幌市立上野幌中学校 太田 吏	北海道学校体育研究連盟 釧路支部 釧路町立別保中学校 所 桂太郎
1年男女 体育理論 「運動やスポーツの多様性」 佐藤 光 (月寒中)	2年男女 球技 「ソフトボール」 津村 昌彦 (あやめ野中)	札幌市立月寒中学校 藤田ゆきえ 山口 肇	北海道学校体育研究連盟 渡島支部 知内町立知内中学校 加藤 晃
1年男子 器械運動 「跳び箱運動」 片山 慎司 (向陵中)	1年男女 体づくり運動 「体力を高める運動」 市川 みお (稲陵中)	札幌市立向陵中学校 大川 潤	北海道学校体育研究連盟 留萌支部 天塩町立天塩中学校 伊藤 大輔
1年 体づくり運動 工藤 直人	2年 剣道 栄花 英幸	北海道恵庭南高等学校 加藤 忠	
1年 体育理論 森田 有	2年 創作ダンス 堀川 政彦	北海道北広島高等学校 内海 久	
1年 性の指導 「大人になるための学習」 伊藤沙保里	2年 球技 「グラウンドゴルフ(室内)」 小原 要	北海道札幌市立 豊明高等養護学校 兒玉 亜来	

研究のまとめ

実行委員会研究部

1. 研究総論（○～成果，▲～課題）

(1) 研究主題・副主題について

研究主題・・・『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ』

副主題・・・ ～授業から日常へ，授業から未来へ～



○学習指導要領等，現在の国の教育の動向や社会情勢，子どもの現状等を踏まえたものであった。

○授業を研究の中核に据え，日常実践の広がりや深まりと生涯スポーツの視点を意図したものであった。

○これまでの北海道の体育研究の積み上げのもとに設定し，提案することができた。

○構造図によって，主題に迫るための研究内容の明確化と共有化を図ることができた。

(2) 目指す幼児児童生徒像について

「生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども」



○幼稚園，小学校，中学校，高等学校，特別支援学校の各授業において，子どもたちの生き生きと主体的に運動に取り組む姿と，友だちと積極的にかかわりながら楽しく活動している姿が存分に見られ，目指す幼児児童生徒の姿を具現化することができた。

— 【アンケートより】（一部抜粋） —

- ・生き生きとした姿が見られた。（白楊幼稚園）
- ・目を輝かせて遊んでいるところに感動した。（白楊幼稚園）
- ・自発的に関わっている姿がたくさん見られた。（白楊幼稚園）
- ・楽しみながら，生き生きと運動していた。（白楊小）
- ・年長と5年生との取組やかかわりがとてもよかった。（白楊小）
- ・絶え間なく運動し，仲間意識も育っていた。（白楊小）
- ・どの子どもも生き生きと運動していた。（宮の森小）
- ・子ども同士のかかわり合いが豊かな授業であった。（宮の森小）
- ・きびきびとした行動や爽やかな態度に気持ちよく参観できた。（宮の森小）
- ・自分の目標に向かって，生き生きと運動していた。（福住小）
- ・仲間を見る，言葉で表現する，素晴らしい取組であった。（福住小）
- ・とても鍛えられており，技能の高さに驚かされた。（福住小）
- ・きびきびとした動き，生き生きとした表情，素敵です。（資生館小）
- ・運動量が多く，技が美しくなったりシュートが上手になった。（資生館小）
- ・とても元気に意欲的に運動していた。（資生館小）
- ・子どもたちの顔が輝く授業であった。（上野幌中）
- ・生徒はよく考え，よく交流できていた。（上野幌中）
- ・素直で，明るく，前向きなよい生徒たちでした。（上野幌中）
- ・普段とは違う場所での授業でしたが，生徒，素晴らしいです。（月寒中）

- ・本当に素晴らしい意見の言える生徒たちでした。(月寒中)
- ・さわやかな先生、生徒に出会え、来てよかったと思いました。(月寒中)
- ・生徒が素直で、純真な取組に好感がもてました。(向陵中)
- ・一人一人が話し合いに積極的に参加していた。(向陵中)
- ・ペアやグループの雰囲気良く、前向きな活動が見えた。(向陵中)
- ・運動に興味を持っている生徒が多く生き生きと活動していた。(恵庭南高)
- ・自分たちで創意工夫し、自分たちで授業を運営していた。(恵庭南高)
- ・仲間と励まし合って、楽しそうに運動していた。(恵庭南高)
- ・運動量も多く、積極的、意欲的に取り組んでいた。(北広島高)
- ・生徒は自信をもって、発表していた。(北広島高)
- ・雰囲気がとてもよく、楽しく取り組んでいた。(北広島高)
- ・楽しく授業を受けている姿、整然と動く姿に感動しました。(豊明養護)
- ・子どもたちが張り切って、集中していて、素晴らしかった。(豊明養護)
- ・体力づくりで30分間継続できる子どもたちに驚かされました。(豊明養護)

(3) 研究の視点について

〈視点1〉 生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫



- 系統性を明らかにした上で、身に付けさせたい技能を明確にした授業を展開することができた。
- 地域や学校、子どもの実態を踏まえ、教師の創意を十分に生かした教材の開発・工夫をすることができた。
- 子どもの意欲や興味を高めるとともに、個に応じた教材の開発・工夫ができた。
- どの授業も運動量が豊富にあり、技能の高まりが見られた。
- 運動・スポーツの日常化や次の段階の校種へのつながりを意図した授業であった。
- ▲身に付けさせたい動きや技能のおさえと、習得のプロセスをより明確にし、工夫する。
- ▲運動の場と身に付けさせたい力の関連をよりシャープにする。

— 【アンケートより】 (一部抜粋) —

- ・幼児の発達に合わせた素晴らしい研究であり、学びの連続性の表も参考になった。
- ・教材や補助具の開発・工夫、場の設定が素晴らしい。
- ・運動量が豊富で、安全面も十分配慮されていた。
- ・運動の系統を考慮して6ヵ年のカリキュラム作成が素晴らしい。
- ・言語活動を充実させる工夫が見られた。
- ・題材の目標がしっかりと共有されていた。

〈視点2〉 協同的、課題解決的に取り組む学習過程の構築



- 課題解決的な学習によって、自ら学ぶ力や仲間と共に学ぶ力などの課題解決力が身に付くことを主張することができた。
- 学習課題を明確にすることによって、意欲的な学びを創りあげることができた。
- 子ども同士の学び合いによって、コミュニケーション能力や思いやりの心をはぐくむことができた。

- ▲「課題解決力」と「思考・判断」の関連を明確にする。
- ▲学級全体の学習課題と個々の課題の関連と、課題達成に向けた運動の場や手立ての有効性なども含めた学習過程のより一層の工夫、充実を図る。

— 【アンケートより】（一部抜粋） —

- ・運動の工夫を見付け、それを全体のものにしていく過程は見事であった。
- ・全体交流の時間がとても有効であった。
- ・思考を揺さぶる時間が設けられ、指導と評価の一体化に迫る授業であった。
- ・各グループごとに相談して、コツを見付けていく方法は有効であった。
- ・子ども同士が自然と関わり合える工夫がちりばめられていた。
- ・運動のポイントを可視化しているところがすばらしい。
- ・1時間の目標、到達目標など、明確に生徒に伝わっていた。

〈視点3〉 確かな学力を保障する指導と評価の充実



- 1時間の授業ごとに評価基準と達成のための手立てを明確にしたことにより、教師の見取りやかかわりがシャープになり、確かな体育の力を確実に身に付けさせることができた。
- どの授業も教師と子どもの信頼関係が見事に築かれており、教師の熱意、姿勢や手立ての工夫等、確かな体育の力の習得のための教師の在り方が明らかになった。
- ▲「思考・判断」の評価基準の具体的な内容とその見取りの場、子どもへのフィードバックの方法等、今後さらに実践を積み上げ、共通化していく必要がある。
- ▲評価したことをどう次の指導に生かしていくか、どう次の授業改善につなげていくか、今後さらに明らかにしていく必要がある。

— 【アンケートより】（一部抜粋） —

- ・環境を通じた遊びと適切な教師のかかわりに感動した。
- ・教師の丁寧で、共感的な関わり（表情、助言、言葉がけ）がよかった。
- ・ICT機器が効果的に活用されていた。
- ・学習カードに記入することで、思考が深まっていった。
- ・自己評価だけでなく、他者評価もしっかりと行われていたのがよかった。

(4) 基調報告について

- 北海道の子どもの実態や地域性、これまでの北海道の体育研究の成果、新しい体育の方向を踏まえたものであり、北海道の主張が時間内で、分かりやすく伝わるものであった。
- パワーポイントの構成や発表者の発表の仕方などが大変良かった。

— 【アンケートより】（一部抜粋） —

- ・よくまとまっていて、わかりやすい、イメージしやすいものであった。
- ・短い時間の中で必要なことが確実に盛り込まれていた。
- ・基調報告をされた先生の口調、速さなど、発表の仕方がよく、聞きやすかった。
- ・体力の数値の向上ばかりを目指すのではなく、個々の子どもの運動への意欲を大切にしていることがよくわかった。
- ・北の大地から新しい発信をしようという気概が感じられるものであった。
- ・全体会の進捗状況をとらえ、臨機応変に発表調整することができていた。

2. 研究推進 (○～成果, ▲～課題)

(1) 指導案形式

- 研究の視点を共通の項目にするなど、研究内容の共通化を図ることができた。
- 評価規準の明確化と達成のための具体的な手立てを明確にすることができた。
- ▲本時の目標の記述や評価について、今後の動向を踏まえ、検討していく必要がある。(語尾の「～することができる」や目標・評価の観点と、その記載の仕方など)
- ▲単元構成の1ページが時間数の多い単元の場合、収まり切らず、苦勞した。

(2) 支部研究発表

- オール北海道で研究を継続してきていることを主張することができた。
- 各支部研究の整理、吟味・検討、今後の方向付け等に生かすことができた。
- ▲本研究及び各分科会会場校の研究内容との関連を図ることがなかなか難しかった。

3. 分科会運営他 (○～成果, ▲～課題)

- 協議内容が明確であり、短い時間の中で、中身の濃い協議が進められた。
- 明確に研究の主張をしたり、質問に対して丁寧に答えたりすることができた。
- ▲盛りだくさんで、協議の時間が少なかった。午後の協議への参加者を多くする工夫が必要だった。
- ▲事前の司会者、記録者の打合せ会などをもつと、よりスムーズな進行ができた。

4. 今後の研究に向けて

☆確かな体育の力の課題解決力の中身の検討

学習指導要領では、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむ」という文言がある。また、今大会は、課題解決力を「自ら学ぶ力」「仲間と共に学ぶ力」とおさえた。この二つの力と思考力・判断力・表現力との関連、また、この二つの力の構成要素(課題発見力、創造力、コミュニケーション力など)について、今後、十分な吟味・検討が必要である。

☆評価規準と達成のための手立ての研究

実践を通してのさらなる研究の積み上げ(特に思考・判断について)の検討、実践が求められる。

☆目標の表記

今回、単元や本時の目標を「～することができるようにする」と教師サイドの語尾にしたが、今後、目標達成の手立て、評価方法等との実効性から、語尾の扱い、本時に記載する目標の数など、全国の動向を踏まえ、検討していく必要がある。

授業づくりや研究発表にご指導ご支援いただいた先生、細部に至るまで支えていただいた実行委員会、分科会運営委員、会場校の先生、そして、研究を具現化していただいた授業者並びに研究発表者の先生、本当にありがとうございました。皆様のご協力ご尽力により、「北海道の体育研究」と「子どもと教師の生き生きとした素晴らしい姿」が提案され、全国の先生方から高い評価を得て、未来へとつなげることができました。

今大会は、これまでの脈々と続いてきた北海道の体育研究の充実・改善に向けたチャレンジ精神と熱意あふれる真摯な日常実践の積み上げの上に大成功を収めることができたものと思います。しかし、今大会はあくまでも、北海道の体育研究の一通加点に過ぎず、これからも熱意を持ち続け、創造性を十分に発揮し、和をもって北海道の体育研究 授業研究に邁進していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

第51回全国学校体育研究大会北海道大会の研究

大会主題

『未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実』

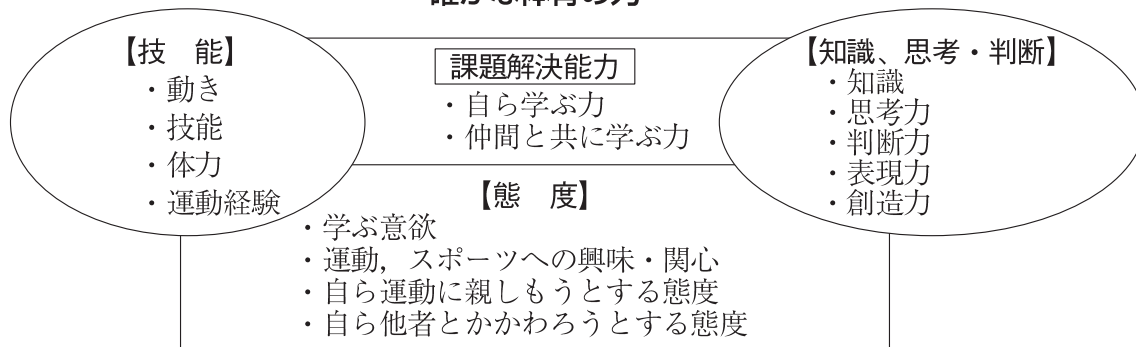
～授業から日常へ，授業から未来へ～

目指す幼児児童生徒の姿

生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども

育成したい力の明確化

確かな体育の力



確かな体育の力をはぐくむ手だて

〈3つの視点〉

〈視点1〉

生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

- 身に付けさせたい技能の明確化
 - ・発達の段階を踏まえた指導内容，系統性
 - ・技能分析
 - 運動技術のポイントやコツ
- 子どもの実態把握
 - ・学校や学級の子どもの実態
 - ・体育の学力の定着状況
- 教材の開発，工夫
 - ・興味関心，個に応じた教材
- 運動との出会いや場の工夫
 - ・イメージ化，ステップ
- 生涯スポーツへの視点
 - ・日常化，生活化
 - ・応用，発展

〈視点2〉

協同的，課題解決的に取り組む学習過程の構築

- ①学習課題の把握
 - ・学級共通の学習課題
- ②試行活動
 - ・できる技や動きからのスタート
- ③個人課題の設定
 - ・個人技能や集団技能の役割等にかかわる運動課題
- ④追求活動
 - ・実運動を通した追求
 - ・人とのかわりを生かした追求
 - ・解決のための手だて
- ⑤評価活動
 - ・相互評価と自己評価の関連
 - ・教師による評価（学力の習得状況）

〈視点3〉

確かな学力を保障する指導と評価の充実

評 価		指 導
[評価規準]	[評価方法]	・発問，切り返し，ゆさぶり ・伸びやできばえへの賞賛，認め ・助言（技能，学び方など） ・補助，示範 ・情報提供
・内容のまとまりごとの評価規準 ・単元の評価規準 ・本時の学習活動に即した評価規準	・行動観察 ・発言，発表 ・学習カード ・ネームプレート ・VTR撮影	
〈指導案への位置付け〉	〈評価内容の記録化〉	〈授業や指導方法の工夫・改善〉

分科会研究発表・研究協議等記録

幼稚園

第1分科会

札幌市立白楊幼稚園



モエレ沼公園 ガラスのピラミッド(札幌市 東区)

研究主題

遊びを中心とした生活の中で
幼児期にはぐくみたい力とは

～たくましい心と体を育てるために～

札幌市立白楊幼稚園

1 研究発表の概要

発表者：札幌市立白楊幼稚園 教諭 橋本 由貴

(1) 研究主題

「遊びを中心とした生活の中で幼児期にはぐくみたい力とは

～たくましい心と体を育てるために～」

実態から、教師が幼児の体を動かす機会や直接体験をする機会を十分に保証する必要性がある。そのことを踏まえ、幼稚園教育要領の5領域から「健康」を窓口として、日常の「遊び」を見直し、「遊び」を通して幼児に必要な経験を積み重ねていくことで、心も体もたくましく育てていく。

(2) 研究の仮説

教師が3歳児・4歳児・5歳児の発達特性をしっかりとおさえ、幼児が心と体を存分に動かしながら夢中になって遊ぶことができる環境の構成や適切な援助を行い、幼児に様々な経験を積み重ねていくことで、生涯「生きていく力」の基礎となるたくましい心と体をもった幼児を育成することができる。

(3) 研究の視点

日常の様々な「遊び」を運動的な視点から見取り、充実させていくためには、どのような環境や援助が必要なのか、より深く探っていきたいと考え、視点を設定した。

〈視点1〉 自らかかわりたくなる環境や援助

◇進んで体を動かすようになるために必要な環境や援助

〈視点2〉 友達とつながりながらあそぶための環境や援助

◇友達と関わりながら体を動かすことを楽しめるようになるための環境や援助

2 公開保育について

(1) 3歳児ひよこ組

「功技台やマットを使った遊び、追いかけてこ、木製滑り台など」

保育者：青柳 貴子教諭 川口いずみ教諭

今 たち子教諭



□バレー遊びを誕生会の発表に向けて行っている。スズランテープを付けた棒を手に、音楽に合わせて踊って楽しんでいた。

□発表したいと言う思いを生かし、踊りを少し揃えてみた。しかし、発表するとなると緊張感を感じ、動きが小さくなっていたので、よい動きを認めて、広げていくように関わった。

☐個々に合わせた援助という点では、教師と一緒に踊りながら自信をもって踊れるようにした。

☐友達や先生の動きを見ながら少しずつ動きが大きくなってきた。

- (2) 4歳児うさぎ組 「ヒーローごっこ、踊りショー、長縄やボール、功技台などを使った体を動かす遊びなど」

保育者：上月 暁子教諭 木村亜矢子教諭
本間 真純教諭 和田 尚美教諭

☐自分の思いを出しながら教師や友達と遊ぶことや心地よさを感じながら体を動かして遊んだり、自然物に触れて遊んだりすることをねらった。

☐ヒーローになりきってトレーニングするというイメージで遊んだり、自分の思いを出したりしながら遊んだり、大型積み木や功技台で場を作り、体を動かして楽しめるように関わった。



☐隣のかえるハウスのジャンプ台で一緒に遊んだが、場をつくることで自信や満足感が、いつもよりも大きなジャンプなどの動きにつながった。

☐ヒーローとかえるごっこでイメージが合わなかったり、実態が違ったりしたことでのびのびと動き切れないところがあった。

- (3) 5歳児りす組 「冒険ごっこ、警察トレーニング、ドッジボール、帽子取り鬼など」

保育者：橋本 由貴教諭 太田 緑教諭
村上由規乃教諭

☐ドッジボールの遊びを中心に関わった。運動会への取り組みを通して皆で活動することへの期待が高まり、チームに分かれて競い合う楽しさを感じてきている。

☐勝ちたい気持ちが強すぎ、折り合いがつかなかったり、集まっても遊びが始まらなかったりすることがあった。友達と目的に向かって思いや考えを出し合いながら遊び、楽しさを共感することと、自分の力を発揮しながら友達と一緒に体を動かすことを楽しむというところを教師が意識して取り組んだ。



☐教師はできるだけ一歩引いた援助を心がけ、幼児同士が積極的に思いを伝えあい、ぶつかり合っても、遊びが楽しいから「またやりたい!」「もう一回やりたい!」という姿が引き出せるように援助していった。この姿から、本日のねらいは達成できたのではないかと考えている。

- (4) 5歳児りす組・4歳児うさぎ組：学級活動

「くたくたじゃんけんリレー」「しっぽとりおに」

☐運動会の活動を生かして、4チームに分かれて遊んだ。

☐最初はうまくつながらなかったが、友達のペースに合わせたリ、声をかけ合ったりすることで、徐々に友達の速さに合わせるができるようになってきた。

☐学級みんなで行う楽しさと好きな遊びでそれぞれの課題に取り組んでいく活動とのつながりを考えながら今後もやってい



とが大切である。

- ・一年間の遊びの中から運動要素を分析して、系統化されていることがすばらしい。このように育ってきた子どもが小学校につながっていくと考えられる。
- ・表の中で、歳が上がっていくことで身につけるべき動きが減っている理由は何か。

□文部科学省の体づくりの内容や自分たちで集めた資料（「幼児期に身につけたい36の動き」など）を参考に作っていった。表の中に入れたかったのはさらに多くあったが、幼児の実際の動きから課題を吟味して表の中に位置付けていった。次第に動きが滑らかになっていくことを意図して、動きを絞っていった。

- ・雪遊びでは脚力が足りなくなっているから、こぐ動きをさせていく必要がある。

(2) 保育について

- ・幼稚園教育要領に基づいた教育が行われている。どの子も笑顔で、生き生きと遊んでいる様子が多く見られた。日常の保育で行われている「遊び」や教師のかかわりを充実していくことが重要であることを学んだ。
- ・細やかなことに気を配り、「遊び」の環境を作っていること、こんなにダイナミックに遊んでいることがすばらしい。安全面を考えすぎることで、動きが小さくなってきている。同じ動きを何度も繰り返し遊ぶことで、イメージが膨らみ、「遊び」が広がっていった。教師も一緒に遊ぶことで、子どもの意欲を高めていった。ゴムを新聞に掛けることで、跳ばして友達と関わりながら園内中を動いていた。子どもが危ないからやらせないのではなく、失敗を繰り返しながら動きを高めていく。警察トレーニング（橋渡り）というネーミングは大事。ネーミング一つで、子どもはやる気になったり、みんなが共通のイメージをもてたりする。
- ・室内でも屋外でも、生き生きと遊んでいる姿がすばらしかった。5歳児が缶けりをしている中で、3歳児がサッカーをしている。年長児が邪魔することなく、年少児も年長児の「遊び」を見ながら自分の「遊び」を楽しんでいる。日常の活動の中に運動の要素がちりばめられていることを実感したので、その要素を意識して関わっていく必要性を感じた。この時期に付けさせたい力についても、考えなくてはならない。
- ・床の環境に課題がある。はだしで遊ぶなど、滑らない環境づくりをする必要がある。レストランがやっているか、やっていないかという表現が温かくない。もっと優しい言葉や園児が童話の世界に入り込むような言葉が必要。
- ・ダブルダッチを行っているときに、なかなか跳ぶことができないので、一本にしなければいけないという考えもあった。5年生と一緒に跳びたいという思いがあってもよかったのではないかな。困っている園児に教師が関わっていくことも考えられた。
- ・5年生が「一番低いところで」「リズムに合わせて」と声を掛ける姿があった。5年生がどのように伝えたら園児に伝わるかを教師が関わることに課題がある。



(3) 「幼小の連携」交流活動について

- ・幼小の連携、交流活動がすばらしかった。
- ・幼小の連携としては、成果があるのではないかな。中休みにおける小学生の実態を考えると、小学生はもっと動きたいのではないだろうか。幼児には大きな刺激となり、よい経験を享受しているが、小学生にとってあの時間は物足りなかったのではないかな。

- 5年生に、何かをしてあげたいという思いが強かった。日々の活動では、5年生も動いてみようと思いを掛けている。また、小学校の担任の先生と打ち合わせることで、5年生も思いつき体を動かし、よりよい交流活動にしていくという課題もある。
- 来年度、1年生と6年生という関係を深めるためというねらいもあって行っている。小学校としても地域の人と関わるねらいの一環としている。幼児としては小学校への憧れや楽しさを高めることができる。

4 指導講評

(1) 「行きがいのある幼稚園」

気温の低下によるけがが心配されたが、どの子どもも自分の行い、遊びを思いっきり楽しんでいたので、特にけががなくよかった。幼児が生き生きと遊んでいる姿を見ると「行きがいのある幼稚園」となっているのがすばらしい。どの子どもも自分がやりたいことが待っている。また、一緒に遊んでくれる先生がいることが、安心して生き生きと遊ぶ子どもの姿につながっている。市立幼稚園は1割の支援を必要とする園児がいる。(現状は、2～3割) 今日の子どもの姿から、どの子どもが支援を必要としているかが分からないほど、みんなと一緒に楽しく活動していたようである。それほど先生の関わりがすばらしく、どの子どもも成長している。



(2) 小学校との交流活動について

白楊幼稚園と白楊小学校の子どもたちが交流する姿から、幼小連携の異年齢活動の重要性を感じた。一緒に思いっきり遊ぶためには、遊ぶための空間や幼稚園と小学校の教師同士の連携が不可欠である。白楊幼稚園と白楊小学校の交流活動は、参加型になっていないことに意義がある。小学校からの一方通行的な交流活動になっていては、子どもが受け身になるだけで成長につながらない。交流活動に互いの学校・園の明確なねらいがあるからこそ、今日のような自然な関わりが生まれるのである。幼小連携のかぎは校長先生と園長先生の理解の上、学校・園として同じ考えで取り組んで行く必要がある。これからの更なる深まりに期待している。

(3) 遊びについて

造形、運動、動物ごっこなど多種・多様な「遊び」はあるが、どの「遊び」にも「動き」がある。今回は体育の研究大会だが、幼稚園は教科でやっているわけではない。遊びを通してどう教科の研究大会に迫るか悩むところであるが、「遊び」は身体活動そのものである。「動き」を三つに分けると、「生きていくために必要な動き（つかむ、立つなど）」「危険回避に必要な動き（身をかわす、よじるなど）」「楽しみを覚えるための動き（蹴る、投げる、うけるなど）」に分けられる。「遊び」とは総合的な身体活動であるので、幼児期に遊ぶことによって、神経系が鍛えられる大切な時期になる。だからこそ、幼少期にたくさん遊ぶ必要性がある。遊ぶことによって、子どもは人と関わりながら人間性を高めるとともに、疑問を解決する力（問題解決力）、もっとやってみたいという意欲を育てられるのである。「遊び」は体だけでなく、心の発達にもつながる。人生を送るための基盤づくりが、幼児期に行われているといっても過言ではない。だからこそ、毎日の中に四季折々、多様な動きを取り入れた、をしていく必要がある。

5 成果と課題

(1) 成 果

- 「たくましい心と体の発達過程」は、一年間の「遊び」の中から運動要素を分析して系統化されている。年齢として身に付けるべき動きが位置付けられ、幼児の心と体の発達の目安としてとても重要なものである。小学校へのつながりも見えてよい。
- 子どもの実態や発達特性を的確にとらえ、幼児が自分のやりたい「遊び」をのびのびとできる環境ができている。その環境づくりがダイナミックな「遊び」につながっている。また、自分たちで場をつくることで「遊び」への意欲が高まり、進んで遊ぼうとする様子が見られた。
- 子どもの「遊び」は、イメージが大切。「警察トレーニング」等、「遊び」のネーミングの工夫により、子どもはやる気になり、共通のイメージをもつことができた。
- 教師が子どもと一緒に遊ぶことで、意欲を高めることができた。また、教師が子どものよい動きを広めたり、イメージを膨らませたり、「遊び」が広がったりするような援助ができていた。細やかな気配りや教師間の連携ができていた。
- 幼児一人一人に自分の居場所があり、どの子にも自分がやりたいことが待っていた。また、一緒に遊んでくれる先生がいるので、子どもは安心して生き生きと遊ぶことができていた。
- 白楊幼稚園と白楊小学校の交流は、参加型になっていないことが、本当の幼小連携につながっている。ねらいや配慮すべき点が明確になっているから、一方通行的な交流活動になっていない。

(2) 課 題

- たくましい心と体を育むための環境や援助を継続して探り、実践を積み重ねながら今後も検証していく。また、「学びの連続性」について、小学校との交流を通して検証し、さらに追及していく。
- 評価いただいた幼小連携も含め、今回の研究大会での幼稚園の取組を点で終わらせることなく、今後も学校教育の出発点としての幼稚園教育を体育連盟の中にしっかり位置付け、取組を継続していく必要がある。
- 幼稚園での取り組みについて、保護者に理解や納得を得られるような教師の発信力をもつことや家庭との連携をさらに深めていくことが必要である。
- 冬場の雪遊びでは、脚力が足りなくなっているため、こぐ動きをさせていくなどを取り入れることも検討する必要がある。

分科会研究発表・研究協議等記録

小 学 校

第2分科会

札幌市立白楊小学校

第3分科会

札幌市立宮の森小学校

第4分科会

札幌市立福住小学校

第5分科会

札幌市立資生館小学校



野幌森林公園 北海道百年記念塔
(札幌市厚別区 江別市 北広島市)

研究主題

楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！体育学習

～今こそ確かな体育の力を！～

札幌市立白楊小学校

1 研究発表の概要

発表者：札幌市立白楊小学校 教諭 岩田 悟

(1) 研究主題

「楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！体育学習」

(2) 研究の仮説

「運動することそのものに楽しさを味わうことができ、友達と共に追求しながら、伸びを実感できる体育学習を展開することで、確かな体育の力をバランスよく育むことができる。」
 実態から児童像を設定し、児童像に迫るため研究仮説を立てている。また、幼小連携にも意識して取り組んでいる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉

「楽しさがある！共に学ぶ！伸びがある！教材の開発・工夫と学習展開」

〈視点2〉

「確かな体育の力を保障する指導と評価の充実」

2 公開授業について

(1) 第1学年 ゲーム「宝取り鬼」

授業者 千葉なつき

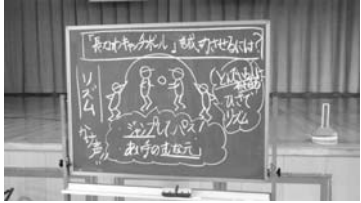
子どもの主な活動	教師のかかわり
○準備活動 ・準備運動をする。(ミッキーマウスマーチ) ・スキルアップゲームをする。 ・チームでしっぽ取り鬼、通り抜け鬼を行う。 ○課題把握 ・「宝取り鬼で、しっぽを取られずに宝をたくさん取ろう」 ○ゲーム①（宝取り鬼ごっこ） ・ゲーム前の挨拶をしてゲームを始める。 ・動きの工夫 (目の前にスパーができると、そこへ走りこむ。相手の直前で横へ走る。味方の後ろにかくれて抜け出す。)	・子どもと一緒に行う。 ・子どもたちと一緒に動く。 ・積極的に声をかける。(チームや個へ) ・課題を提示し、確認させる。 ・積極的に励ましの声をかけたり、動きのアドバイスをしたりする。



- ・使った部位のストレッチをする。

- ・アドバイスしたり、よい動きを見付けたりする。
- ・しっぽを取られないためには、どんな動きをしたのか確認させる。「今日のきりりはだれかな。」
- ・次回の学習の見通しをもたせて、学習を終わる。

授業者 岩田 悟

○全体交流 ・長なわとキャッチボールの両方を成功させるのには、どうすればよいのかを交流する。 ・うまくできるコツを発表する。 (音のリズム、胸にパス、地面についた時にパス、跳んでいる時にパス) ○試しの運動② ・「長なわキャッチボール」を行う。 ・跳び手と回し手、それぞれ声をかけをしながら工夫して練習する。(ハイでキャッチ、縄だけで、縄なしで、膝でリズムをとって) ○追求活動～「白楊宅配便」コース挑戦② ・ペアをつくり、それぞれに動きを工夫しながら取り組む。 ○課題解決 ・学習を振り返る。(声をかけ合った。コツを出し合ってうまくいった。) ○整理運動 ・使った部位のストレッチをする。	・うまくできたグループの動きを取り上げながら、動きのコツをつかませる。 ・動きのコツを板書し、整理する。  ・積極的に、それぞれのグループにかかわり、動きのコツをつかませるようにはたらきかける。 ・「長なわキャッチボール」の運動を中心に、子どもたちの動きにアドバイスをする。 ・自分や友達の動きについて具体的に振り返らせる。 ・次回の学習の見通しをもたせて学習を終わる。
--	--

3 研究協議

(1) 第1学年 ゲーム「宝取り鬼」

質 問 ・ 意 見	見 解
・運動の特性をどのようにとらえているのか。 ・スピードの変化、フェイントの工夫など、あまり動きの変化が見られなかったのではないか。	・特性としては、高学年のボールを持たない動きとした。 ・成功体験をさせたいので、横スペースのあるコートや4対3の人数にした。
・4対3のアウトナンバーにする意図だが、動きの工夫ができていたのかという点を考えると、あまり見えてこなかった。ただ、まっすぐ走るといふ動きばかりが目立っていた。 ・課題解決的とは、どうおさえているのか。個の課題か集団の課題か。	・文科省の冊子を参考に、身に付けさせたい動きを考え、人数やコートを設定したが、全体交流を生かした動きには至らない面もあった。 ・動きを通して生まれる「しっぽをとられないで、宝をとろう」を動きを通して解決していくことが課題解決と押さえている。

・指導と評価の関係について、どうなっているのか。	・重点をもって指導していく。子どもが自己評価できるような教師のかかわりを意識している。
・得点が高すぎて子どもの実態とかけ離れていたために、子どもが自己評価しづらかったのではないか。 ・1回目のゲームでは、あまりしっぽは取られていなかった。立ち止まる部分を意図的につくってもよかったのではないか。 ・子どもはよく遊んでいた。守備側の動きが難しかったのではないか。 ・攻撃に、歩く・止まるの動きも見えてきていた。 ・鬼あそびは、追う・追われる関係が特性ではないだろうか。それが見えてくるようにする二人の関係が大事ではないか。	・授業作りの際に、楽しいからどんどんやるのか、つまづきを作り、考えさせていくのかを考えたが、今回は自分が乗り越えられない課題を設定するようにした。

(2) 第4学年 体づくり運動 「白楊宅急便」

質 問 ・ 意 見	見 解
・全体交流が良かった。二人のペアでの動きも良かった。 ・個々のめあては、どうだったのか。また、子どもの動きの幅をどう考えていたのか。 ・長なわとボールを与えていたが、動きを工夫させるならば、なわとびをやった後からボールを与えてもよかったのではないか。 ・動きを工夫させるために、どんなイメージをもっていたのか。 ・用具と用具を組み合わせるのは難しい。全員ができたグループはなかった。 ・ターザンロープをなぜ取り上げたのか。 ・体ほぐしの運動は、準備運動で終わっているのか。 ・運動している子は楽しそうだった。思考判断の時間がほとんどなかったのではないか。作戦タイムなどがあってもよかったのではないか。	・意欲面を考えて、2人のペアとした。ペアは固定ではなく、グループの中で替えられるようにした。互いに認め合え、継続して伸びを見られるペアにしたいと考えた。 ・動きのコツをつかむことを大切にした。 ・カードは持たせなかったが、個の伸びは意識できるようにしている。どう変わったか、どうできるようになったかがわかるようにしたいと考えている。 ・工夫としては、バリエーションの工夫のほか、運動のコツをつかむのも工夫と考えている。これが、技能が伸びるための思考判断と考えている。 ・組み合わせの運動に難しさがあつたかもしれない。ターザンロープでは、目的地でおりるということをねらいとした。 ・体ほぐしは、ねらいをもち、継続して行っている。その中で子ども同士のかかわりも見られる。

	・思考判断の時間は、特に設定はしていないが、運動しながら十分にそういう部分は確保できていると思う。
・条件を変えることを先に行ってからコツをつかませていくという流れも考えられるのではないか。	・経験していない運動を取り入れることで、カリキュラム上、難しい面があるが考えていきたい。

4 支部研究発表について

○発表の概要

発表者：更別村立更別小学校 教諭 青木 真理

- ・第45回北海道研究大会の成果と課題について
 - 「わかる」→「できる」過程を重視
- ・2つの視点を設定し、研究を進めてきた。
 - ①「分かる」「できる」が実感できる教材化
 - ②よりよい動きを追求し、学び合う授業づくり
- ・実践例の発表



「感覚づくりー動きづくりー実践」の流れを生かした単元計画
 小学校3年「マット運動」・「フラッグフットボール」
 小学校4年「スケート」

5 指導講評

(1) 研究について

- ・動きを考えると、他の動きとのつながり、関係性を考えさせるといい。
- ・「わかる」から「できる」とは、なかなかうまくつながっていない。知識と感覚では、その受け取りで大きく変わってくる。感覚から、できそう、やってみようという気持ちが生まれてくる。感覚づくりは、下位教材によって、こんな感じでやれば次の動きにつながるものである。それが「わかった」になる。



(2) 第1学年 ゲーム「宝取り鬼」

- ・鬼あそびはボール運動につながるが、ボール操作をしない動きづくりである。走・跳の動き（まっすぐ）とは違う動きである。止まる、ジグザグ、かわすという動きがある。また、にげる動きもある。これは、後ろからくる人の気配を感じるのを育てる上では大切なものである。
- ・幼小の連携を考えると、少し工夫させると、今日のゲームは幼稚園でも可能である。人間は二歳で走り出し、三歳でまっすぐ、四歳で方向変換が可能である。五歳では、相手をかかわす動きができるようになるものまである。
- ・実践例としては、宝物をとった後に、的当てをしたものもある。

(3) 第4学年 体づくり運動「白楊宅急便」

- ・動きの関係をおさえる。教えた動きはどのような位置付けにあるのかを考えるといい。

- ・長なわはできるようになってきたが、ジャンプしながら投げるという動きについては、下位教材として何があるのかを考えなくてはならない。
- ・運動は、何をねらいにするかによって意図的な使い方が変わってくるし、これは評価にも反映してくる。

6 成果と課題

(1) 成果

- ・教材の工夫により、子どもたちが夢中になって運動に浸る姿が見られた。
- ・ペアやチームで声を掛け合い、動きを高めようとする姿が見られた。
- ・評価規準をもって授業に臨み、子どもたちへの効果的なかわりをすることができた。
- ・全体交流において、板書や動きの具体を示すことで、次の運動につながるコツの追求ができた。
- ・学習カードを使うことで、個の課題追求や友達の動きへの気付きに生かすことができた。

(2) 課題

- ・1年生では、場の設定に工夫の必要があった。(コートの方や人数)
- ・4年生では、いろいろな運動を流れて行う中で、一つ一つの動きがやや雑になっている面が見られた。
- ・実態をふまえ、運動の特性を押さえ、ねらいを明確にした教材の吟味が必要である。

研究主題

何度も挑戦し、仲間と動きを高め合う体育学習

札幌市立宮の森小学校

1 研究発表の概要

(1) 研究主題

「何度も挑戦し、仲間と動きを高め合う体育学習」

(2) 研究の仮説

何度も挑戦したくなる教材と仲間と高め合う交流場面の設定が、動きの高まりにつながる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉積み重ねが生きる教材化

〈視点2〉問題意識を共有できる学習展開

2 公開授業について

(1) 第3学年 走・跳の運動「幅跳び」

授業者 石村 宣人

【準備活動】

・ストレッチ運動（上に伸びる、屈伸、跳躍、伸脚、アキレス腱、手首足首、首・肩回し）

【課題把握】

・「踏み切りをどのように工夫しよう？」

【いろいろな跳び方に挑戦】

・ビッグジャンプ

・スリージャンプ（重点的に指導）

→腕を振ってふわっと跳ぶようにするとよい。

・ダイナミックジャンプ

【ポイントゲットゲーム①】

・踏み切りの仕方に着目できるよう子どもたちに声をかける。

・どのように踏み切っていたのかを考えることができるようにかかわる。

・子どもたちの反応

→「はねている感じ」「跳んでいる感じ」「片足で押す感じ」「ドシってなっている」等

【交流（踏み切りのコツについて）】

・走って跳ぶときに強く踏む。

・上に跳んで下に着地するとよい。

・踏み切り板をつま先でジャンプするとよい。



【スリージャンプ】



【踏み切りに着目】

- ・スリージャンプみたいにふわっとするとよい。
- ・腕を振る。
- ・秘密兵器（練習器具）の提示
- ・上の方向にしっかりと蹴ることを大切にする。

【練習】

- ・練習器具を使って練習。
- ・置いている角度に沿って跳ぶとよい。

【ポイントゲットゲーム②】

- ・上の方向に跳ぼうとしている子どもたちの姿が見られた。
- ・練習器具を用いて、跳ぶ角度を上げる姿が見られた。

【まとめ】

- ・上の方向は大事であるということの確認。

【整理活動】

- ・ストレッチ運動（手首足首、肩回し、屈伸）

【後片付け】

(2) 第6学年 ボール運動「ゴール型」（フラッグフットボール）

授業者 山崎 稔英

【始業前】

- ・グループごとの準備運動（ストレッチ）
屈伸 アキレス腱 腕のストレッチ 手首足首 首

【学習カードによる前時の振り返り】

【準備活動】

- ・2対1のランゲーム
- ・ランキャッチゲーム
ボールを持っている人に体を向けるよう声をかける。



【課題把握】

【試合前に肩を組んで気合いを入れる姿】

- ・「仲間の特徴を生かした作戦を成功させよう！」
- ・「この人がいるからこうしよう」という作戦を意識することを確認した。

【お試しゲーム（4回ダウン⇔パドルタイム）】

- ・ボール隠し作戦
- ・ロングパス作戦
- ・パス&ラン作戦

パドルタイムでしっかりと作戦を確認し合いながら4回の攻撃を行う姿が見られた。

【作戦タイム】

- ・作戦の確認
- ・どんな練習をするのかの確認
- ・フェイクで回す練習、パス練習、ボール隠し作戦の練習

【4対3のメインゲーム①】

- ・各チームの作戦の様子

○青対黄（青の攻撃）

①ロングパス～△

（成功したが2回投げてしまい失敗）

②ランプレイ～×

③ランプレイ～○

④パスプレイ～×（キャッチ失敗）

○赤対青（赤の攻撃）

①隠し作戦 ～×

②パス作戦 ～×

③ロングパス～×

④ランプレイ～○

○赤対黄（黄の攻撃）

①ランプレイ～×

②ランプレイ～×

③ランプレイ～×

④ランプレイ～×

【交流（仲間のよさについて）】

- ・「フラッグをとられそうになったけどあきらめなかった。」
- ・「Aくんは、はじめの頃は全然できなかったけど、前よりもうまくなっていて、今日の最後にはタッチダウンできてよかった。」
- ・「ジャマーの時にジャンプしてボールを取っていた。」
- ・「タッチダウン成功の陰にブロックの人たちの気合がすごかった。」



【作戦の確認】

【整理活動】

- ・ストレッチ運動（手首足首，屈伸，肩回し）

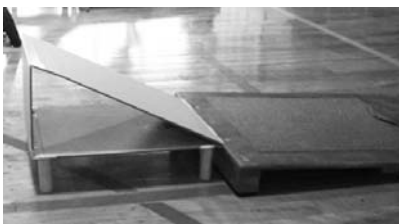
3 研究協議

(1) 研究について

- ・「もっとやりたい！」が生まれるために，安心して何度も試せる場や用具などの教材の開発を重視している。
- ・同時に即自的かつ具体的ななかかわりをすることで，課題解決への手ごたえを感じ，「ここまでできるようになった。」と実感しながら日常化への意欲を高めていくのである。
- ・研究の視点
 - 〈視点1〉積み重ねが生きる教材化
 - 〈視点2〉問題意識を共有できる学習展開
- ・研究の具体
 - 2年 「鬼遊び」
 - 5年 「ゴール型ゲーム（バスケットボール）」

(2) 第3学年 走・跳の運動「幅跳び」

【練習器具（秘密兵器）について】



- ・秘密兵器を用いることで子どもの動きがダイナミックになった。
- ・秘密兵器が必要だという子どもは，自分たちで跳び方を工夫している。
- ・始めのゲームでは踏み切りの角度が低かったが，踏切角が変わることで目標とする場所にたどり着く意識が芽生えた。
- ・秘密兵器は，着地・踏切角には有効であった。
- ・秘密兵器を置くことで，子どもの目線で着地点の的が見えなくなった。
- ・着地点の的が見えにくくなったので，片足着地になってきた。
- ・秘密兵器の子どもへの提示の仕方がどうであったか。子どもにとっては唐突感があったかもしれない。
- ・技能にはプラス，思考にはマイナスという意見があった。
- ・秘密兵器を置いてみて有効に働いた子，妨げになった子がいた。
- ・秘密兵器を先に出して，「こんな風に跳んでほしいんだけど」とイメージ化すると目指す姿に近付くのではないか。

【ポイントアップゲームについて】

- ・ポイントアップゲームをすることで動きが高まっていくはずである。
- ・遠くに跳ぶことと、目標の的におさまるということに矛盾を感じる。
- ・子どもは思いきり遠くに跳びたいと思っている。ここが矛盾を感じる。
- ・一本のラインをひいてそれを目標にすることで、自分の伸びを実感できる。

【教材化について】

- ・中学年の幅跳びは距離を競い合う競争の仕方、工夫の仕方など、技能ポイントが盛りだくさんである。
- ・3年生には陸上選手のように跳ぶことは難しいのではないか。
- ・空中を舞う感覚を味わうなど、ほかにも楽しさがあるはずと考える。

【その他】

- ・一人一人が跳ぶことを考える時間がなかった。
- ・子どもたちが考えやすい課題にするべきであった。

(3) 第6学年 ボール運動「ゴール型」(フラッグフットボール)

【パドルタイムについて】

- ・思考判断の優れた子どもの姿がみられた。
- ・パドル、作戦の際や、プラン通りにいかないときに教師はかかわりをもつことが必要である。
- ・人数が増えたことで一人一人がより正確に動いたり、役割分担をしたりすることが求められる。

【ランキャッチゲームについて】

- ・動いているところに投げるということを意識付けるようにすればよい。例えば、「右のいないところに投げるからそこに動いて!」とどのタイミングでどこに投げるかをしっかり伝え合うとよい。
- ・守りの子たちにははじめから1点もやらない守りもあるということを意識付けても、ゲームが活性化するのはないか。



【作戦について】

- ・身に付けた技能を生かせるようにできるとよかった。
- ・いろいろな作戦をもっと考えられるとよかった。
- ・めあてにあったチーム練習をするところが一番重要である。

【フラッグフットボールについて】

- ・結果ではなくプロセスを評価できる運動である。
- ・運動量よりも立てたプラン通りに動けたかどうかであり、量よりも質である。
- ・他のボール運動とのつながりを考えて計画を立てていかなければならない。

【その他】

- ・音楽での時間管理がすばらしい。
- ・できなかった子がタッチダウンできたところが本時における求める子どもの姿である。
- ・子どもたちが、振り返りの時にタッチダウンできた友達の活躍に気付いて発表することがすばらしかった。
- ・チームのめあてから個人のめあてをもたせられるとよかった。

4 支部研究発表について

(1) 発表の概要

①研究主題

「運動に魅力を感じ、自ら学び、高め合う体育活動の創造」
～生涯スポーツを目指したカリキュラムの開発を通して～

②研究の仮説

・運動に夢中になって 取り組む子	・友達と教え合い 学び合う子	・技能の向上を目指して 努力する子
研究仮説 1	研究仮説 2	研究仮説 3
子どもの発達や運動の様相の発展を踏まえたカリキュラムを開発し、実践することにより、子どもは運動の楽しさを味わい、夢中になって運動に取り組むことができるであろう。	子どもの発達に応じた「学び方」の指導を系統的に行うことにより、質の高い教え合いや学び合いがなされ、互いに高め合うことができるであろう。	個に応じた学習課題を追究させるとともに、適切な指導を展開することにより、子どもは自らの技能の獲得や向上を目指して努力し続けることができるであろう。

③研究の視点

〈視点 1〉カリキュラムの開発

〈視点 2〉学び方の指導

〈視点 3〉学びを支える授業作り

④研究の具体

ア 6年 ベースボール型（スローピッチベースボール）

イ 3年 ネット型ゲーム（キャッチバレーボール）

⑤研究の成果と課題

- ・ベースボール型のカリキュラムを作ることができた。
- ・単元を通じて指導すべき内容を意識しながら指導することができた。
- ・子どもの実態に合わせた学習展開を構築することができた。
- ・様々な領域、種目についてカリキュラムを検討していきたい。
- ・学び方についてどのような観点でモデル化していくか検討していく。

(2) 質疑応答

- ・ボールゲームで数的優位を作って行うことについてどうお考えなのか。
→函館としては、数的優位を作ることタスクゲームで有効であると考えている。
- ・学習としてのゲームとしては同数を基本に考えてきている。
- ・タスクゲームがこれからどのようにつながっていくのか札幌として考えているのか。
→指導要領では簡易化が言われている。

5 指導講評

(1) 研究発表について

- ・以下の点で宮の森小学校の研究提案をしてもらったと感じた。
 - ①組織研究として体育学習をどのように位置付けるのか。
 - ②どういうキーワードで研究を進めていくのか。
 - ③子どもの発達に即してどうあるべきであるのか。
 - ④教材化をどう図っていくのか。
 - ⑤子どもの達成感をどうフィードバックしていくのか。

(2) 第3学年 走・跳の運動「幅跳び」

- ・ゲーム化していくときの注意は以下の3点と考える。
 - ①遊びの中において自分たちでルールを決めて動きを作っていくこと。
 - ②動きの多様化は変化を付けていかなければならないこと。
 - ③あきないということ～競争，ポイント化など
- ・秘密兵器（練習器具）について，子どもは「遠くへ跳びたい！」「マス（目標）の中に正確に着地したい！」と思っていた。
- ・秘密兵器（練習器具）が，効率的に子どもたちに入ってきたかどうかの検証が必要である。
- ・ビッグジャンプの時の子どものかかわり方については，子どものやり方の違いをどう保障していくとよいのかを考える必要がある。
- ・他者を理解できるように違いが分かる子どもたちを育てていかなければならない。
- ・個人課題の追求をどのように保障していかなければならないのか。

(3) 第6学年 ボール運動「ゴール型」（フラッグフットボール）

- ・アメリカンフットボールはアメリカ人の気質を表している。それは「前へ前へ」ということと「役割が明確」なことである。これらのことを考え，ゴール型のゲームでは，ルールを規制することで技能の質が高まっていく。
- ・動きの高度化を進めていかなければならない。

(4) 支部研究発表について

- ・学校としてはどうカリキュラムをしていくのが課題である。そのためには
 - ①「繰り返し体制化していくこと」
 - ②「授業で証明していくこと」
 - ③「実践していくこと」の3点が必要である。
- ・子ども像を明確化したうえで具現化していくことが必要である。
- ・目指す像をしっかりと明確化していけばよい。

6 成果と課題

(1) 成果

- ・2つの授業とも子どもたちからの歓声がある授業であった。
- ・子どもたちにとって魅力的な運動であった。

(2) 課題

- ・子どもにとって解決したいと思える課題を吟味する必要がある。
- ・個人課題の追求をどのように保障していかなければならないのかを考える必要がある。
- ・子ども同士の学び合いをどう生み出していくのかを考える必要がある。

研究主題

自ら学び、高め合う体育学習

～仲間との自分を見つめる学び合いで「できる」喜びを味わう体育学習～

札幌市立福住小学校

1 研究発表の概要

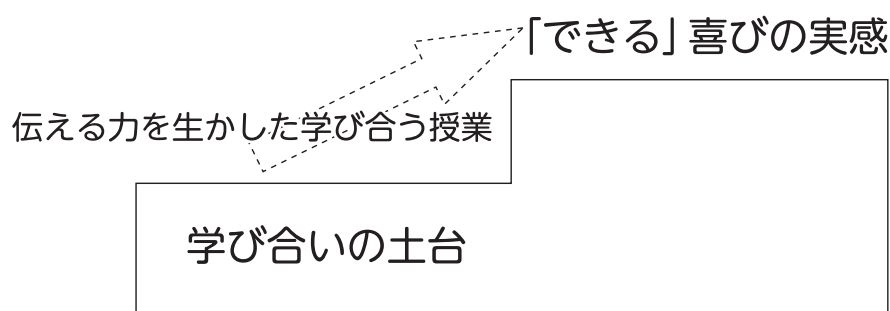
発表者：札幌市立福住小学校 教諭 村岡美千世

(1) 研究主題

- ・仲間との自分を見つめる学び合いで、「できる」喜びを味わう体育学習。

(2) 研究の仮説

- ・伝える力を生かし、学び合う授業を展開することで、子どもは「できる」喜びを味わえる。



(3) 研究の視点

〈視点1〉『「できる」喜びを味わえる教材の開発・工夫』

- ・単元の中で①身につけさせたい技能の明確化，②実態把握，③興味関心・個に応じた教材の開発・工夫，④運動との出会いや場の工夫，⑤生涯スポーツへの視点，⑥評価規準・評価方法という点を重視する。

〈視点2〉『「できる」喜びを味わえる学習過程の構築』

- ・主に本時の中で，①学習過程の把握，②試行活動，③個人課題の設定，④追求活動，⑤評価活動という点を重視する。

(4) 実践例

〈実践例1〉「第5学年 体力を高める運動～連続2人跳び～」

- ・短縄を1人が回し続け，その中を連続してグループの子が順に入って跳んでいく。

〈実践例2〉「第6学年 体力を高める運動～短縄チャレンジ～」

- ・ペアで短縄にチャレンジする。仲間同士，跳ぶ回数を数えたり，「肘を体につけて…。」などとアドバイスし合ったりして跳んでいく。

〈実践例3〉「第6学年 体力を高める運動～ダブルタッチ～」

- ・ダブルタッチの「入る→跳ぶ→抜ける」動きを単元を通して挑戦した。

○子どもたちが「できた!」と喜びを実感できる授業を積み重ねてきました。喜びを実感した子は、授業だけではなく、休み時間や放課後にも体を動かそうとします。

○実態や前時までの様子を踏まえ、「学び合いの土台」を分析します。集団としてどんな力が身についているか、何につまずいているか、を見つめます。課題を見出し、全体での解決を目指すこと、つまり「伝える力を生かした学び合う授業展開」、動きを見合い、よさを見付け合い、言葉や動きでアドバイスし合う、そんな子どもたちの姿が見られることを願って、授業作りを行ってきました。

2 公開授業について

(1) 第6学年 領域名 体づくり運動

「単元名 つくろう! クリアしよう! My アッププログラム」 指導者 上木 一也

- ・各グループに分かれ、ストレッチを始める。教師も各グループを回りながら、一緒にストレッチを行う。
- ・短縄を使って、ラダーステップやバンブーステップ、一人跳びなどの補強運動を行う。
- ・グループごとにダブルタッチで1抜けや3抜けなど本時の課題に迫る補強運動を行う。子どもたち同士で、声を掛け合い縄の中に入るタイミングを確認する。
- ・課題を確かめ、各グループで自分たちの追求活動を始める。
- ・教師は各グループを回りながら、スローモーションで入るタイミングを確認したり、うまくできている子の様子を見たりしながら、グループに関わっていく。
- ・交流により、追求のポイントが明確になり、グループごとに入るタイミングがはっきりするよう声を掛け合ったり、お互いの動きを工夫できるようにアドバイスしたりしながら、関わりをもって追求活動が深まった。
- ・自分が高まったと感じたポイントにネームカードを貼り、振り返りをする。
- ・整理運動をして授業を終える。



(2) 第1学年 領域名 器械・器具を使っの運動遊び

「単元名 コロコロランド」

指導者 石田 愉良

- ・ストレッチや力試しの運動など準備運動を行う。
- ・グループごとに分かれて、ゆりかご・かしわもち・テレビ塔（肩倒立）・カエル立ち・カエルの足打ち・ブリッジなどの補強運動を行う。
- ・「起き上がり名人になる」という課題をとらえる。
- ・コースの上にゴムを張り、腰を高くして大きく前転する場など、いろいろな練習コースに分かれて、課題解決にむけお互いにアドバイスしながら活動始める。
- ・教師は各コースを回りながら、「足をギュンとしようね」とか、「ゆりかごみたいにするといいね」などと、具体的に子どもたちに声をかけ、足を曲げるタイミングをイメージできるように関わっていく。
- ・本時で身につけたい動きを子どもたちに見やすくなるよう、上手にできた子にお手本になってもらいながら、焦点化した全体交流をもつ。
- ・コースに分かれ、動きが獲得できるよう活動始める。



- ・教師は各コースを回りながら、動きが獲得できるよう、苦手な子に体を支え体感できるようにしたり、坂道になっている場で、より具体的に声をかけるなどして、関わっていく。
- ・足や腹筋などの整理運動をして、授業を終える。

3 研究協議

(1) 研究について

- ・夏は、外で元気に遊ぶ子どもの姿が多く見られます。「かたき」と呼ばれるボール遊びや登り棒に雲梯、短縄・長縄を使った縄跳びなど学年の枠を超えて遊んでいます。
- ・冬は、グラウンドのスキー山（雪山）で米袋のそりで遊んだり、新雪に自分の体の跡や花模様を作って遊んだりしています。
- ・そのほかにも、鉄棒や縄跳びの検定を委員会活動で行い、記録カードを作って活動を促してきました。このような遊びや体を動かす環境を整えることで、子どもたちが外遊びをするようになりました。

(2) 第6学年 領域名 体づくり運動

「単元名 つくろう！クリアしよう！My アッププログラム」

Q 思考・判断の評価に最後の交流で行ったネームカードを貼らせた（自己評価）のが関係があったように思うが、今回の四つの観点で自己評価するのは難しいように感じたのだが、どのような意図でネームカードを貼らせたのか？

- ・授業で取り組めるダブルタッチの「入って跳ぶ」のコツを教えてほしい。

Q 技に挑戦することで巧みな動きが身につくのだろうか？ダブルタッチの中でシュートするなどの動きが巧みな動きとなるのだろうか？

Q 子ども個々は、どんなめあてをもっていたのか？いろいろな技に取り組んでいたが、巧みな動きの質を上げようとしていたのだろうか？

Q 5年生から6年生への動きの変化は？

Q 「動きの持続」のとらえ方は、どうなっているのか？

Q 体力向上プログラムの作成は、子どもたちに参考になるものを提示し、子どもたちが選択していったのか？

A ネームカードで、何が巧みな動きにつながっていたのかという子どもの意識を見たかった。

A 大縄で、かぶり回しとむかえ回しでの8の字跳びを大切にする。とくに、むかえ回しでダブルタッチの感覚づくりとして大切に扱ってきた。

A 技を見つけながら、リズムタイミングなどが巧みな動きの大事な要素になると、子どもたちが感じながら取り組んできた。

A 動きの質としては、関係ないと思われるものもあったが、個ではできなくてもグループでお互いに関わりながら高め合えるようにしてきた。

A 5年生では、短縄で変形の2人跳びやリレー形式の跳び方に取り組み、制限時間内での跳ぶ回数を増やすなどの経験をしてきた。

A 事前にプロの方の跳んでいる映像は見せたが、子どもたちが自分たちの感覚をもとにオリジナルで取り組む技や難易度を考えてきた。

Q動きが見えるような手立てがなされていたが、指導内容（カリキュラム）などは、札幌として統一のものなのか？福住小の自校カリなのか？授業者のアイデアなのか？

A札幌市は「手引き」という全市共通のカリキュラムをもとに学校の地域性・児童の実態を踏まえながら取り組んでいる。

Q跳ぶ時間より追求する時間（考える時間）が多かったが、できない子（跳べない子）の運動量の確保は？

Qカードの書かせ方のポイントは？見取るポイントは？…自分なら、めあてや動きの変化などを見取る。

Qこの授業で何が学べたのだろうか？ダブルタッチの仕方？

Q服装に関して、安全面を考えると動きやすい服装となるが、指導は？

・何かをしながら別のことをするのは高度なことである。今の子どもには、足りない力でもあり、とても大切なことである。難易度を上げるのではなく、技の組み合わせで十分巧みな動きを身に付けられると思う。

A跳べない子へ関わり、グループの力で高められるようタイミングなどを確かめた。

また、授業だけではなく、休み時間も活用してきた。

A数値化することは難しいと思うので、単元を通して見取っていく。

A行い方（コツ）で、巧みな動きが時間できるように心がけている。

A札幌は体操着がないので、「体育がある日に動きやすい服そう」という指導をしている。

(3) 第1学年 領域名 器械・器具を使っの運動遊び

「単元名 コロコロランド」

Q前転がりと前転の違いは何だろう？体を順にマットにつけていく感覚が大事である。今日の授業では、ゆりかごから着地への流れがよく見えた。着手の指導も低学年からしっかり行うべきでは。

Q動きのバリエーションは大切だが、後ろ転がりや横転がりなどの感覚づくりは？

・裸足（靴を脱いで）でマットの上を動くことも大切だと思う。

Q「よい動き」とは、1年生にとってどのようなものだろうか？

Q運動遊びと運動の違いや運動遊びのおさは？

・楽しくできる場…思考判断や目標など、単元構成を工夫することが大切であると感じた。

Q視覚化…カードや絵でイメージしやすくなっていた。共有化…話し合いや子どもたちができたことを確認するタッチなど。焦点化は？ストーリー性と「起きあがる」ということの関連は？挑戦したくなる場の工夫は？

A前転がりなので、器械運動の前転の手前と考えている。着手については、「しっかり支える」という点を大事にしたい。

A子どもたち同士での見合いができるよう、今回は前転がりに縛った。2ヶ年のスパンで考え、補強運動に取り入れ、感覚づくりを大切にしてきた。

A1年生で動きを工夫することは限られていると思う。そこで、子どもたちの気付きを生かしながら取り組んできた。

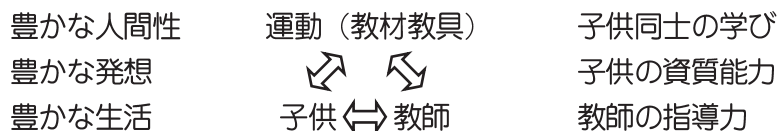
A系統性をふまえて器械運動につながるものとする。

A前時にできた、子どもの紹介をすることで、本時のイメージにつながり、「まっすぐ」「どすんとしんない」など、子どもたちの「よい動き」となるキーワードにした。

4 支部研究発表について

(1) 発表の概要

①研究主題「豊かにかかわり 高め合う 体育活動を目指して」



②めざす子供像「自ら求める子」「豊かにかかわる子」

③研究仮説「視点1…〈指導内容〉基礎となる体力や技能の高まり」「視点2…〈教師のかかわり〉人や運動と豊かにかかわる態度の育成」

④めざす授業像「基礎・基本の定着をめざす授業」

⑤平成24年度のテーマ「小中の系統性をもった指導」

⑥研究の実際

5 指導講評

(1) 第6学年 領域名 体づくり運動

「単元名 つくろう！クリアしよう！My アッププログラム」

- ・子どもたちは集中して、楽しんでいたのがよかった。
- ・ターナーチェンジをしている子たちがいたが、体をひねれている子は出ながら同時に縄をつかむことができていた。遊びの中でも、ひねる動きを取り入れてた遊びをしていくとよい。
- ・組み合わせの運動は大事であるが、個々の動きを完成させることも大切である。技を精査して、完成度の高い技をダブルタッチの中に取り入れるのでもよかった。個々に短縄の動きにも能力差が見られたので、そうすることで、一定の基準で評価もしやすかった。
- ・何を指導するのか、教えるのか、ということを明確にして授業を行うことが大切である。
- ・準備運動での、ラダーステップは、短縄を活用したため梯子状になっていなかったため、足が上がっていなかった。また、同じ足からスタートしていたので、逆の足からスタートさせ、リズム感を養ってあげるとよかった。



(2) 第1学年 領域名 器械・器具を使っの運動遊び

「単元名 コロコロランド」

- ・前転がりは、頭の上・頭の斜めを越えることができればよい。今回は、起き上がることで前転に近づける教材化になっていた。補強運動の中の側転（川跳び越し）が上手だったので、今回の授業に取り入れてもよかったのではないかな。
- ・1年生は、体格的にまだ部位の発育に差がなく、側転はしやすいが、腹筋を要する転がり系は、指導に工夫が必要である。特に、腹筋が鍛えられないと前転の起き上がりはしにくい。
- ・場のねらいが、きちんと子供に落ちていなかった。鈴がついている場では、ならないように前転がりする意識が見られなかった。
- ・場によっては、踏み切り板を活用するなど、身につけさせたい動きに応じて手立てが必要

だった。

- ・子どもには、腕支持が難しかったようだ。「カエルの足打ちから前転がり始めるんだよ。」という声かけがあってもよかった。腕支持から頭越をすると転がりやすくなる。
- ・子どもにとって、足をそろえてたつことは難しい。回転スピードをつけたり、足をクロスする・膝を開くなどしたりすると小さい子でも立ちやすくなる。

6 成果と課題

(1) 成果

〈6年生〉

- ・子どもたちのアイデアを生かして、レベルを設定することで意欲的に活動することができた。
- ・大縄で、かぶり回しやむかえ回しで8の字跳びをすることがダブルタッチの「入る・跳ぶ・出る」の感覚づくりになった。

〈1年生〉

- ・ゆりかごから着地への流れは、1年生にもわかりやすかった。
- ・補強運動の中で、腕支持などのいろいろな感覚を養っていくことは大切であった。

(2) 課題

〈6年生〉

- ・完成度の高い技で取り組むなど取り扱う技を精査したり、ポイントを絞っておくことで教師の評価も子どもの自己評価もしやすかった。
- ・「巧みな動きの質」を上げるためには、何をどう教えるのかもっと明確にすべきであった。
- ・ひねる動きにも着目しておくとうよかった。

〈1年生〉

- ・着手について、もう少し具体的に指導してもよかった。
- ・場のねらいがきちんと子どもに伝わり、意識化できる手立てが必要であった。
- ・身体的発達と運動構造に着目した、教材化も必要であった。

研究主題

「わかる」「できる」夢中になる体育学習

～体を動かす心地よさや、動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～

札幌市立資生館小学校

1 研究発表の概要

発表者 札幌市立資生館小学校 教諭 生駒 大地

(1) 研究主題について

本校は、自分の目標や願いをもち、そこに向かって進んでいく意思をもつ子どもを育む「夢かなう学校」を教育理念に、研究主題を「夢をかなえるすてきな子の育成」、副主題を「わかった できた 楽しい授業」と設定して日々授業を研究している。毎日の課題解決的な授業を通して、一人一人の子どもが自分の課題をもち、それを追求する手立てを仲間や教師と共に学んでいくことで、「わかった」「できた」という実感をもつことができると考えている。

本校の児童は、スクールバスで通学したり、近隣に運動できる場所が少なかったりといった実態から、運動経験が極端に少なく、体を動かすことに苦手意識をもっている子どもが少なからず見られる。また、昨年度の新体力テストでは、反復横とびは男女とも全学年で全国平均値を上回っているものの、それ以外では、男女ともほぼ全学年で全国平均値を下回るという結果が出ている。加えて学年が上がるほど、全国平均値との差が拡大していく傾向にある。スポーツ少年団に入り、積極的に運動に取り組んでいる子はいるが、それ以外の子は日常的に運動に親しむことは少ない。体力の低下、運動する子としない子の二極化という全国的な傾向が本校にも当てはまっている。また、生活リズムが不規則で、学習に向かう準備が整わないまま登校している児童も見られる。学校生活の中でリズムを整え、運動への関心を高めるために、登校後の朝の時間を活用して全校で体操をしたり、放課後のグラウンドを開放して体を動かす場所を提供したりするなど学校一丸となった取り組みも進めているところである。

こうした本校の子どもたちには、体を動かすことの心地よさを伝え、動きが高まることの喜びや、ともに学び合い高め合おうとすることの楽しさを実感させることが大切だと考えた。「楽しさ、心地よさを感じ運動する」→「仲間との関わり合いの中で高まりを実感する」→「より夢中になって運動に取り組む」というサイクルを体育科の学習の中で経験していくことで、その他の様々な場面でも日常的に仲間と運動に親しんでいこうとする子どもを育てていきたいと考えた。

本校の研究の経過と児童の実態を踏まえ、体育部の研究主題を、『「わかる」「できる」夢中になる体育学習～体を動かす心地よさや、動きの高まりを共に喜び合える子どもを目指して～』と設定した。また、本校の目指す子ども像をもとに、体育部としての目指す子ども像を以下のものに設定した。

- 自分の課題をもち、自分から運動へ取り組もうとする姿
- 仲間と共に学び、教え合い助け合う中で、動きの高まりや運動の心地よさを味わう姿
- 頭と体を働かせ、粘り強く運動に向き合って課題を解決していこうとする姿

(2) 研究の仮説

目指す子ども像に迫るために以下の仮説を設定した。

個に応じた課題をもてる運動・人とのかかわりが生まれる運動に十分浸り、個の高まりとともに集団の高まりが達成できる学習を構成することで、一人一人の子どもが「わかる」「できる」を実感し、「もっとうまくなりたい」「もっとみんなと楽しく体を動かしたい」と夢中になって運動に取り組むことができる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉 運動への意欲を高める教材化

子どもたちが「楽しそう!」「やってみたい!」と運動への意欲を高める教材との出会いを設定する。具体的には次の3点を重視した教材化を行っている。

○自分にもできそうだという意欲がもてるルール・場等の設定

○個々の技能差を許容できる課題設定

○人と関わり合いながら運動できる学習展開

このように、意欲をもって運動に浸ることができる教材化を図ることで、子どもたちは課題をもって運動に取り組み、互いに教え合い助け合いながら共に動きを高め合っていく姿がみられるようになってきている。

〈視点2〉 個の高まり、集団の高まりを意識させる教師のかかわり

運動場面の中で、子どもが自分の動きを客観的に認識することは難しい。教師が評価の観点を明確にし、動きの高まりが表れた瞬間を価値付け、即時的に評価していく関わりを大切にしていく。そこでつかんだ個々やグループの高まり、運動のコツを交流場面で共有する。具体的には、学習カード、掲示物、映像機器の活用などを通して、「運動のコツが目に見える」交流を図る。ここで共有した学びを伝え合い教え合いながら、子どもたちに再び運動に取り組ませていく。このような教師の関わりから、子ども同士が互いの動きに関心をもち、仲間と関わり合い高め合いながら運動に取り組んでいくことができると考える。

2 公開授業について

(1) 第6学年 器械運動「マット運動」

授業者 山本 敦史

〈学習課題の把握〉



前時までにペアで考えた技の組み合わせを、運動①で試すことを確認した。その際に、2人の動きをそろえるためには、声を出すことが大切であると指導した。

また、技自体が正しい動きなのかについては、事前に子ども達に配付している資料をもとに確かめることも確認した。

〈運動①〉



〈全体交流〉



〈運動②〉



ペアで動きをそろえることに焦点を当てて運動させるために、児童の実態に応じた練習ができるよう坂マットや細いマットの場を用意した。また、映像機器による遅延再生でペアでの動きの様子をすぐに確認でき、次の練習に生かされるようにした。教師は、それぞれのペアに「そろってきたね」や「着地がもう少しそろえられるかな」など声かけをしていた。

運動①で、動きがそろわなかったペアのために、全体で動きをそろえるためのコツを考えた。児童からは、「1, 2」など声に出して数を数えると良いという考えが出た。それをもとにリズムを合わせることが大切だと確認した。また、着地した位置のずれを取り上げ、これをそろえるために、体の大きさの違いはあるものの技の大きさも気を付けると良いということも確認した。

全体交流で確認した2つのポイントに気を付け、再度練習を行った。教師は、「声を出そう」「自分たちのリズムを作ろう」「技のタイミングがそろってきたね」など、子どもたちが熱心に取り組む姿を称賛していた。また、同じマットで練習する他のペアから声をかける姿も見られるようになった。

(2) 第2学年 ボールゲーム「キラキラ・シュートゲーム」

授業者 長谷部舞里

〈準備運動「なかよしボールタイム」〉



子どもたち一人一人にボールを持たせ資生館小体操を行った。その後、なかよしボールタイムとして、3つの場（①的をねらって強く早く投げる場、②山なりのボールを投げる場、③穴をねらって正確に投げ入れる場）をチームごとに順番に経験をさせた。毎回、授業の最初に取り入れることで、ボールを投げる能力を高めることをねらった。

〈シュートゲーム①〉



〈全体交流〉



〈シュートゲーム②〉



ジャマーの出現により、ゴール正面の穴にボールを入れにくくなった。そこで、ゴールの上からも得点できる新しいルールが加えた。児童は、ゲーム①で実際にゴールの上から得点を決めようとするが、投げたボールがゴールの上まで届かなかったり、ゴールを越えてしまうなどの姿が見られた。

全体交流では、ゴールの上をねらって得点できた子を取り上げ、「どのようにしたらゴールの上から得点できたの？」と問いかけたところ、「ちょっとやさしく上に向かって投げる」という考えが出てきた。また「ビューッと投げたら、ゴールを越えたよ」などの考えも出た。そこから、ジャマーに邪魔されずにたくさん得点を取るためには、「ゴールの上をねらって、やさしく投げると良い」ということを確認した。

児童の動きから、全体交流で確認したことを意識して、ゲームに臨んでいる子が増えたことが伝わってきた。また、周りで見ている同じチームの仲間からも「上から投げて」「もっとやさしく投げたほうがいいよ」などアドバイスをする姿も見られるようになった。

3 研究協議

(1) 第6学年 器械運動「マット運動」

- 資生館小学校として6年間のマットプランがある中で、どのように取り組んできたのか。

学習指導要領解説に例示されている技を各学年で行ってきた。また、札幌市には、市内の全小学校に配布されている学習の手引きがあり、それに基づいて指導している。しかし、実態としては、5年生までの学習で習得しているはずの技が身に付けていないまま、6年生になった子もいる。そこで本単元では、これまでの学習で習得できなかった技についても、さかのぼりながらできるようにすることも考えて授業づくりを行ってきた。

- ペアの決め方は、どのように行ったのか。

単元前半の個の追求場面において、児童の実態を踏まえてできるだけ同じような能力の子ど

も同士がペアになるよう教師側で考えた。その結果、これまでマット運動を苦手としている子どもたち同士でグループが構成されたために、逆に意欲的に取り組んでいる姿も見ることができた。加えて、少しずつより難しい技に挑戦してみようと意欲を高める姿も見ることができた。

- 授業会場に設置されていた映像機器は、どのように生かされ、効果はあったのだろうか。

映像機器は、本単元の最終目標であるペアで技をそろえるために自分たちの技がそろっているのかをすぐに確認することができ、非常に効果的であった。しかし、それらを活用しているペアは多くはなかった。実際に、技がそろっているかどうかを確かめる手立てとして、周りで見ている友達にアドバイスしてもらったほうが、意欲的に取り組むこともできると感じた。

- 今日の授業において、言語活動とは、どのような場面のこととしてとらえていたのか。

全体交流の場面を言語活動としてとらえている。また、自分の動きを言葉にする活動やペアで教え合う場面も言語活動と言える。また本時の「リズムをそろえる」なども言語活動の1つととらえている。

(2) 第2学年 ボールゲーム「キラキラシュートゲーム」

- 本単元が、6年生までの学習とどのようなつながりがあると考えているのか。ボール運動のゴール型ゲームの学習全般にはつながっていないのではないかと。

本単元は、中学年のポートボールや高学年のバスケットボールにつながる運動と考えた。相手に応じた動きを考えていくことがゴール型ゲーム全般につながり、相手に応じた動きを考えさせることは評価項目にある「思考・判断」ととらえられる。これらを考えさせることが、今後全てのボール運動にもつながっていくものと考えた。

- 本時で使用したボールは、どのようなことに重点を置いて選択したのか。また、ボール操作の技能面を高めるためにどのような取り組みをしてきたのか。

どの子ども抵抗感を感じることもなく、操作しやすいものと考え選択した。また、児童がボール操作に慣れさせるために、人数分のボールを準備し、たくさん触れる機会を作ってきた。

- ボールを操作しながら、動きを身に付けることは難しいのではないかと。

2年生という発達段階を考慮し、実際に動きながら試してみることで気付くことも多いと考えた。実際に、振り返り場面での感想や学習カードからも児童の気付きを見取ることができた。

- 今日の授業において、言語活動とは、どのような場面のこととしてとらえていたのか。

自分の動きを言葉で表現する場面が言語活動ととらえている。自分の考えを表現しようとするが、それができない子に対して友達が助けてあげてを繰り返していくことで、苦手としている子どもどう表現すればよいのかを学んでいく。体育の授業を通して、子どもたちの動きのイメージと言葉をつなげていきたい。

4 支部研究発表について

発表者 当麻町立当麻小学校 中山 敬史

(1) 発表の概要

- ① 研究主題「運動のよさを実感し、互いにかかわり学び高め合う体育学習

～運動に熱中し、仲間と学び合う子の育成～」

② 研究の視点

〈視点1〉子どもが熱中する教材作り

〈視点2〉課題解決を基盤とした、仲間とかかわり学び合う工夫

〈視点3〉成長や学びを実感できる評価

③成果と課題（○成果 ▲課題）

〈視点1〉子どもが熱中する教材作り

○どの学校でも使用されている教具に一工夫を加えて実践することが、運動の日常化へつながっていく。

▲運動のよさを実感した姿を「運動に熱中している」とするが、運動に熱中しているかどうかを客観的に測るものさしが必要となってくる。現在は、教師の主観でその姿を見取っているので、具体的な検証方法を検討していく必要がある。

〈視点2〉課題解決を基盤とした、仲間とかかわり学び合う工夫

○個に応じた学習課題を設定することで、全員が運動のよさを実感させることができる。

○グループ課題の設定のためには、その運動に対して十分にグループで取り組む時間を確保することが前提となる。また、達成可能な課題を立てることも必要である。

○グループ内での役割分担を明確化しておくことで、グループがより集まりやすい。

○課題追求場面で技能ポイントを指導したい場合は、子どもたちを一度集め、模範となる子の動きのどこが良いのかを思考させることが、個やグループの高まりのために必要である。

〈視点3〉成長や学びを実感できる評価

○相互評価においては、ネームマグネットを用意することで、自分の立場がはっきりとし、進んで良いところを見つけることができる。

○良い動きや考えが進んで教師が取り上げ価値付けすることで、子どもたちの相互評価をする観点がはっきりしてくる。

▲学習カードによる自己評価であるが、低学年においては簡易的なものにしないと、時間がかかり、運動量の低下につながるので、工夫が必要である。

5 指導講評

(1) 第6学年 器械運動「マット運動」

○「技を組み合わせてペアでそろえる」は、学習指導要領解説にもあり、男子新体操やスイスの集団器械運動につながり、非常に有効な考えである。

○ペア学習をすることは、2人でやってみようという意欲面につながる手段にもなりうる。

○ペアで技を合わせることは、基本の技の技能面を高めることにつながり、技がそろったときに、ハイタッチをするペアがあったが、この行為も技を合わせる必然性の1つと考えられる。

(2) 第2学年 ボールゲーム「キラキラボールゲーム」

○本時で授業者は、児童に「ふわっと」投げることを身に付けさせたかったのだが、「ビューッと」投げることでどちらが楽しいと感じる投げ方であったのか。教師が身に付けさせたいことと、児童が楽しいと感じることが一致するような授業づくりを目指していくべきである。

○ゴールの上に向かって「ふわっと」投げている児童が、全体交流後のゲーム②でたくさん見ることができた。しかし、教師側がねらっていた「ふわっとやさしく」よりも、上に向かって力強く投げているように見える子も多く見られた。そこで「ふわっと」という考えを児童により具現化させて理解させるためには、「どのような軌道であったか」と聞いても良かったのではないかな。

分科会研究発表・研究協議等記録

中 学 校

第6分科会

札幌市立上野幌中学校

第7分科会

札幌市立月寒中学校

第8分科会

札幌市立向陵中学校



北海道大学 イチヨウ並木(札幌市北区)

研究主題

未来へつながる保健体育学習

～自ら仲間と高め合いながら、心と体をはぐくむ生徒の育成～

札幌市立上野幌中学校

1 研究発表の概要

発表者：札幌市立上野幌中学校 教諭 太田 吏

(1) 研究主題

未来へつながる保健体育学習

～自ら仲間と高め合いながら、心と体をはぐくむ生徒の育成～

(2) 研究の仮説

互いに学び合う中で、考えたことを表現することにより生徒は豊かな心と体を育むことができる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉 生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

〈視点2〉 課題解決的に取り組む学習過程の構築



2 公開授業について

(1) 第2学年 武道「柔道」

授業者 伊東美美枝

〈授業者から〉

- ・他の運動と比べて、柔道は腕と脚の動きが異なる運動であり、生徒にとっては難しい動きであると改めて感じた。
- ・昨年度の授業では、膝車、支え釣り込み足、体落としを学習したが、「くずし」を体得させることができなかった。そのため、今年度は、「くずし」の部分に重点を置いて授業を展開している。
- ・学習のメリハリをつけるため、そして、話し合いが中心となることによる運動量の減少を防ぐために、グループでの練習中にBGMを利用した。
- ・三連攻撃を通し、同じ課題を生徒同士で共有することを目標とした。その結果、効果的な技の習得につながるヒントになり、生徒の笑顔を見ることができた。
- ・反省点としては、体落としだけで5時間使ってしまったため、運動のできる子にとっては物足りない感じがしたのではないかな。



(2) 第3学年ダンス「創作ダンス」

授業者 齊藤 研介

〈授業者から〉

- ・3年生からダンス「男女共習」を始めた。当初、ぎこちなかった男女の雰囲気がしだいに

良くなり、手もつなげるようになっていった。これがダンスの価値だと思う。1年生からの取組がいかに大切かがわかった。

- ・ダンスの基礎基本である「イメージをとらえて自己表現したり、思い切り体を動かして心を開放したり」という部分を大切にしていた。自分もその部分を意識した。
- ・グループテーマの設定に時間をかけ、「イメージ」を大切に、動きにつなげる手立てを重要視した。(特に映像や写真をヒントに)
- ・今回の授業では「ダンスキーワード (DKW)」がしっかり意識されていたが、生徒や班の動きを上手に引き出すことは今一步だった。
- ・今回の全体テーマを「命」としたが、テーマにそったダンスをイメージすることが生徒にとっては難しく、苦勞していた。また、設定したテーマにそった表現が難しく、友情をテーマにしたグループでは、いじめのシーンが出てくるなど、教師側でのコントロールも必要であったと感じた。



3 研究協議

(1) 研究について

- ・特に質問は出されませんでした。

(2) 第2学年 武道「柔道」

○本時の授業の評価は、どのように行うのか。

- グループで話し合った内容を学習カードに記入させ、「思考・判断」の観点の評価をしようと考えていたが、記入する時間を確保することができなかった。後日、学習カードに記入させ、評価したいと考えている。



○「美しい体落とし」とあるが、どのようなものなのか。また、教師と生徒のイメージの整合性はどのように取っているのか。

- スムーズな動きで、投げ終わった後も取りの姿勢が崩れたりせず安定していること、受けが正しく受け身が取れていることを「美しい体落とし」と定義した。今回の授業では、受けと取りの両方で美しい技を身につけようとした。

また、柔道の6時間目の授業で、体落としのVTRを生徒に見せ、「美しい体落とし」のイメージを共有した。



○安全性について問題になっているが、どのように捉えているか。

- 授業の中で場面場面を捉えて、安全確認の仕方を徹底している。

○技の習得に関してはどうか。今後、応用するにはどうするか。

●3年生の選択の場面で、状況に応じた技がかけられるようになるとよい。

○課題解決の活動で、1年生に教えるように、との手法を用いたのはなぜか。

●自分たちが練習をしていて発見した技術上のポイントはもちろん、普段の練習であまり意識しなくてもできている技術についても、生徒にしっかり認識させるために、このような授業展開とした。

(3) 第3学年ダンス「創作ダンス」

○今回のダンスの授業では、グループで活動しているため、個人の評価を見取るのは難しいと考えるが、何か評価するポイントなどがあれば教えてほしい。

●1グループを5～6人とし、人数を少なめにして、個人の評価をしやすいようにしている。また、学習カードに記入した内容を毎時間チェックし、評価している。さらに、学級全体で6グループと多いためVTRに撮り、後で評価しようと考えている。



○授業の中で「思考・判断」の観点を見取るのは難しいと考えるが、判定基準みたいなものがあれば、ぜひ教えてほしい。

●グループの中で進んで発言や行動をしている生徒が「A」だと考えている。

○今回の全体テーマが「命」であったが、各グループのテーマはどのように設定したのか。

●今年の夏休みの課題として、生徒に「命」のことについて振り返らせる内容を出した。しかし、死を見つめることで生に気づく生徒が多く、これではダンスのテーマを設定するのが難しいと考えた。そこで、命の輝きに視点が向くように仕向け、今回のようなテーマを設定させた。

○今回の創作ダンスではBGMを使用していなかったが、今後グループごとに選曲させるのか。

●今回は、6グループ共通で利用できる良いBGMが見つからなかったこと、そして、練習中にBGMの操作にたいへん時間がかかることから使用しなかった。

○ダンスキーワードの中で「デッサン、デフォルメ」とあるが、イメージがわからなかったので、具体的に教えてほしい。

●デッサンとはそのものの特徴を捉えてすぐに動くことをいい、デフォルメとは動きを変形して特徴を強調するという意味があり、例えば、ゆっくり体を動かすことなどが含まれる。

○指導案のほうには、本時の評価がどのような取り組みをすれば「A」となるかが明記されていない。また、本時の学習課題の解決のために動いているグループはなかったのではない。

●評価の基準については、明記されていなかった。また、本時の学習課題では「おわり」に重点を置くとしていたが、生徒は「なか」を直そうとしてしまっていた。生徒は全体の流れを重視する傾向があり、「おわり」の動きを考えさせる今回の学習課題は、設定に無理があったのかもしれない。

○3年生ではダンスは選択領域だが、全員でやることには何か意図があるのか。

●本来であれば、選択をしている生徒を引率できれば良かったのだが、学校事情でそれができなかった。また、3年生であれば、今までのダンスの授業で蓄積してきたことが、今回の発表で見せることができる考えたため、全員が学習することとした。



○ダンスキーワードを生徒達はどのように理解しているのか。また、どのように動きを高めようとしているのか。

●何度も練習を積み重ねて、ダンスキーワードを生徒に習熟させていきたい。今回の授業では、ダイナミックな動きができていなかった。これからも、細かく生徒に訴えていきたい。それが、グループでの良い動きにつながると考える。

○「ここまで持っていきたい」という生徒の姿は、どのようなものか。

●連続的な動きを繰り返すことで、ダンスらしくなっていくことを伝えきれなかった。視線や目の動きまで意識させたいが、そこまで生徒に求めるのは難しいと考える。そこまでのレベルにするためには、1・2年生から教え込んでいく必要がある。

○学習計画で「はじめ」「なか」「おわり」と分けた理由は何か。

●一番表したいものを一番最初に作るべきだ、と学習したため、このように3つに分けて、このような授業の展開とした。しかし、生徒は「はじめ」から一連の流れを作りたがるため、このように分けたことには難があったかもしれない。本時では「なか」を引き立たせるために、空間の利用や人数のバランスなどを考えさせ「おわり」の動きを大切にした。

4 支部研究発表について

(1) 発表の概要

発表者：釧路町立別保中学校 教諭 所 桂太郎

研究主題

運動の魅力を実感し、夢中になって活動する子どもを目指して
～子どもの思考・判断の流れを踏まえた言語活動の充実～

研究の仮説

9年間のカリキュラムに基づいて計画した各单元において、科学的な認知学習、個に応じたスモールステップやねらいに合ったゲーム、具体的なねらいのあるペア・グループ学習を取り入れれば、子どもの運動への志向性は高まり、意欲的に学習に取り組むであろう。



研究の視点

〈視点1〉教師と子どもが運動特性をとらえ、学習のねらいを明確にする

〈視点2〉学習の目標を達成するための言語活動の充実

(2) 質疑応答

- 「わかる」「できる」「かかわる」の得点推移のグラフで、得点が下がってしまっていたときは、どのような内容の授業をしていたのか。
- ゲームの場面でキャッチの回数を減らしたため、また、同じ時期に学校事情で体育の授業がなかったため、値が急激に下がってしまった。しかし、そのゲームの方法に慣れてきたら、再度点数の向上が見られた。

5 指導講評

(1) 第2学年 武道「柔道」

- ・固め技を自分たちで考えよう、という授業を展開されていた女性の先生がいた。相手が仰向けの状態であること、相手とほぼ正対して抑えこんでいること、自分の脚や胴体が相手の両脚でからまれていないこと、などの固め技の条件のみを提示し、生徒たちに自由に固め技を考えさせる、という斬新なアイデアに感動した。そのあとに、実際に袈裟固めのやり方を学んでいくと、生徒の意識も高まるのではないかな。
- ・柔道の安全性について、例えば、受け身などは確実に身につく方法で、順序よく指導することが大切である。どう動くかを学び、何度も練習をさせて、体に動きをしみこませることが重要ではないだろうか。
- ・BGMについては、授業に有効に活かせるのではないかな。ただし、テンポやメロディの適切なものを選ぶ必要がある。また、体育館には良い音響設備をぜひつけるべきであると思う。



(2) 第3学年ダンス「創作ダンス」

- ・男性の先生方は、ダンスの授業を受けてきていないため、困っている先生も多いのではないかな。まずは、できることから始めていくことが大切であると思う。教師の持っているダ

ンスのイメージだと、授業をやることがつらくなるのではないか。

- ・ダンスの授業としては、1時間で完結させる学習方法もある。①ダンスウォーミングアップ、②課題の理解、③イメージと動きの共有、④グループ活動、⑤見せ合いと評価、という流れだが、今回の授業では、この流れで展開されていた。
- ・主体的な学習姿勢が、今回の授業ではよく見られていた。
- ・反復練習（覚えた）と追求活動（わかった）の積み重ねが、深い習熟となる。
- ・一斉授業だけではなく、どう動くかを生徒に考えさせることが大切である。

6 成果と課題

(1) 成果

- ・男性がやるもの、女性がやるもの、と分けられてきたのには、長い歴史がある。何で武道をやらなければならないのか、何でダンスをやらなければならないのか。今日は、そのことを問いかける第一歩となった。

(2) 課題

- ・「武道はけがが多く、危ない」「ダンスはヒップホップをやる」などといった報道がなされて、騒がれていることに対して、我々は授業の中で何を教えていくべきかしっかり考えていく必要がある。
- ・ダンスは女性の先生、武道は男性の先生が教える、という体制がずっと続いていたこと、また、女性の先生が男性の先生に比べて少ないことについて、今後どのように改善させていくか。
- ・武道を女性の先生でもできるような、そして、ダンスを男性の先生でもできるような授業づくりが今後大切になってくる。
- ・これから実際に授業をやってみて、見えてくる問題もあるはずである。「私には関係ない」と言わず、今後も研修を深めていくことが大切である。

研究主題

「わかる」「できる」楽しさを味わう授業のあり方

～仲間と関わりながら、健やかな心と体をはぐくむ～

札幌市立月寒中学校

1 研究発表の概要

発表者：札幌市立月寒中学校 教諭 藤田ゆきえ

(1) 研究主題

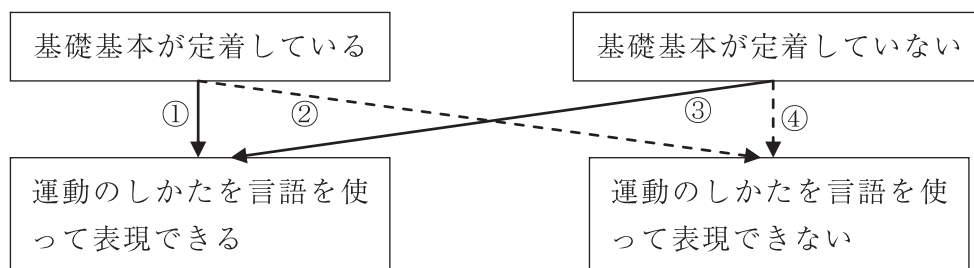
本校の研究主題「基礎・基本を重視した確かな学力の育成」～言語活動を中心とした学習展開の工夫～のもとに教科での研究主題を設定した。中でも自らの課題に気づき、解決を図る学習形態の基礎をつくるという点に力を入れている。具体的にはなるべく多くの題材で言語活動場面を設定し、試行、実践を行い、それによる生徒の変容を見取っている。

(2) 研究の仮説

仲間と関わりながら、自らの課題に気づき解決を図る学習展開の中で、「わかる」「できる」楽しさを味わうことができるという仮説を立て、検証するために2つの視点から実践した。

(3) 研究の視点

〈視点1 基礎・基本の定着を目指し、言語活動を取り入れた学習展開を図る〉



○本校では②または④の生徒が多い。

○「書く力」「読む力」「まとめる力」「伝える力」等の基本的な言語能力が不足しているために、基礎・基本の定着が着実に進まないのではないかと。

○①または③の生徒は、基礎基本をよく理解した上で自分の考えをまとめたり、表現する活動をさせると、更に考えが整理されて体をうまく使えるようになっていく。

〈視点2 「わかる」「できる」楽しさを味わえる課題解決型の展開を図る〉

○集団で行う球技では、特に練習方法を自分たちで工夫したり、作戦を立てる等の活動を通して、「わかる」楽しさを味わうことのできる主体的な学びの土台がつけられた。

○学期に一度行う20mシャトルランについては、自分の体力の高まりを自覚することにより、個人が自分の課題を意識し、解決している時間と捉えている。

○今後も「わかった」「できた」という実感を一人ひとりが抱くことのできるよう、仲間と共有する場面を数多く設定し、生徒同士で課題を見だし、解決の先にある「できる」喜びへとつなげていきたい。

2 公開授業について

(1) 第1学年 体育理論「運動やスポーツの多様性」

授業者 佐藤 光

生涯にわたって実践していくスポーツということを視点に理論から実技につなげることを考えて授業をした。今回の授業の大きなポイントは、インタビューVTR、もう一つは、話し合いによる言語活動である。VTRの資料は、北海道内のスポーツ選手、障害者、ボランティア活動をしている方、サポーター等にインタビューをしてまとめた。言語活動は構成的グループエンカウターの手法を活用した。ルールとして、人の話をしっかり



聞き、意見を否定しない、役割分担をして話を進める、必ず合意を得ながら進めるということを確認した。話し合いの中での順位付けは、順位が本来の目的ではなく、話し合いを進める手段として活用した。単元構成を5時間で扱い、1・2時間目はスポーツの必要性、「する」楽しさを知るということを行った。3時間目は見る・伝えるなどの方法や行い方の話し合いとし、どのような時に楽しみを味わえるのか語らう時間とした。今回の4時間目だが、「する」以外の「見る」、「調べる」、「支える」、「語る」という関わり方の中で、生涯を見据えどのような関わり方をしたいのか、自分の意見を仲間に伝える話し合いを進めた。「する」以外の関わり方を考えることで新たに「する楽しみが増えたよ」という生徒の声が今日の学習の評価であったと考えている。最終的に「生涯にわたって…」という言葉が生徒たちの口から出たことが一番良かったと考えている。本時の学習課題は、「生涯にわたってスポーツを楽しむためにその魅力を伝え合う」ということであり、仲間との話し合いの中で課題解決の方向に向かいたいと考えた。生徒がVTRを見て「生涯…」「いくつになっても…」という発見が出来れば良いと考え、あえて課題を提示せずに授業を進めた。

(2) 第2学年 球技「ソフトボール」

授業者 津村 昌彦

事前に授業を行った2年2組の生徒にソフトボール・野球経験をアンケート調査した。女子については、ほとんどの生徒がバットを持ったことがない、打ったことがないという状況で、男女合わせて野球経験者は、4人という中で授業を進めてきた。授業の第1のねらいとして、楽しくできるということをメインに構成を考え、「打つ」、「捕る」、「投げる」、「走る」の中でも、特に「打つ」ということに主眼を置いた。安全面やルールを



しっかりと教えながら、最終的にはスローピッチングで投げられた球を打てることまでできれば良いと考えた。当日の授業については、前時まで「打つ」ということに主眼を置いてきたので、今まで取り組んできた技能を生かして、ヒット性の当たりができることを技能目標とした。授業ではツーベースゲームという簡易ルールゲームを取り入れた。他学級での事前授業では打ったら打者は1塁に止まらず、2塁に行くという約束で行った。打球が内野、外野の処理で2塁に渡り、アウトになるケースがとて多くなってしまう、本来の課題であるボールを持たない時のカバー、バックアップなどの動きがなかなか出てこなかった。そのた

め、1 塁でもセーフというルールを付け加えて行うことにした。学習課題に「アウトを取るために必要な動きは？」とあるが、当日の授業では、生徒の意識がアウトを取ることにだけに向いてしまい、本来必要とされるベースカバー、バックアップなどの動きがあまり見られなかった点が反省である。

3 研究協議

(1) 第1 学年 体育理論「運動やスポーツの多様性」

次の授業で扱う「技術・戦術・表現の仕方」に非常に興味がある。そのポイントと今回の授業で一番伝えたかったことは何か

次時は、ドッジボールの作戦を立て、実際にやってみようということである。生涯スポーツに関わっていくことを考えた時、体育実技とのつながりが必要であると思う。技術・戦術・スポーツの仕方を学んで行くわけだが、体育実技の中でそれを実践し、作戦が成功した時に体育理論で学習したことをフィードバック出来るのではないかと考えている。今回の授業で伝えたかったことは、「する」こと以外の関わり方・魅力を知り、「じゃあ、ちょっとしてみようかな」となった生徒もいたことに表れている。この後、どうやってスポーツを行っていけば良いのかということにつなげたいと考えている。

- ・本時の次に「運動やスポーツの学び方」で行う、王様ドッチボールの意義は何か。
- ・スポーツや運動を「語る」ということに関しては、資料等に載っていないと思うが、「語る」を入れた理由は何か。
- ・スポーツを「する」ことに魅力を感じる生徒が一番多く、次は「見る」が来るということとは容易に予想がつくのではないか。

- ・1 年生なので技術面で他の球技では基礎・基本の定着からスタートしなければならないため難しいと考えた。ドッチボールであれば、小学校からのつながりもあり、男子でも女子でも出来る種目である。本校の実情を考えた時、体育理論から実技につなげて行くためにはドッチボールが一番適していると考えた。
- ・「語る」ということは資料等には載っていない。しかし、「話してみる」「人とのつながりの中で語らう」ということも魅力の一つであると考えた。
- ・スポーツへの関わり方に関して、「する」が一番であろうということは予想していた。当初、「する」以外で話し合うという授業をつくっていたが、体育理論で生涯スポーツにつなげる時、「する」ということは外せないと考えた。子どもたちは、話し合いの中で「する」を含めて、色々な検討をしながら順番を決めていった。順位は最終的な目的ではなく、あくまでも話し合いを活発にする手段である。

好きなスポーツを想定した時と嫌いなスポーツを想定した時では順位が変わってくるのではないか。競技名は限定して話し合いを行っているか。

競技、種目は限定していない。導入段階でブレインストーミングに近い形にして「スポーツといえば…」ということで競技名をどんどん言わせた。子どもたちの中には、自分がやっている競技を言う者がたくさんいた。VTRの中でバドミントンの選手に競技の楽しさは何かを答えてもらったが、試合の勝ち負けではなく、「自分がやろうとしたプレーがうまくいっ

たときに楽しさを感じる」と答えてくれた。競技に関わらず、スポーツの楽しさというものがあるのだということを教えてもらった。

中学校も高等学校も学習指導要領の中に「自分のライフスタイルに応じた」という文言が入っているが、60歳までスポーツをやるというのは高等学校の範疇に入ると感じた。どこまでが中学校の体育理論として押さえているのか。

授業づくりの中で50歳にしようか、60歳にしようか、70歳にしようか、80歳にしようか大変悩んだ。大人の感覚でいえば、「60歳になってもスポーツを続ける」という方も多い。しかし、生徒から見ると60歳は、「おじいちゃん」である。今回のVTRでは90歳まで続けたという場面があった。あれは、生徒たちへのインパクトとして使用した。生徒たちに「90歳まで続けられるかもね」という印象を与えられたと思う。高校との兼ね合いということを考えると難しいところもあるが、今担当している生徒の実態に合わせてやっていくべきと考えている。

(3) 第2学年 球技「ソフトボール」

- ・ベースカバーとかバックアップということを理解できるようにするという課題は生徒たちにとって難しかった。例えば2塁でアウトにするためにチームとしてどうしたら良いのかという課題が良かったのではないかな。
- ・1塁でアウトをもう少し工夫して、1塁でアウトをとった回数を点数から引くなどしても良かったと思った。

- ・球技全般にいえることだが、ボールを持たないときの動きが大切である。そこを子どもたちにうまく教えたくて、まず、送球や捕球よりもバッティングを中心にやり、ミスが出る中で、ボールを持たない時の動きの大切さを理解できれば良いと考え、今日の課題をつくった。
- ・前の時間のツーベースゲームでは1塁で止まらずに2塁まで必ず行かなければならないというルールで行った。そうすると、ある程度のミスをしてほとんどアウトになってしまい、課題が出てこないので実態に合わせ、1塁セーフで良いということにした。1塁でのアウトが増えた分、1塁でアウトを取ることに主眼が行ってしまい、課題の動きが出てきづらくなったことを反省している。例えば1塁でアウトにしたら1点与えるというようなルールを加えるというだけでも大分変わってきたのかとも思う。

- ・ウォーミングアップ時に男子と女子がペアを組んだり、女子同士が組んだりしていた。どのような組み合わせで女子のボールに慣れていない生徒への習熟を図ったか。
- ・グローブをつけることで、動きが悪くなったり、捕ることが難しくなってしまうと思うが、どのように工夫したか。グローブをどの段階から使用しているのか。

- ・チーム内では、主に男子が女子を教えるという関わりをもってやっていた。
- ・グローブの扱いだが、今回の授業については、どの種類のボールを使用するかということから始まった。Tボールで使うスポンジボールでやることも考えたが、グローブを使って、バシッと捕るということがソフトボールの大事な特性だと考え、少し重みがあり、安全面でも配慮されている学校体育用ソフトボールを使用した。大変有効な用具であると思う。今回は最初からグローブを使った。最初はグローブを開くことができない生徒も授業を進

めるうちに大分捕れるようになってきた。

4 支部研究発表について

(1) 発表の概要

【質疑応答型から討論型の研究会へ】

本支部の特徴として、研究協議をグループワーク方式で行っていることが挙げられる。グループワークとは、全員が発言し、他人の意見を否定しないで、建設的、発展的な考えを出し合いながら話を進めるという簡単なルールに従って、自由に発言し合う研究協議の進め方である。グループワーク方式で研究討議を行うことにより日々の授業実践から見てきた成果や理論について交流ができ、少しずつ組織の財産が増え、一人一人の教師の授業力アップにつながっている。



【研究主題／研究副主題】

南北に長く、独特のスポーツ文化を育んでいる10の市や町、小学校と中学校の教師が一体となっている組織、小学校と中学校が隣接しているケースが多い立地条件。これらを考慮し、研究部を中心として組織としてもまとまりをもちつつ、会員一人一人の独自性を生かすことを考え「地域に根ざし、小学校と中学校の連携を図る渡島の体育」という研究主題を設定した。そして、研究副主題を「進んで学び、自らを高める体育学習を通して」とした。

【小中連携】

本支部では、積み重ねられた研究が渡島の子どもたちのために、すべての学校すべてのクラスの授業実践に広がることを目指している。そのためには、小学校と中学校の教師が連携していく必要がある。私たちは小学校と中学校の連携を次の5つの観点でとらえた。「地域の実態に応じた連携」、「現場でできる連携」、「小学校における横の連携」、「各領域における小・中の連携」、「学習内容の連携」である。

【授業研究の成果】

表現運動（ボールルームダンスのカリキュラム化）と器械運動（技マップを利用したマット運動・跳び箱運動）で小・中連携研究を行っている。

研究の成果として、主体的な学びを引き出す手だてとして、①教材の工夫②単元計画の工夫③学習過程の工夫④直接的・間接的な指導の工夫⑤生徒指導の機能を取り入れる工夫⑥自己教育力を高める工夫⑦グループ学習の仕方の工夫。⑧指導と評価を一体化させる工夫の8つに分類することができた。これらの手だてが授業場面における児童生徒への働きかけとして有効に活用できることがわかった。

5 指導講評

(1) 研究について

- ・月寒中学校の取り組みが反映された体育理論の授業であった。
- ・渡島地区での小中合同授業について、全国各地で小中連携や中高連携が進んでいるが、色々課題もある中で技マップというものを使ったり、ボールルームダンスの授業を展開されているというのでたいへん参考になった。

(2) 第1学年 体育理論「運動やスポーツの多様性」

- ・実技場面での合意形成と体育理論での扱いは同じではない。実技では作戦を練る，戦略を立てる，ルールなどに関して合意形成するという目標がある。体育理論では色々な意見を出し合って，自分の思うことを伝えて，他の友達の意見を聞く，それを否定しないで受け止める，そういうことが大切である。
- ・高校との関連づけについて，中学校はこれまでの経験だけではなく，違う型，違う世界を知る。自分が関わっているスポーツをもっと良くできるようにする。体育の授業をもっと楽しめるためにどうしたら良いのかを考える等，自分が基準にあって，そこから世界を開いていくという視点である。高校は社会の中でスポーツや体育がどうとらえられているか。もっと広く国際的なオリンピックなどの国際大会を取り上げ，世界の中でのスポーツの位置付け，意義ということに目を向けていくということになる。
- ・VTRにあった「60歳になっても…」，あれはインパクトしてという捉え方で非常に結構だ。ただ，そこをあまり突っ込んでしまうと，高校の領域に入ってしまう。触れるのは構わないが，そこでグループ活動を展開するということはしない方が良い。
- ・中学校の体育理論を扱う場合には，高校ではどういう内容になっており，その中でどんな工夫ができるか，どんな展開が可能かということを考えていただきたい。逆に高校の場合は，高校生に上がってきた生徒たちが，中学校でどの程度のことを学んできているのかということも見て，内容をつくっていただきたい。

(3) 第2学年 球技「ソフトボール」

- ・ソフトボールの難しいところは，一つはポジションについて，得意な子とそうでない子のバランスをどう取りながら，みんながそれなりに楽しめるか。もう一つは運動量について，うまくいくと非常に盛り上がり楽しいゲームになるが，どうかするとずっと立っているだけだったり，ゲームになると途端に運動量が下がるということがある。
- ・学級経営という観点からしても，男女共習で体育の授業をしているクラスは，非常にうまくいっているという話もよく耳にする。

6 成果と課題

(1) 成果

- ・構成的グループエンカウンターの手法を利用することで，言語活動の中で活発な話し合いを成立させることができ，スポーツへの多様な関わりについて理解させることができた。
- ・生徒同士の教えあい，声の掛け合いがよくでき，学習課題を明確化して授業を進めることができた。

(2) 課題

- ・高等学校の指導内容をよく踏まえて，指導計画・学習内容の工夫に取り組んでいかなければならない。
- ・特にルールや動きが複雑なベースボール型競技においては，課題を明確にし，それを達成させるために弛まずルールや授業形態の工夫に取り組んでいく必要性を感じた。

研究主題

仲間とともに学び合う保健体育学習

～「学ぶ喜び」のある授業実践を求めて～

札幌市立向陵中学校

1 研究発表の概要

発表者：札幌市立向陵中学校 教諭 大川 潤

(1) 研究主題

①設定の理由

ア 本校の研究経過から

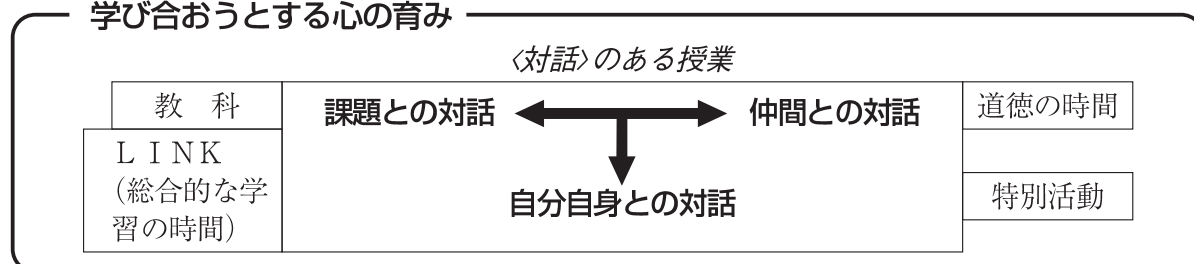
本校では昭和47年度以来、研究主題を継続し、副主題を設定することにより、主題に迫るより具体的な研究内容を明確にした。ここ4年間の研究副主題は・第10期（平成21年度～平成24年度）『学ぶ喜び』のある授業実践を求めて』以上の研究経過から、本校の保健体育科研究主題を「仲間とともに学び合う保健体育学習」と設定した。

【本校の研究全体像】

研究主題	「学ぶ側に立つ」教育の実践
保健体育科研究主題	「仲間とともに学び合う保健体育学習」
保健体育科研究副主題	「学ぶ喜び」のある授業実践を求めて

研究実践仮説 〈対話〉のある授業を実践することにより、生徒は「学び合おうとする心」を育み、「学ぶ喜び」を感じ取るようになっていく。

学び合おうとする心の育み



イ 児童生徒の実態

学習意欲が高く、校内外での生活も安定している。運動能力は高い集団とはいえないが、積極的に授業に取り組んでいる。グループ毎に活動することに慣れており、声かけを積極的に行うことができる。話合いにおいては、運動の苦手な生徒も積極的に意見を交流している。

② 目指す生徒像

保健体育科では、「自ら学ぶ意欲をもち、他者から良さを感じ取る心をもち、自らの健やかな体を鍛えることはもちろん、何事にも粘り強く取り組む生徒」を目指す生徒像と設定した。

(2) 研究の仮説

〈対話〉のある授業を実践することにより、仲間とともに学び合うことができる。

仲間とともに学び合おうとする心を「課題と〈対話〉し、仲間や教師と〈対話〉し、自分自身と

〈対話〉する学びを授業の中心に据える」ことによって「学び合おうとする心」を育もうと考えた。

①課題との対話〈自己決定〉 ～ 〈対話①〉

②仲間（自分以外）との対話〈相互交流〉 ～ 〈対話②〉

③自分自身との対話〈振り返り〉 ～ 〈対話③〉

(3) 研究の視点

〈視点1〉 「仲間とともに学び合える教材の開発・工夫（課題との対話）」

・課題の明確化 ・課題解決のための資料の工夫（学習カード，教師の声かけ）

〈視点2〉 「仲間とともに学び合える学習過程の構築（仲間，自分自身との対話）」

・学習課題の共有の場の設定 ・コミュニケーションの場の設定

・課題解決のための学習場面の設定 ・評価の場の設定

図1 学習カード(守備の連携を高める)

①研究の具体

○ 実践例Ⅰ 第3学年 単元名 球技「ソフトボール」

【視点1】「仲間とともに学び合える教材の開発・工夫」

○学習課題を明確にし，だれもが達成感を味わえるようにする。

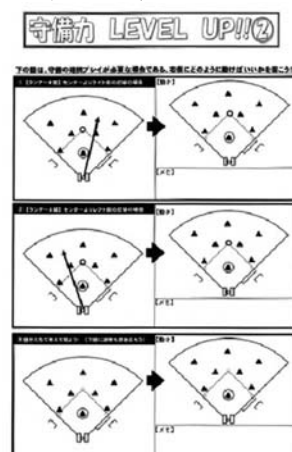
○学習カードの工夫，発問の工夫をする。

【視点2】「仲間とともに学び合える学習過程の構築」

○運動が苦手でも参加できる話合いの場を設定する。

○頻出する場面の提示による学習課題の共有化と課題解決の場面を設定する。

○評価の場を設定する。



②授業の実践

他グループの練習を見て，討論する場面を設定したため，チーム内で得意な生徒が中心となって不得意な生徒に対し，アドバイスを送るなどの対話が生まれた。また，よりよい守備を目指していこうとする姿勢を意識させ，生徒に質問を投げかけて，考えさせる場面を設定することにより，運動を不得意とする生徒からも効率の良い動きのアドバイスやアイデアが生まれた。ソフトボールの守備隊形のワークシートを作成し，生徒がその場で書き込めるように工夫したことで，基本的な動きのほかによりよい動きがあるかなど，グループ内でお互いにワークシートを見合い対話が生まれた。

(4) まとめ

生徒の学習意欲を引き出させるワークシートの活用やグループ学習の中で〈対話〉を重視した授業展開により，①自分の工夫した点や変化を考えさせ，気付かせる。(自分自身との対話) ②その運動の特性を理解し，基本動作の習得や技能の向上を目指す。(課題との対話) ③自分では気付くことができない動作やプレーが仲間との協力やアドバイスにより，良い動作，良いプレーへとつながる。(仲間との対話)ことが実践された。今後，適切な評価を行う場面の設定，より生徒の意欲が高まる教材開発，ワークシート等の充実を図ることが必要と考える。

2 公開授業について

(1) 第1学年 領域名 器械運動「単元名 とび箱運動」

授業者 札幌市立向陵中学校 片山 慎司

この授業では，準備運動から生徒が積極的に活動している姿が印象的だった。ランニングを終えた後，グループ毎（6グループ）に分かれて，柔軟体操(ストレッチなど)，補強運動(ブリッジ，うさぎとび，)を行った。スモールステッ



プで課題を与え、技の系統性を考えた取り組みが行われた。

まず、開脚とびの練習では、单元の中で強調されていた『着地』をしっかりと決めることにポイントがあった。グループ毎に自分たちの必要な補助具(とび箱に付ける手を着く位置のラインになるひもと着地の目印になるテープなど)を準備し、できたところからとび箱に乗って台から跳んで着地する練習が始まった。その練習が終わったら開脚とびの練習に入った。開脚とびは、着地を丁寧にしっかりとする意識が高く、6人がタイミング合わせてとび、着地するという工夫もあって感心させられた。台上前転の練習でも、安全への配慮として補助者を2名付けることが徹底されており、自分たちで用意した回転系用補助具(授業では「帯」と呼ばれていた。2本の帯を輪を作るように結び、試技者の腰に巻き、両端を補助者が持つもの)を使う子や台の横で補助する子など、自分たちの課題に応じた補助がなされていた。試技者が安心して取り組めるためか、台上前転は、ほとんど全員ができるようになっていた。

前時の振り返りとして、台上前転を2回取り組んだ後、本時のメインの題材である「台上前転」～「首はねとび」「頭はねとび」に発展していくところでは、教師からポイントや取り組み方の指導があった。そして各グループが学習カードを使って話し合い、自分たちの課題に合った練習方法や補助具を選び練習に入るといふ、課題解決に向けて「対話」と「主体性」を持たせた取り組み方が印象的であった。首はねとびに移る場面でも、どんどん練習する姿が見られ、積極的な取り組みが素晴らしかった。ただ、着手の場所が手前になり、腰を打ちそうな場面が多かったので、一度全体の練習を止め、中央に集めて良くできているグループを例示として、ポイントを確認したのは、教師の見取りがなされていてとても良かった。その後、着手位置の改善が見られた。次に、頭はねとびに移る場面では、その後の研究協議の中でも話題になったが、上手すぎない教師の師範があり、子どもたちにとても良い見本が見せられていた。そのためか、子どもたちの取り組みも積極的で、スモールステップで補助具付きの練習から、すぐに補助具なしで練習に入るグループもあり、活気あふれる練習になっていた。補助者が、試技者が回転して腰が前に出た時に「はい」と声をかける。そのときにはねることを確認していたので、試技者は試技に入る時に手を上げ「首はねとび」か「頭はねとび」かを申告し、補助者が準備できるように工夫していた。



最後にまとめとして、全体が集まり自分たちの取り組みの成果発表する場面では、3名が首はねとびや頭はねとびに組み、本時の練習の成果を発表した。この単元で授業者がねらいとしていた、スモールステップで課題を与え、自分たちで課題克服の練習方法を選び、取り組むことで意欲的な活動が導き出されることが見られた良い授業であった。

(2) 第1学年 領域名 体づくり運動「单元名 巧みな動きを高めるための運動」

授業者 札幌市立稲陵中学校 市川 みお



この授業では、体づくり運動の「巧みな動きを高めるための運動」に取り組んだ。身近な用具を使用して、音楽を効果的に使い、リズムカルに動くことを意識した活動となった。1年生という段階を踏まえ、動きを考えるのではなく、自分たちの体力の状態に合った運動を選択することを目標とした活動であった。

まず、授業の前に、心と体のチェック表を使って自分の状態を書きこんでいた。その後、準備運動として、音楽に乗ってペアのシグナルランニングがあった。これは、2人が前後なり走りながら、5種類の合図となるポーズから先頭の子が選んだものをする。その合図によって、5種類の運動を後ろの子とペアの子がするもので、楽しそうに体育館を広く使い、走っ

て動いていた。続いてゆったりとした音楽に変わり、ペアストレッチに移る。伸ばすところを意識しながら、中央や壁にあるストレッチの図を見ながらそれぞれでゆっくりやっていた。音楽が終わると中央に集合し、前時までの確認と今日取り組む課題について確認を行った。前時までは、タイミング合わせてボールを使った運動をすることに取り組んできたが、本時は、さらに音楽に合わせてボールを使った運動を『ボール&ミュージック』というテーマで行うことを知らせた。難しい動きをするのではなく、音楽に合わせて行うことが大切で、リズムが速いと感じたときは、2拍で1つの動きをすとか動きを簡単にするなどの工夫をすることが大切だと強調されていた。



その後15分間、グループごとに動きやリズムを書き込むシートを持ち、各グループの場所に移動して、話し合いと動きの確認を行った。ボールを用意し、練習に入るグループが出始めた。使用する音楽はレディーガガの「Bone This Way」の1部分がBGMとして流され、その中で、床にボールをぶつけ、ボールがはねている間に人が入れ替わるとか、ドリブルをしてすれ違う、バウンドさせてパスし合うとか自分たちで「1, 2, 3, 4…」とカウントをしながら様々な動きを試行錯誤していた。子どもたちは積極的に男女で話し合ったり、声を合わせたりしながら、見ていて面白い動きなどを見せていた。あつという間の15分間が終わり、全体にタイミング合わせてやってみるように指示し、全部の班が曲に合わせて動いてみた。まだ動きが合わないグループが多かったので、教師から本時のねらいは、難しい動きをすることが目的ではなく、自分たちで音楽に合わせてできるように工夫することが大切なのだとアドバイスをし、1分間最後の調整を指示。その後、再度考え直すグループ、動きの習熟を目指すグループなど自分たちで課題解決に向けて取り組む姿が見られた。発表会では、ボールの種類や隊形を代表者が発表し、工夫の成果を発表した。うまくいくグループや失敗しているところもあったが、それぞれの工夫が感じられる発表となった。最後に本時のまとめを学習カードに記入し、2名が発表した。それぞれのグループの工夫について、感じたことがまとめられている、よい発表であった。

3 研究協議

(1) 研究について

質疑特になし

(2) 第1学年 領域名 器械運動「单元名 とび箱運動」

○感想や意見として

「生徒が集合や活動する場面でしっかり動いていた。脱いだジャージをたたむこと、脱いだ靴の置き方など生徒指導がしっかりとされていると感心した。生徒の運動能力は決して高い方ではないが、やる側の意欲と先生の指導力で、開脚とびだけでなく、はねとびをあそこまでできるようになっていたのはすごいと感じた。きめ細かく丁寧に指導されている結果ではないか。仲間とともに学び合う授業・学習をするためには、学び合う集団をつくるということだが、失敗しても恥ずかしくないとか、発言しても恥ずかしくないという集団作りができていた。掲示物について、子どもたちの書き込みがそのまま張られている斬新なもので、他のクラスの様子などがわかり、とてもよいと思った。次の実践で使いたいと思う。」などであった。

○質問として

「◎とび箱の配置の意図について。◎『首はねとび』から『頭はねとび』への移行時に『着手』と『踏み切り』から足のはねあげのタイミング』『着地』がどのようになれば良いのか。◎『開脚とび』と『台上前転』から『頭はねとび』という单元全体の構成になっているが、单元全体の評価につい

て、テストの項目とポイントを教えていただきたい。◎本時の目標として、課題に応じた練習方法を選ぶということが挙げられているが、話し合いの中で、なぜその練習方法を子どもたちが選んだのかを教師はどのように見取ったのか。◎運動能力は高い子たちが、いろいろなことにチャレンジしていた。日ごろから、どのようなことをしていたのか。」などであった

○授業者からの回答として

「◎とび箱の配置は、いくつかのデメリットはあったが、この体育館で子どもたちの補助者をしっかりつけることを考え、さらに授業参観者の場所を確保するという観点から、あの配置にすることを選んだ。◎首はね、頭はねの『着手の位置』は、真ん中よりやや前方がよいし、マークがあった位置に指がかかるくらいの位置に首の根元が来るように前転ができるといいと伝えてあった。『はねのタイミング』も首や肩が着いたタイミングではねるといいということも指導した。『着地』は、開脚とびから継続して指導してきている安定した着地が目指す姿と考えている。◎技能の評価は、開脚とび、台上前転を授業の中で生徒の活動を3段階で評価している。さらに開脚とび、台上前転、首はねとび、頭はねとびは次時の中、もしくは最後の発表会の様子を見て本人の完成形を3段階で評価することで、それらを合計して評価とする。◎生徒たちは、これまで強調してきた安全面ということや無理に一気に発展させてはいけなく指導してきたので、そこを考えてより自分たちがステップアップするための階段として方法を選んでいて、よく考えられたものだと思う。◎集団作りのポイントについてですが、本校は、各教科の中でグループの交流する場面を作っているのを助けられていると思っている。このグループは、出席番号順なのだが、前回のバスケットボールもこのグループで練習を行い、うまい子ができない子に教えるなどのことが自然とできていたので、私が行っているというより、生徒自身の力かなと思っている。中には、意地悪な子もいるので、そういった子を早く見つけアドバイスをするということはしたいと常に思っている。」などであった

(3) 第1学年 領域名 体づくり運動「単元名 巧みな動きを高めるための運動」

○感想や意見として

「教師が、子どもたちが決めたターンの仕方を『こちらから回るのがうまく流れるよ』などとしっかりと聞き逃さずに声をかけていたり、最初の音楽のところから楽しみながら生徒が動いているところが印象的だった。反省でスローテンポの方がよかったとの意見もあったが、4つのタイミングで2つの動きを入れるとか、8つのタイミングで2つの動きを入れるというところが、『自分と仲間の体力の状態にあったボールを使った運動の行い方を選ぶ』というところにつながるのだと思う。教師は、その点について声をかけていたが、生徒たちが実践するところまで行っていなかったもので、もう少し工夫できれば改善されたのではないかな。練習の場面で女子2名ができて喜んでいいる場面が見られたが、本番の中でそれが見られたら次につながると思うので、もっと良かった。北海道大会のいろいろな場面で感動した。今回の若い2名の先生が学習指導要領にのっとった授業を展開していることに感銘を受け、わが市に戻って再度取り組まなければいけないと思った。あのように子どもたちのアップの姿から、楽しんで、いろいろな動きを取り入れたものを見たことがなかったので、とても感激した。見学者が授業者と生徒の間に入り込むような形で邪魔になったのではないかな。もっと空間があれば、生徒がもっと広く動きを自由にできたのではないかな。本番は成功していたが、練習では周りの人が邪魔でできていなかったことがあった。そういった意味では、のびのびとした発想ができなかったのではないかなと感じられた。子どもたちがいつもと違う場所で、たくさんの先生方に囲まれた中で授業をして、大変だったと思うが、楽しそうに時折笑顔も見せながらやっていたということは、本当に楽しかったのではないかな。」などであった

○質問として

「◎堺市では、男女共修は少し仲良くなった3年生だけが行っている。1年生では、中学生になった気負いからか、小学生の時のように男女でこのような体づくり運動ができない。先ほど1年生ならではと言っていたが、その辺の取り組みについてお聞きしたい。◎音楽を使ってということだった。最終的にこの目標のところを見ていくと、運動の行い方を選ぶことができるようにするというところなのだが、今日1時間の中で発表会に向けて完成させるために動いていくのか、それとも、その前の段階で、みんなでこんな動きができたぞというところで終わりにするのか、そこの部分がどちらだったのか。◎体づくり運動として、みんなで体を使って汗をかいて動いて楽しかったねという点からいうと運動量はどうだったのか。◎音楽を速いテンポで流していたが、15分間の練習の時に8カウントを子どもたちは数えながらやっていたが、実際に音楽が流れたら速くて、さっきやっていたのとちょっと違ったというのがあったので、もう少し続けて流していたら子どもたちの動きの完成度も違ったのではないかなと思うが、どのように考えるか。」などであった

○授業者より回答

「◎本校には2つの小学校から1年生に入ってくるので、その時に初めて顔を合わせて体育の授業をすることになる。みんなが楽しく、クラスにも早くなじむように、一緒にワイワイ動けるようになったらいいなという意味で、男女共修で行っている。今日の班分けは、学級での生活班で行っている。1年生は男女仲良く、楽しく活動できているのは、学年経営をしている1学年の先生方の力によるものである。男女共修については、3年生は種目選択をしているので男女共修なのだが、現在は混在している状態である。1年生も体づくり運動は男女共修でやっているが、そのほかは別修で行っている。冬のスキーは共修なので、種目によって共修と別修を行っている状態である。◎スペースについては、少し狭くならかわいそうだったと感じている。私の方で、先生方にどけてくださいと言ったが、言えなかった。普段はもう少し広いスペースでボールをあっちにやったりこっちにやったりしていたので、それくらいのスペースを確保してやれば良かったができなかったことを授業の後反省した。◎行い方を選ぶという目標に対して、発表会に向けて選んだものをできればいいのではないかなという意見もあったが、それでは技能になってしまう。技能ができることが単元の目標ではないので、自分たちの選んだ運動がカウントに合わせてできないのだとしたら、自分たちが1・2・3・4のリズムの中で4つやっていたものを1・2で1つやる3・4で1つやるということを工夫していくことを求めた。しかし、なかなか子どもたちはそこまで行き着かなかったの、伝えきれなかったのかなと思っている。◎この1時間の中で、どれだけ自分たちの班がリズムに合わせて動けるようになるように工夫したのかを、確認し評価する場面として発表会をした。本当であれば、この時間は練習としてもっと時間を取り、次の時間に発表するということであればよかったのかもしれないが、単元計画もあったので、このような授業になった。運動量については、発表会との兼ね合わせがあった。発表会をしなければ、1時間の中で全員を評価するということできなかったの、やはりどこかで見取る時間の確保を考えるとこのようにせざるを得ない。」

4 支部研究発表について……小学校、中学校の分科会のみ

(1) 発表の概要

発表者 北海道学校体育研究連盟 留萌支部 天塩町立天塩中学校 伊藤 大輔 教諭

研究主題 『子どもたちの「今」をたがやし「未来」の力をはぐくむ留萌の体育』

～わかって できて おもしろい！ 「楽しい体育」をつなぎ つみかさねて～

① 留萌支部の研究について

○研究主題設定の理由

ア 支部の研究経過から

平成17年度開催の北海道学校体育研究大会留萌大会を“源点”として、研究推進と授業づくりにおいては【もっと ずっと】をキーワードに、『子どものエネルギーを引き出し、体と心を育てる留萌の体育』を主題に掲げ、研究を進めてきた。

イ 児童生徒の実態から

「運動から遠ざかり、存分に、体を動かすことが少ない子どもたち」「体育の指導や体育的活動は行っている、なかなか高まらない子どもの体力」「基本的な運動技能や運動感覚、バランスのよい動きが身に付かない子ども」など

○目指す児童生徒の姿

●頭と心と体をフルに使って運動に取り組み、楽しんで活動できる子ども

●認め、励ます「肯定的」で「前向き」な声を出して活動する子ども

○目指す授業の姿

☆「楽しい」状況をふくらませることによって指導内容がしっかりと身に付く授業☆

●明確なねらいと挑みとなる教材・活動が設定されている授業

●子どもたちが目一杯運動と向き合い、運動に浸る中で、身体能力が高まる授業

●運動の楽しさや運動することのおもしろさが味わえ、やりがいを感じる授業

●「高める・伸ばす・できる・味わわせる」ための手だてと指導がある授業

○研究の仮説

指導の目標を明確にし、子どもの視点から教材や単元構成、学習活動を工夫するとともに、指導方法や手だてなど目標到達への道筋を吟味して準備することにより、子どもにとって「やりがい」がある体育の授業をつくることができる。このような授業を積み重ねから子どもが「分かって…できて…身体能力が高まり、楽しく」運動に取り組めるようになり、運動やスポーツとのよい関係を築き、豊かなスポーツライフを実践する力を身に付けることができると考える。

○研究の視点

〈視点1 学びへ向かわせる枠組み〉	…教材開発
-------------------	-------

◇子どもの実態や学級における特性の的確な把握～身体能力状況や学び方の育ち等

◇身に付けさせたい技能、高めたい力の明確化～運動技術、感覚能力の焦点化

◇教材化の工夫と魅力ある単元づくり～運動素材の発掘、既存運動の工夫と加工

◇動きづくりと習熟を図る活動の設定～変化のある繰り返しやCOTの活用

◇9年間の「つながり」を意識した授業の設計～「つなぐカリキュラム」の作成

〈視点2 学びを進める場と道すじ〉	…場の設定と学びの過程
-------------------	-------------

◇運動との出会いにおける演出～インパクトある出会い・やりたい感をわきたたせる工夫

◇学習活動、学習形態、学習集団の工夫～諸要素をブレンドさせた学びの工夫

◇アタマ・ココロ・カラダを働かせる学習過程～課題解決に取り組む流れの設定

◇自らの運動を捉え、修正する活動の位置付け～自己評価の場や方法の工夫

◇運動の場や活動方法の工夫～「次なる一手」の準備

〈視点3 学びを深める手だて〉	…授業技能向上と評価
-----------------	------------

◇学びや運動状況の予測と手だての準備～活動状況の見通しと指導方策の練り込み

◇教師の関わりと多様な指導技術～指示、助言、提示、賞賛、誘導、対話、指摘…等

◇運動との関わり方、運動の学び方の育成～運動実践モデルの例示等

- ◇自力解決, 学び合い解決を促す指導方法～発見, 気づき, ひらめきの引き出し
- ◇指導場面, 指導タイミング, 指導内容, 指導方法～教師の指導力向上
 - 子どものあり様を捉える評価～子どもの活動に対する着眼点の設定
 - 自己の運動状況を捉える評価活動の工夫～他者視点や機器の活用等
 - 次の授業や活動につなげる評価の工夫～目標に基づく改善ポイントの明確化

② 研究の具体

○実践例Ⅰ 第1学年 単元名「連続技に挑戦! (マット運動～器械運動)」

天塩町立天塩中学校 教諭 伊藤 大輔

今回の実践は, 「自己の運動状況を捉える自己評価」と「アタマ・ココロ・カラダを働かせる学習過程」に視点を置いて授業を行った。

○実践例Ⅱ 第1学年 単元名「新しい技に挑戦しよう! (マット運動～器械運動)」

遠別町立遠別中学校 教諭 坂田 一幸

授業の導入段階においてCOT (コーディネーショントレーニング) を取り入れたことにより, 楽しみながら体をほぐすことができると同時に心の交流も図ることができ, 楽しい気持ちと肯定的な雰囲気をもって授業に臨むことができていた。

③ 今後の取り組みの展望 (今後の重点)

○9年間 (小1～中3) の「つなぐカリキュラム」の活用

○動きづくりと習熟を図る活動の設定

(2) 質疑応答

特になし

5 指導講評

(1) 研究について

特になし

(2) 第1学年 領域名 器械運動「単元名 とび箱運動」

「感想にもあったように良い授業であった。運動の系統的な発展性, 技の構造だとかをよく理解して, スモールステップで安全に, 補助の仕方を習慣化するまでよく指導していた。この授業の特徴は, 着地と安全を重視したということだ。開脚とびから台上前転, 首はねとびをやったが, あまり理屈に入らず, 子どもたちのできそうな気がするまで, いろんな運動を試させたというのが素晴らしかった。課題を与えてさあこれをやりなさいというのではなく, 子どもたちが運動を選び経験していく中でできそうな技を感覚の中で身につけていく機会を持った。何よりも感激したのは, 留萌の研究発表でも『先生ってすごいね』というところを見せなければならないということだったが, 最後の切り札として, やった見本のもって行き方, あんまり上手にやりすぎてしまうと, かえってあんなの僕らには出来そうもないという風になるところを, 僕たちもちょっとがんばればできそうだと思わせる師範力のすごさもあったかなと思う。たくさん経験させて身体値を高めていたことが, 思考・判断に生きてきていたということだったと思う。補助の仕方も, 経験として教えていけばいいのかなと思う。質問にもあったが, はねとびの足の位置, 手を着いたときに腰の位置とどうなるのかというところでは, 局面だけで解決できるものではなく, 踏み切って手を着くまでの一連の動作がどうなのかといったところがポイントである。滑らかにというのがテーマなので, 助走のリズムでトン, トン・ワン・ツウ・ジャンプ, 手を着く, そして切り返すのか回転していくのかという全体のリズムをもう少し強調していくともう少し滑らかになっていくのかなと思う。踏み切りしたときに膝を曲げて踏み切るのではなく, 突っ張って踏み切るというのを少しやりながら取り組めば, もう少し技の違いが出てくるのではと思う。ただ, 授業としては, よく練ってそして皆さんに感動を与えた授業だったと思う。」

(3) 第1学年 領域名 体づくり運動「単元名 巧みな動きを高めるための運動」

「体ほぐしのところは、活動はあったが学びがなかった。導入のシグナルペアランは、もともとは動きを持続する能力を高めるために考えられたもので、体ほぐしではない。しかし、ペアの体ほぐしから体力を高める運動にうまくつなげていこうと挑戦しようとする意図は非常に見られたので、体ほぐしのねらいと内容とその次の体力を高める運動のつなぎだとかを工夫し、違いを出していけばよかったと考える。『巧みな動き』と『体の柔らかさ』を1,2年でやるということ、『運動の行い方』を効率よく組み合わせることや『力強い動き』と『動きを持続する能力を高める運動』を効率よく、バランスよく組み合わせることを考えると、基本的には第1学年だから、体の柔らかさでの効率の良い組み合わせなど小学校5,6年で習ってきたことを振り返りながらやった方がよかった。1学年でそれぞれの4つの動き方、動きのねらいをそこで1回復習していく中で、子どもとの対話をしていけば、音楽を選ぶにしても、カウントを取るにしてもうまくいくのではないか。参観者が邪魔になっていた。子どもが出発点であることを考えると『邪魔なのでよけてください』と言えなくてはいけない。体づくり運動の体力を高める運動は、自分のねらいに応じてどれだけ工夫してその運動をやったのかといったことが大切で、グループのパフォーマンスを見ていくとダンスとどこが違うのということになる。こんな工夫するとボールを使った運動がいろいろできて、組み合わせられて楽しいのだといったところから、どう評価に結び付けていくかといった点を今後の課題にしてほしい。学習カードの取り上げ方も日ごろから書かせることが大切。どのように書かせたら、こちらを読むのが楽で相手も意見が言いやすいのか。次の授業の課題が浮き上がるような工夫がこれから必要なのではないか。今回15秒間の音楽なので、8カウントで4回やると32カウントになり、20秒くらいやるとテンポが100くらいになる。場合によってはテンポの違うテープをそれぞれの場に用意して、CDプレーヤー5・6台を設置し、空間をしつかり作ってあげることが必要だ。体づくり運動の授業でやったことを部活動や日常の中で、ボールを使ってやってみようと思った時に生きようとするためには、空間・仲間・時間というのだが、空間を自分たちで作っていくのだといったところをもう少し強調していくと、実生活につながっていく授業づくりのヒントになるのかなと思う。ボールがバレーボールだけになっていた。バスケットボールの方がもっと活動しやすかった場面もあったと感じている。」

6 成果と課題

(1) 成果

〈対話〉のある授業を実践することにより、仲間とともに学び合うことができる。運動を苦手とする子どもたちからも「体育が好きになった」「意外とおもしろかった」などという感想が増えてきており、取り組んできた実践の成果が徐々に現れてきたものと受け止めている。また、市町村における実践交流の積み重ねや、管内小中学校教員を対象とした「体育実技指導交流会」を行うことで、指導者としての技能の向上や教え方のポイント・技のコツ、授業における“ネタ”などをお互いに交流することができ、微力ながらも管内における体育授業の改善に貢献できたものと考えている。

(2) 課題

つまづいている生徒への手だてを工夫する必要がある、今後の課題となる。グループのメンバー構成によっては、コミュニケーションが積極的に行えない場合もあるので、生徒まかせにするのではなく、教師の声かけやグループのメンバー構成を工夫する必要がある。自己評価が適切に行えない場合には、意欲低下にもつながる可能性もある。教師からの適切な評価を行う場面の設定や生徒の評価する目を養うことが必要となる。

分科会研究発表・研究協議等記録

高等学校

第9分科会

北海道恵庭南高等学校

第10分科会

北海道北広島高等学校



漁川ダム えにわ湖(恵庭市)



クラーク博士記念碑(北広島市)

研究主題

「運動好きな生徒を育て

豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習」

～仲間と共に心と体をはぐくむ「体づくり運動」と「剣道」の実践～

北海道恵庭南高等学校

1 研究発表の概要

発表者：北海道恵庭南高等学校 教諭 加藤 忠

(1) 研究主題設定の理由

本校では、普通科生徒の運動部活動加入率が低く、体育の授業以外で運動やスポーツをする機会が少ない。そのため、普通科生徒に対して、運動やスポーツの動機付けを図り、身体を動かすこと、汗をかくこと、スポーツをすることの心地よさを体感させたいという観点で主題を設定した。

(2) 研究の仮説

自分自身の体力を知ることが、運動スポーツへの関心・意欲を高め、日常的に運動する生活習慣が身につくのではないかと仮説を立てた。具体的には、身体の変化が分かりやすい心拍数に着目しデータ収集を始めた。

研究のデータとして、運動前と運動後の心拍数や運動後の心拍数の回復から体力が向上していることについて検証し、そのデータを生徒へ還元することで、運動による身体の変化を知り、運動への関心・意欲を持ち、運動するきっかけ作りになっていると推測した。



(3) 研究の視点

〈視点1〉グループ学習などの授業形態の工夫

「体づくり運動」では、仲間づくりやコミュニケーション能力育成のため、グループ学習を中心に授業を行い、生徒の主体的な活動を促すため、教材として音楽の活用や様々な教材の工夫に重点を置いた。

また、運動の途中に心拍数を測定して、自分の身体の状態を確かめさせ、心と体の一体化を図った。



〈視点2〉武道における導入の工夫

「剣道」では、導入段階で剣道に対するマイナスのイメージを取り除く工夫をし、遊び感覚の楽しさを多く取り入れ授業を進めた。また、グループ学習を取り入れ、生徒同士のコミュニケーションを図りながら課題解決に取り組み、剣道の特性を理解させることに重点を置いた。



2 公開授業について

(1) 第1学年 体づくり運動

授業者 工藤 直人



授業では、グループ学習を中心に実施した。導入段階のウォームアップまでは、かなり緊張していたようだが、班長がみんなを上手にまとめ本時のねらいに沿って活動していた。しかし、活動内容によっては、つい自分たちの運動に夢中になり安全面での配慮が足りない生徒も見られた。3年間の単元計画を進めるにあたり、安静時の心拍数・運動直後の心拍数を測定することで、体の状態を理解させることと、仲間の体の状態を知ることが重要になる。はじめは心拍数を測定できない生徒も数名いたが、助言と回数を重ねる中で解決に向かった。もう少し努力を促す必要があると判断した生徒への声かけ・助言もスムーズにでき、学習活動全体がグループ毎に音楽を使用したことで、更に緊張感がほぐれ、普段の活動以上に仲間と共に心と体をはぐくませることができた。



(2) 第2学年 武道「剣道」

授業者 栄花 英幸



授業では、生徒主導型のグループ学習を行った。生徒たちは緊張していたが、元気な声が出ていて楽しく活動していた。体育科生徒のクラスなので、行動は敏速で積極的な学習活動となった。グループのリーダーには、剣道部所属の生徒に当たったので、班員への指示は的確に伝わっていたと思う。剣道授業として特に気をつけてきた点は、イメージチェンジである。このことの導入なしでは、楽しい剣道授業は考えられなかった。そこで取り入れたのが、類似した運動である。例えば、すり足（足捌き）を習得させるために、スポンジを使った遊びを行う。生徒たちには、それがすり足練習とは一切伝えずに活動させた。あとで改めてすり足の練習に入ると、遊びでやったことを思い出すことになる。このようにその種目に関係の

ない用具などを使ったりすることで、苦手意識を克服することができるようになる。それがすべての場面で通用するかどうかは分からないが、剣道という種目が苦手だと思っている生徒に、自分の得意種目の練習方法をさせて、それが剣道の技術習得に結びついているとしたら、きっと剣道授業に入りやすくなってくるもの考える。



3 研究協議

(1) 研究について

運動好きの生徒を育てるため、体育の授業では毎時間ウォーミングアップとしてランニングを取り入れ、定期的に生徒に心拍数を測定させることで、自己の体力が向上していることを気付かせ、運動やスポーツへの動機付けを図ってきた。

普通科1年生の10月に測定した心拍数は、4月に測定した心拍数に比べ、ウォーミングアップ後では男子では平均して13拍、女子では平均して8拍減少し、一般的に発汗現象の現れる120拍/分に近づいた。また、12月の測定では、ウォーミングアップ終了2分後の心拍数は男女ともウォーミングアップ前の心拍数の約8割までに回復していた。このことは、心肺機能の上昇があり、体力が向上したことを示している。

来年4月に新体力テストを実施し、生徒一人一人が自己の体力を数値で確認することにより、体力向上を実感として感じることができ、運動への動機付けが図られるものと期待する。

ア 公開授業1『体づくり運動』

質問①生徒の運動資料・運動カードを事前に配布と研究資料に書かれていましたが、これはどこかに出ていた資料・教材なのか、先生が独自で作成されたものなのか。また、曲を流してやっているが、曲を流すことでどんな効果を期待しているのか。

回答：まず、大修館・一橋・キンダーコンデショニングトレーニング・体づくり運動(小・中学校で扱っているもの)を参考にまとめて作成している。次に音楽については、生徒が来る前に曲をかけてどんな気持ちになるのか、曲と自分の気持ちや曲を聞くことで自分の心にどんな変化があるのか、生徒にはもっと楽しくやるためには何がいいか、などと自分に問いかけることができる。また、生徒には曲をかけることで楽しくなり、堅いイメージを取り除く効果がある。

質問②3班は「だるまさんが転んだ」や「花いちもんめ」などをやっていたが、取り組み方が大切だと思うが、自分たちで工夫してやっているのか。

回答：意識はしていない。7つの種目から4種目以上選び選択していく。今回に関しては、自分のことも知りながら、みんなの事も考えて全員でもっと運動を楽しもう、体力を高めようという考えで進めている。ノートには『こんな入り方も良いね』と書いてやることもある。また、激しく入って行くこともあると思う。体ほぐしについては、入り方にこだわっていない。

質問③世代別体づくり運動コースについて、高校1年生から2年・3年と続いていく見通し・問題点をお聞かせ下さい。

回答：今回が始まり。これから私たち体育教員が本気で取り組み、2年・3年と指導していく。地域貢献型をこれからPDCA(計画・実行・評価・改善)を実施する中で、

進展させていきたい。

イ 公開授業 2 『剣道』

質問①剣道（授業・練習）に関する類似運動の事例をいくつか教えて下さい。

回答：例として、バレーボール・サッカーボールを使用しスローイングをさせると、振り上げ（＝振り下ろし）の足の引きつけにつながる（剣道の素振りに大切）また、新聞紙でボールを作る。竹刀でボールを切る。最後は縦に切る。いろんな動きを使って剣道に導いていく。

感想：武道を好きになる。武道のイメージ（くさい・痛い・寒い・熱い・嫌い）を払拭するためには、運動を好きにさせ、武道を好きにさせることの授業の工夫が必要です。今日の剣道授業は非常に勇気のある授業で大変良かった。また、体づくり運動に関しては1年生ではなく2年・3年生の授業が見たかった。体づくり・剣道の授業両方とも非常に良くまとめられていて良かった。次年度は東京開催だが今日の発表を越えられるものにしたいと考えています。

4 指導講評 東海大学教授 小澤 治夫 氏

工藤先生お疲れ様でした。また、昨日の新体操のアトラクションもご苦労様でした。自分も部活動指導に命を掛けていましたが、部活動を一生懸命に指導している先生が良い体育授業をすることができればまさに鬼に金棒です。今日の体づくり運動の授業は普通科1年生ということでやりにくかったと思います。特に、女子の動けない生徒の扱いに苦慮することが多いですが、動けない生徒をどう動かしていくかが一番難しいと感じました。体づくり運動は、「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」で構成されており、単元としてまとめて実施しなければならないことになっています。しかし、現実的には高校ではなかなか展開されていない実態があります。私は、体ほぐしの運動をもっと準備運動のなかに取り入れていく必要があると思います。そのためにも単元として体づくり運動を定着させることが大切です。体づくり運動の単元では最初は体ほぐしの運動を多めに取り入れ、徐々に体力を高める運動を増やしていくと良いと思います。

栄花先生お疲れ様でした。授業においては教師との一体化が大切であり、今日の剣道の授業はまさに栄花先生が生徒の中に溶け込んだ授業が行われており、授業の勢いが感じられる私の一番好きな授業展開でした。授業というのは教材とそれを展開する教師がキーポイントになるということを今日の授業を見て改めて感じました。



今日は授業の教材化の工夫と教授法について話をさせていただきます。私は以前高校で体育の授業を教えていましたが、私の授業のキーワードは「エールで士気を高める」、「挨拶をしっかりする」、「喜びを表現する」でした。子どもたちを授業に夢中にさせることが大切であり、その中で思いっきり喜んだり、悔しがったりなど様々な体験をさせるよう取り組んできました。高橋健夫先生が提唱していますが、良い体育授業の条件は、勢いがあり、雰囲気の良い授業で、「歓声があがる」、「賞賛の声が湧く」、「励まし合う」、「お互いに教え合う」という4つの姿が観察された時に良い授業となります。そのために「意味のあることを」、「熱意を持って」、「上手に教える」、これを「小澤流：教えの極意3か条」と言っています。「意味あることを」とは教材ということであり、体育の授業では、大変だけど楽しかつ

た、楽しかったけどきつかったということを感じさせることが大事です。体育授業の目標に楽しさを教えることとありますが、それは単に喜んで楽しかったということではなく、「できた」、「何かが分かった」という実感を持たせることが大切です。長距離走や鉄棒、剣道、柔道、体力テストなどは生徒にとっては苦手な種目、サッカーなどの球技は好んでする種目と言えます。特に体力テストは聞いただけで先生も生徒も引いてしまいます。体力テストの実施率を見ると、しっかりと実施している学校ほど体力も高いことは明白です。体力テストを楽しくできる方法を工夫することで生徒のモチベーションを高めることができます。例えば、体力テストをイベント化して選手宣誓を行ったりユニフォームを揃えたりすることでクラスの団結が強まり意欲が高まります。小学校の先生は授業づくりが上手ですが残念なことに専科の教員は少ないです。高校の先生は専門家ばかりですが威圧的な授業が多いのが残念です。指導者としての威厳を保ちながらひとたび授業が始まると、先生自身が明るく、生徒から歓声が上がる、生徒が夢中になるような授業が望まれます。今日の剣道の授業は、そんな素晴らしい授業であり我々もあのような授業を目指さなければならぬと感じました。ある学校ではバレーボールの授業でラリーが続かず授業が盛り上がらないことから、柔らかいボールに替えたところ、生徒の意欲も高まり、歓声が上がるようになり、結果として体力も向上したと聞いたことがあります。また、走り幅跳びの授業では人形モデルを用いて動作説明を行ったり、スタートフラッグを用いたり、走路の白線をまっすぐに引いたりすることで子どもたちの意欲が高まり、記録が伸びました。体力テストの記録が伸びていないのは子どもたちが意欲や気力を持って臨んでいないことも原因であろうと思います。我々体育教員は教材や教具を工夫し有効に活用することで生徒のやる気を高めることができるのです。指導に当たっては、言葉が人を育てるといわれますが、難しいことを難しく教えるのではなく、難しいことを簡単に分かりやすい言葉で教える、即ち指導言語を活用することも有効です。

人間の神経細胞は生まれてからどんどん発達して複雑に絡んでいきます。神経発達の著しい特に高校期に様々な体験をすることは極めて重要です。脳の血流量を見ると、テレビゲームや漫画を長く見ている子どもは、前頭野の血流量は減少し、頭は発達しません。一方、両手運動・編み物・会話をする・集団遊びなどは、血流量は増加しています。だから学校で球技をしたり、戦術学習をしたり、コミュニケーションをしなければならないのです。それが学校の役割です。運動は筋肉や骨だけではなく脳も発達させてくれるのです。また、ピンチやストレスも人を成長させてくれます。私たちの頃はテレビもなくみんな腕白な時代を過ごしていました。そして授業はというと今で言う体づくりばかりで徹底的に鍛えられました。苦しくてきつかったという思い出しかありません。これからは次世代型の授業として「楽しかったけどきつかった。きつかったけど楽しかった」こんな授業が求められてきます。自然体験が減少すると脳の働きが阻害されます。自然体験のある子どもほど道徳観や正義感が高い。今の子どもは携帯電話ばかりで体育の授業でも思いつき体を動かしていません。だからチャレンジ精神が乏しいのです。子どもの身体活動がどんどん激減している現在、部活動や学校体育が極めて大きな役割を果たすことになります。体力の高い秋田県では教育標語に「朝食をしっかり摂る」、「早寝・早起き」とあります。福井県は毎日運動していると回答している割合は高い。また体力は学力や就職率、経済力などとも相関しています。北海道の先生から「これだけ頑張っているのに体力は低下する一方だ」という声を聞くことがあります。その大きな原因は社会構造の崩壊にあり社会教育や家庭教育の低下でもあります。体力は生活習慣と密接に関連しています。北海道の子どもたちの肥満傾向は高い。これは食べている量が多いというわけではなく体を動かす機会が少ない

からです。学校まで自動車で送迎するなど日常生活での身体活動が極めて少ないのです。学力偏差値と部活動との関係を見ると学力偏差値の高い学校ほど運動部入部率が高い。体力の上位群はテレビの視聴時間も短く、運動が好き・体育が楽しいと回答しています。我々、体育の教師だからこそ、自分自身がスポーツを楽しみ、体を鍛えなければなりません。体育の授業においてはソフトだけではなく授業に大きくかかわる教師の存在も影響します。スポーツは楽しいという思いをもっていないと良い授業はつくれません。

5 成果と課題

(1) 成果

「体づくり運動」は、授業前の準備運動と補強運動という生徒のイメージを払拭し、自己の健康を考える上で大切な領域であると理解させる。3年間の授業計画は、自己のねらいに応じた「体づくり運動」であり、「わかる」「できる」「かかわる」を基本として、1年次から2・3年次と進展する中で、健康とは何か、個人・仲間・家族の健康を考える事に主眼をおいた。まずは、今年度から先行実施できたことが成果である。

「剣道」は、日本伝統文化であると同時に、どうしても型にはまった堅いイメージがある。体育授業では、生徒たちが楽しく、積極的に体を動かす喜びを感じさせなければいけない。今回はグループ学習をとおして、互いに協力し合いながら活動内容を考え、自己評価をするという方法を取り入れた。初めての取り組みであったが、生徒たちの笑顔や、あちらこちらで笑い声が出るなど楽しそうな姿に感動した。剣道が一見堅いイメージから柔らかいイメージに変わった瞬間であった。その中で、武道特有の「静」と「動」の関係や、日本の伝統文化の一つとして剣道を学ばせられたことが成果である。

(2) 課題

今回、本校体育科が発表した「運動好きな生徒を育て豊かなスポーツライフの基礎をはぐくむ体育学習」～仲間と共に心と体をはぐくむ授業～の実践は、体育実技の全ての単元で共通のテーマでもある。各単元の特性の理解や技術の習得をめざす中、生徒の主体性と意欲を引き出す学習活動を展開するために、授業者はより良質な授業プランを準備しなければならない。新学習指導要領にある教科目標と各種目の評価の観点を十分に踏まえながら、各単元毎の指導計画を体系化させ、授業改善の意識を継続する必要がある。そして、本校の授業実践の情報を積極的に発信し、より良い体育授業の実践をめざす体育教員と共に切磋琢磨し、本道の学校体育の発展に寄与したい。

研究主題

仲間と共にスポーツの楽しさに触れ，知的に理解することを通して，生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質をはぐくむ体育学習の追求

～新学習指導要領の先行実施を通して～

北海道北広島高等学校

1 研究発表の概要

発表者：北海道北広島高等学校 教諭 内海 久

(1) 研究主題

本校保健体育科では大会主題の本質を「将来の実生活でスポーツを継続するための確かな体育の力の育成」であるにとらえて，生徒一人一人に「自ら学ぶ力」と「仲間と共に学ぶ力」を身に付けさせ，自らスポーツに親しもうとする態度を養うことができるような授業を計画してきた。

本校は昨年度の入学生から単位制に移行し，このタイミングに合わせ，保健体育科では新学習指導要領を先行実施している。今回の指導要領改訂の趣旨を保健体育科では，①思考力・判断力・表現力の育成，②主体的に学習に取り組む態度，③言語活動の充実，と捉えて年間指導計画および各単元での指導計画を大幅に見直すこととなった。

このことに関わり，仲間とのコミュニケーションおよび言語活動の充実を通して論理的思考力を養うことから体育的学力へ，教材や学習形態の工夫から関心を起こさせ，仲間と共に学ぶ楽しさやその効果を理解することを通してスポーツを継続する資質へと結び付けたいと考えたことから研究主題を設定した。

(2) 研究の仮説

「スポーツの楽しさ」「体育的学力」「主体性」の3点を経験，獲得することによって「豊かなスポーツライフを継続する資質」を育むことができるであろう。

①体育的学力とは

体育の指導内容（技能，態度，知識，思考・判断）がバランスよく身に付いた能力のことである。特に知識については学習指導要領では「言葉や文章など明確な形で表出することが可能な形式知だけでなく，勘や直感，経験に基づく知恵などの暗黙知を含む概念であり，意欲，思考力，運動の技能の源となるものである。」とあることから重きを置いて捉えている。

②主体性とは

自分の意志・判断で行動しようとする態度のことである。主体性のある生徒の姿とは，自ら課題を見つけ，自ら学ぶ糸口を発見し，計画・創造することができるものと考えている。

③目指す生徒像

本校の重点目標及び本大会での目指す児童生徒像「生涯にわたって生き生きと運動・スポーツに親しむ子ども」を受けて、本校での目指す生徒像を以下の３点として掲げた。

- ア 自主的・主体的に学び、課題を知的に捉えて取り組み、解決していく。
- イ 仲間との言語活動を積極的に図ることから論理的思考力・判断力・表現力を養う。
- ウ 運動の必要性や楽しみ方を理解し、主体的・継続的に運動に親しむ。

(3) 研究の視点

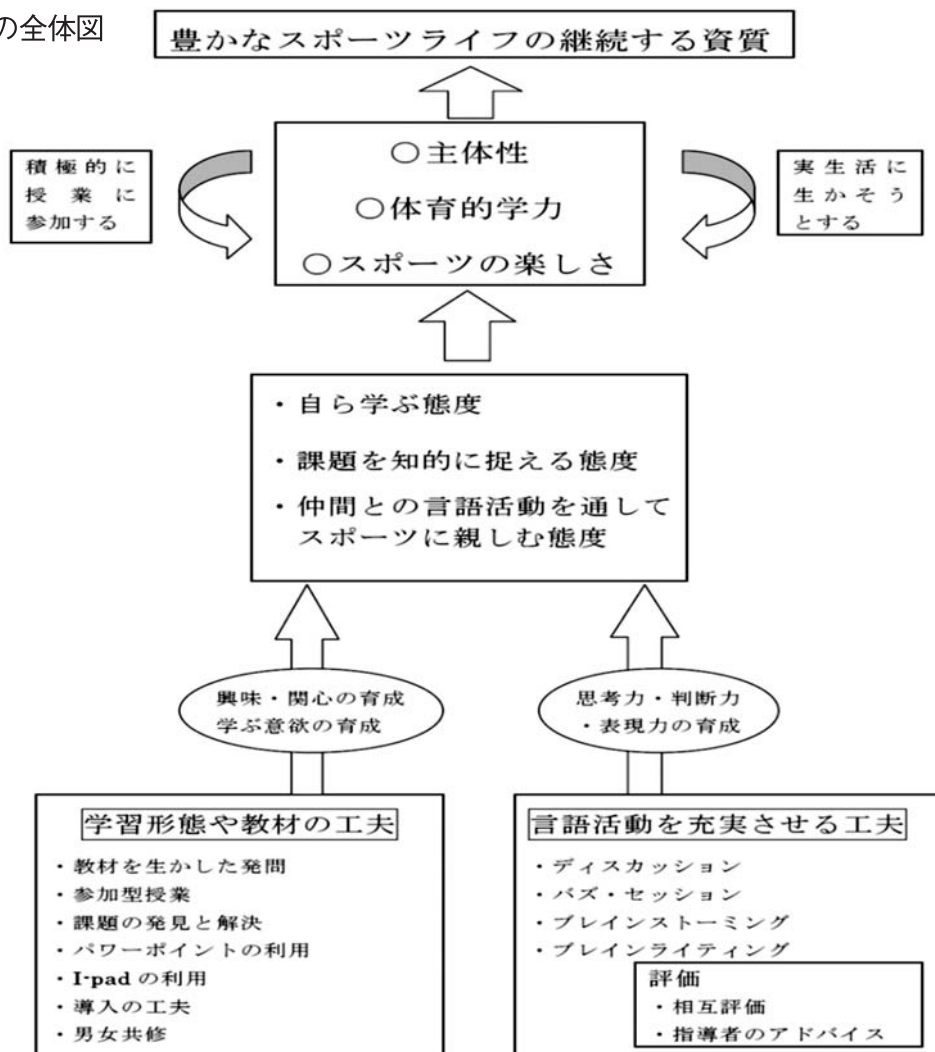
〈視点１〉学習形態や教材の工夫

ねらいに応じて日常生活の中で親しみのある題材を教材化することにより、意欲・関心を高めることができ、運動の本質的な楽しさや喜びの体験を味わうことができる。興味関心をもち、楽しく学習することから主体性が身に付き、学習内容の理解を深めることができる。

〈視点２〉言語活動を充実させる工夫

思考力・判断力・表現力を育成させるためには課題解決的な取組が必要であり、仲間とのコミュニケーションから論理的思考能力を向上させることができる。また協同的な作業を通して仲間と共に学ぶ楽しさを味わうと同時に、主体的に学習に取り組む態度も養われる。

研究の全体図



2 公開授業について

(1) 第1年次 領域名「体育理論」

授業者 森田 有

第1単元「スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴」

単元名 「スポーツの経済的効果とスポーツ産業 2/2」

①教材の工夫

本時の学習内容は前時の学習を深める内容であるため、はじめにパワーポイントを用いたポイントを経った文字表記によって前時の学習内容を確認した。パワーポイントの使用はポイントを明確に確認することができ、生徒をレディネス状態へと準備させることができた。

次に、本時の学習内容に関心を持たせるため、「プロ野球キャンプ地の経済効果」についてのニュース（動画）を視聴した。視聴後、発問を行い生徒との距離を縮めていた。

スポーツのもつリアリティと文化的特性や美的特性を視聴覚教材で効果的に活用することによって生徒の興味・関心を引き出し、つまらない印象がある理論という授業に対して興味をもたせ、モチベーションを向上させるために使用した。

グループでの発表の際には実物投影機を使用することで、まとめた表をプロジェクターに映し出しながら説明することができ、活字を通して理解することの一助となった。

②言語活動を充実させる工夫

8グループに分かれ、リーダーの生徒が中心となり「スポーツへの多様な関わり方」をCMやVTRを参考にしながら活発な意見交換をした。前回の授業でワークシートに個人の意見を書き出させていたため、グループ内で意見交換をしながら論理的に説明できるようにまとめていた。グループ活動を行うことにより、必然的に授業へ積極的に参加することを余儀なくされ、主体的に考える機会が与えられることから自主的に取り組むことにつながったと思われる。そしてグループ毎に発表することにより、考えをまとめたり論理的に説明したり、他の考え方を聞くことを通して、話を理解する力や物事を多方向から捉える力を養えたとも感じている。

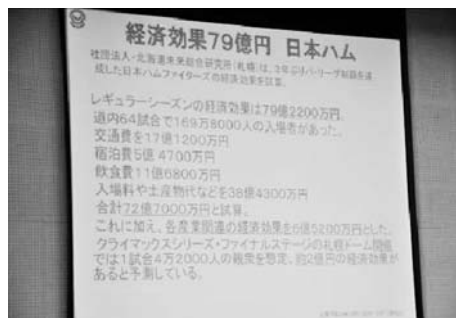


写真1 パワーポイントの利用



写真2 実物投影機を用いた発表



写真3 ワークシート



写真4 ディスカッション

(2) 第2年次 領域名「ダンス」 単元名「創作ダンス」

授業者 堀川 政彦

①基本運動

創作ダンスの単元では、基本運動（教材）を使用して動きの基本を身につけさせている。準備体操・ウォーミングアップとなる他、創作の際に表現の手がかりとなる動きを身に付けることができる。

②心と体ほぐし運動・男女共修

生徒への事前アンケートの結果から、多くの生徒に人前で自分を表現することへの不安や恥ずかしさがあることが分かった。ダンスの主運動に入る前に、上記のような障壁を取り除くため、導入では誰もが楽しみながら仲間と触れ合える体ほぐし運動を行うことで心と体をリラックスさせた。この時に敢えて男女で触れ合う場面を作ることで異性と触れ合う恥ずかしさを取り除くことができ、その後の活動がスムーズになった。

次に8 8 4 4 2 2 1 1 1 1のリズムでリーダーの即興的な動きに合わせて、全体で同じ動作を行った。生徒が動きを作り、みんなで同じ動きをするため、楽しみながら体を動かすことができた。

③作品づくり

短い時間で即興的な作品を創作するために、本時のテーマ「スポーツ名場面」から湧くイメージをイメージカードに記入させていく。記入した内容からグループで簡単に話し合い、自分たちの作品を創作していく。イメージカードを使用することで動き出すまでの時間の短縮に繋がったと思われる。

さらにDKWを設定することで何に注意して創作するかが明確に意識できたと思われる。

④見せ合いの設定と視聴覚機器（i-pad）の活用

グループごとに即興的な作品ができたなら、2グループごとに作品を見せ合い、賞賛や意見を述べてより良い作品づくりに向けたコミュニケーション活動を行った。

その際に「i-pad」を活用することで、その場その場での素早いフィードバックを可能にしている他、コミュニケーション活動もより活性化され、動きについて具体的な意見を引き出す効果があった。



写真5 基本運動



写真6 体と心ほぐし運動



写真7 8 8 4 4 2 2 1 1 1 1



写真8 イメージカード



写真9 i-pad の活用

3 研究協議

(1) 研究について

質問 年間計画の意図を教えてください。

回答 先行実施にあたって現行の良いところは残したい。本校での体育の役割は授業規律。しつけ指導も必要と考えたので、前半は男女別に一斉指導型に。後半から生涯を通してのマイスポーツを作れるように意図がある。領域選択は2・3年はコンプリートしている。

意見 柔道とダンスの領域選択には違和感がある。

(2) 第1年次 「体育理論」

質問 本時の授業から評価の見取りはどのように行うのか。

回答 テストのような形式で簡単な知識、学んだ感想を書かせる。体育の評価の一部とする。

意見 評価方法が4つ見なければいけないところが苦しい。

意見 CMやプロ野球キャンプの映像は軸がずれているように思う。

意見 TTで行っているのであれば、T1 T2の役割分担があればよいと思う。

(3) 第2年次 「ダンス」

質問 音楽の選曲、動きの作り方に生徒は関わっているのか。

回答 選曲は教員。1 2 1 2, 2 ビートや8 ビート等の合わせやすいもの。流しながらリラックスできるもの。強弱も考慮。動きの作り方については、少し動きを指導したが後は生徒に任せた。

質問 事後アンケートをとる予定はあるのか。子供たちの変化をとる予定はあるのか。

回答 授業終了後アンケート予定あり。

質問 i-pad は他種目でもしようしているのか。

回答 跳び箱やマット運動で使用している。

質問 普段の評価をどうしているのか。

回答 作品づくりの関わり方で評価しているが、まだまだ研修が必要である。様子を見ながら記録・記憶で評価に繋げたい。i-pad でも動作を確認して評価できる。

質問 男子を指導する際の課題はあるか。

回答 特にない。男子のほう恥ずかしがらないことが多い。女子のほうがおとなしくてどうしてよいかわからないところが多い。

質問 基本運動は参考にするものがあつたのか。生徒の練習過程を教えてください。

回答 ダンスのラジオ体操のようなビデオが1～6まであり、それを利用している。視聴覚機器（プロジェクター）で対応し、4時間くらいでマスターしていた。



写真10 研究協議

4 指導講評

指導助言者：早稲田大学 教授 友添 秀則

(1) 研究について

特になし

(2) 第1年次 「体育理論」

- ・意見を出させた結果がオープンエンドでは駄目である。経済効果の79億円が生まれたのか、移動して集まったのかを生徒に伝えなければならない。
- ・スポーツへのかかわり方で「支える」の項目は生徒は書けないため、「調べる」「知る」で考えさせると理解しやすくなると思われる。
- ・79億円という額を「北広島市の予算」「大卒の生涯賃金2億円」「総理大臣の給料」等の具体例と比較すると数字のインパクトが出てイメージをしやすい。

(3) 第2年次 「ダンス」

- ・導入のランニングは体づくりと思われる。スキップやサイドステップなどを入れたり、グループジョギングにしたりすると良かった。
- ・創作がワンパターンだと表現力が乏しくなるため、教材解釈をもう少し下ろして、解釈を変えるとよいと思う。
- ・踊りこみの時間をもう少し長く取るとよいと思う。名場面という解釈が少し強すぎるため、静と動、空間の使い方、シンメトリーへの反転が弱くなるかもしれない。

5 成果と課題

(1) 成果

- 授業の導入から親しみのある題材を用いた教材や緊張をほぐすための教材を活用することにより、生徒の興味・関心を高めることができたと感じられた。その際に写真や動画を用いたり、仲間とコミュニケーションをとらせるとその後の授業内での発言や活動が活発になったため、より効果的であると思われる。男女共修の授業においては、お互いの恥ずかしさを取り除く上で絶大な効果があると感じた。
- i-padを活用することにより、自分達の動きをすぐに確認できることから課題を視覚やイメージで捉えることができる生徒が多く見られた。活用する機会が増す度にコミュニケーション活動も増えるため、積極的に発言する生徒も増加した。
- 仲間とのコミュニケーション活動を通して、共に学ぶ楽しさを十分味合わせることができたと感じられた。話し合う活動を通して論理的に考える力が養われた結果、課題を知的に捉えて解決していく手立てを考察できる様子が見られた。
- 話した内容をグループ毎に発表したり、ダンスの作品を発表し合うことを通して、相手の良さを認めたり課題を見つけられる様子が見られた。

(2) 課題

- 様々な学習形態を活用していく場面の設定と効果的な活用方法の工夫。
- コミュニケーション活動を行う目的の明確化と追い込み方の工夫。
- 発展性のあるものや追求できる教材や発問の研究と選択。
- 中学校での学習内容を把握し、学びなおしを含め3年間の学習内容を見通した計画の立案。
- 評価規準が適切であるか、実践を通して絶えず確認する体制づくり。

分科会研究発表・研究協議等記録

特別支援学校

第11分科会

北海道札幌市立豊明高等養護学校



大倉山ジャンプ競技場(札幌市 中央区)

研究主題

「生徒が主体的に取り組むための 学習と支援の在り方」

～円滑な社会活動を行うための知識の会得と実践力の育成～

札幌市立豊明高等養護学校

1 研究発表の概要

発表者：札幌市立豊明高等養護学校 教諭 兒玉 亜来

(1) 研究主題

生徒が主体的に取り組むための学習と支援

円滑な社会活動のために育みたい知識と実践力
体力・仲間と協力する力・問題を主体的に解決する力・余暇活動

就労・
地域社会

(2) 研究仮説

○このような生徒に

- ・毎日の体力づくりを継続して取り組むことができる生徒。
- ・見通しを持てると、自主的に取り組むことができる生徒。
- ・運動が苦手な生徒。
- ・仲間との関わり方に課題がある生徒。

○このような手だてを講じると

- ・卒業後の生活をイメージできるような教材，授業展開の工夫。
- ・準備や片付けを生徒達で行う習慣づくり。
- ・達成感を感じられるような目標設定や，自己評価が視覚的に分かりやすく，意欲をもてる教材の工夫。
- ・仲間同士協力し，助け合う題材の設定

○こうなるだろう

- ・生涯に渡ってスポーツを楽しむことができる。
- ・自ら目標を持って生活することができる。
- ・問題に直面したときに，解決するための方法を考えることができる。
- ・社会生活を送るために必要な知識や，適切な人間関係を構築することができる。
- ・地域や様々な人との繋がりをもち，社会生活を送ることができる。

(3) 研究の視点

〈視点1〉生涯スポーツにつながる教材の開発・工夫

- ①生徒の実態把握，体力や技能の定着や推移の記録。
- ②卒業後を見通し，日常に取り入れやすい種目の導入。(ランニング・グラウンドゴルフ)
- ③技能差に関係なく，スポーツの楽しさを会得できるような種目の工夫。

〈視点2〉協同的，課題解決的に取り組む学習過程の構築

- ①自己理解と他者理解を通して，お互いを尊重，認め合える環境づくり。(性教育)
- ②生徒の理解力や実態に応じた学習グループ設定。(性教育)
- ③授業の準備，後片付けをグループごとに行うことにより仲間と協同する意識の醸成。
- ④自ら目標を定め，目標を達成しようという向上心の育成。

2 公開授業について

(1) 第1学年 性教育 「大人になるために」

授業者 伊藤沙保里

①本時のねらい

生徒達が誕生してからこれまでの成長を知り，体の大切さについて気づくことを目指す。

②本時の授業から

授業が開始される前には，生徒達は大変緊張しており，表情も硬く不安そうにしていた。授業では，始めに生徒の成長過程の写真を見ながら振り返り，成長の変化を知るという活動を行った。生徒達からは事前に写真を集め，青年期→児童期→幼児期と現在から遡って振り返ることができるようにした。生徒達は写真を見せると，表情が和らぎ，「誰だろう?」「〇〇じゃない?」など会話が生まれ，写真が誰の写真かを予測しながら興味深く見ることができた。

次に生まれたときの身長・体重を発表し，赤ちゃんの人形(身長50cm，体重3kg)と約60kgの木箱を使って実際に重さや大きさを実感する活動をした。50cmとはどのくらいの長さか想像して手で表して見るように促すと，手を大きく広げて「手では表せないくらい」と言っていたり，「机の長さくらい」と答えたりしていた。また，実際に赤ちゃんの人形を抱くときは，「想像していたよりも重い」と答えている生徒が多く，自分が生まれた時の体重を実感することができていた。約60kg(高校1年生男子の平均体重)の木箱は想像以上に重かったようで引っ張ると動かなかったり，必死に動かしている生徒が多かった。そのような活動を通して，生徒は生まれた時と現在の自分の比較をすることができ，ここまで成長してきた自分の体について実感することができていた。

最後に体の成長と結びつけて，これまで関わってきた多くの人たちに感謝し，自分の存在を認め，体を大切にしていけることの大切さを説明した。



生徒達は、最初は緊張していたものの、徐々にいつも通りの表情になり、意欲的に発言したり、活動にも参加することができた。

③考察

- ・写真の利用や人形を使った模擬体験など活動的な内容を取り入れたことによって、生徒達が意欲的に授業に参加することができた。
- ・基本的な体の成長の変化だけではなく、生まれた時の身長・体重の違い、成長の個人差などに触れながら授業を行うことができればよかった。
- ・体の成長から「自分の体の大切さ」につなげる流れがスムーズにできなかった。多くの人たちの支えがあってここまで成長してきたこと、自分の体を知ることによって体の大切さに気づくことなどをもう少し具体的に提示して伝えることが必要だと感じた。



(2) 第2学年 球技 「グラウンド・ゴルフ（室内）」

授業者 小原 要

①本時のねらい

- ・ルール、マナーを守ってプレーすることができるようにする。【思考・判断】
- ・コース作りや後片付けなどグループで協力して行うことができるようにする。【態度】

②本時の授業から

a・準備運動からコース作成

3分間それぞれのジョグのペースで走ることで心拍数を高め、歩行を挟んで呼吸を落ち着かせてからストレッチへとつなげている。ストレッチは14種類を行い全身を伸ばしている。種目に応じてさらに種類を増やす場合もある。以前はすべて笛の合図で生徒を動かしていたが、年度途中から音楽を使用してランニング、ストレッチまでの流れをつくった。ランニング時はアップテンポ、歩行・ストレッチ時にはスローテンポの曲を使用している。



b・用具配布から課題確認

課題確認は個人目標の確認、他者評価の手順、安全に対する配慮、プレー中の約束、基本動作の確認をした。内容が多すぎて生徒の理解が充分ではなかった。

c・ラウンド中

多数の参観者がいることによりスコアは劇的に向上した。ホールイン・ワンは通常授業中3回程度だが、今回は12回という結果であった。緊張感から集中力が向上した結果だと思うが、レクという観点からすると和気あいあいとした日常のムードには欠けていた。どちらの要素をどれくらいの按分で授業を組み立てていくかが課題となる。



d・評価から終了まで

スコアボード記入に時間を要し、評価からの終了までの流れが駆け足になってしまった。

③考察

a・技術向上場面の不足

ラウンド終了後の時間にバラツキがあるので、練習ラウンド等の準備があればさらに技術の向上が望めた。

b・課題解決場面の援助

個々の能力差は事前に把握しており、それを助け合いでカバーさせることを意図したが、もう少し時間が必要だった。助け合いでカバーさせる部分と事前にこちらが準備しておく部分との区分けが明快ではなかった。



c・準備運動における音楽使用の有効性

以前はやらされている準備運動という側面があったが、曲をかけることにより楽しく体を動かすという方向へ変化したように思う。

d・偏見のない集団へ

協働体制を構築することで、優越感や劣等感に起因する集団としてのぎこちなさが、助け合いの気持ちへ変容していった。

3 研究協議について

(1) 研究について

公開授業終了し昼食・アトラクション（豊明太鼓）の後、来賓として(財)日本学校体育研究連合会常務理事岡出美則氏、北海道教育大学教授安井友康氏をお迎えし、一般参加者・実行委員、本校教職員が集合し研究協議会が下記の通り行われました。

・研究発表に対する質問・意見

体力づくりのリズム体操の時、「列を整える」ということ「走法の指導」についての質問があった。これに対し横列はポイントが有りそれに従うが、縦列は安全を自ら判断し互い違いになるよう指導していると返答。走法等については特に扱ってはいないことを回答。さらに、助言者：安井（北海道教育大学教授）より、何を求めるのかによるが、あまり「整列をきれいに」と気にすると発達に障害のある子の場合、それに目がいってしまい本当の面白さが減じてしまうことがある。授業者の考え、授業の組み立てによる。と助言があった。また、発達障害などにより授業にのれない子の対応は、少しずつ目標を工夫して「こんなやり方もあるよ」という対応をしていると説明をする。

(2) 公開授業（性の指導）に対する質問・意見

・性の学習については、各学校で戸惑いが多く職員間の確認を（世情が揺れる中で）どうしているのか？保護者の理解は？等、大変興味を持って質問が寄せられた。これに対し、長い年数やっており職員間で反発はないこと、グループ別の指導記録、教材を保管し、積み上げ、教職員間で連携を取っていると回答。また、保護者へは生活帳を通し伝え連携が図られていることが説明された。

・参加者からの実践や取り組みの紹介

大変難しい課題があり苦慮している。対応として「ロールプレイ」が有効ではないかと考えた。しかし、実際には特別支援学校ではなかなか難しいこともある。

助言：岡出美則氏（日本学校体育研究連合会理事）

- ・学校の授業を進める上で、教員の合意だけではダメ。保護者の合意も必要。子どもが納得し、「授業が面白かった」となると保護者も納得すると「こうしましょう！」と言える。ロールプレイは、実施に近いシチュエーションを上手につくれるかどうかで効果が全然違う。再現性の高い実践の積み重ねが大切。他の先生も「これは使えるぞ！」となるとよい。性の指導を長くやっている学校には財産がある。「こういうふうにはできるんじゃないか！？」とリーダーシップを取るのは管理職の役割と指導助言を頂いた。

この他、積極的な意見や考えが述べられた。性の指導は、難しい問題も多いが、相手との適切な関わりや自分の存在意義を知ってもらうということが今後の課題であると一定の方向でまとまる。

(3) 公開授業（グラウンドゴルフ）に対する質問・意見

- ・グラウンドゴルフの授業を展開する中で、地域性や今後の発展、学校卒業後の一般化を考えて、将来を見据えた授業や夢を実現する効果的な方法のことに話題が向いた。北海道は地域性、季節の特色が出しやすい。また、授業ではコース設定も生徒が考えることで、空間認識の力もつき、様々なメリットがある。冬に雪の上でやるのも楽しめる。冬期間のレクとして楽しめる。ただし残念なことに、卒業した途端に肥満になる子もいる。本校にはトエピラ会という卒業生の会があり、そのような活動の機会を作りスポーツに触れる機会を少しでも確保したいと考えている。

4 指導講評 安井友康教授

- ・性の問題は難しいが、難しいと言っている場合ではない。性の被害・加害が多く、自分ではわからなくて犯罪になってしまう場合もある。変化の多い日本の社会の中で、地域でいかに自立した生活ができるか。その柱は、「人を好きになる」「自分を大切にする」という気持ちが生きる力となる。性教育をあまり狭く考えず、自分や人を大切に思うという広い考えを持ちたい。豊明では先生方がコンセンサスを持ってモデルになる取り組みをしていて、個別の支援の積み重ねは財産である。これは全国に発信すべき有意義な取り組みである。自分が大きくなったのは、自分だけの力じゃないということに気づくように今後の取り組みに期待したい。
- ・体育のグラウンドゴルフについては、生涯スポーツという中で活動量の問題が出てくる。活動量が少ないことをどう担保するか。これを指摘されるとつらいと思うが、朝の体力づくりで一日の活動量は充分やっている。学習指導要領の総則でも「学校教育全体で取り組む」とあるので問題としては解決できている。体育では体の使い方、バランス、コーディネーションも大事。発達障害のある子は、「速く動かす」ことに注目し「上手に動かせ」なくて、いじめや多くの問題にぶつかる。時間に追われずにじっくりと正確なパフォーマンスをするということがグラウンドゴルフの中にあった。鈴を使ってカップインの結果もわかる。生徒はしっかり確認したいのに「はやくやれ」「がんばれ」ではいけない。今日の授業中、準備、後片付けでは、いろいろな要素が入っていて投げかけるものが多い授業だった。インクルージョンの中で、今後の特別支援学校の果たす役割は、地域の学校、地域社会にこの財産をどれだけひろげられるか。素人が見たら、ふつうに遊んでいるように見えても、いろいろな要素があって専門家・プロとして取り組んでいるんだという発信を

期待したい。

5 成果と課題

(1) 成果

〈研究発表〉

全国的に比較すると基本的な体力に劣る北海道の実態を踏まえ、本校における運動能力・体力の実態を改めて確認すると共に、その原因と対策を検討することができた。冬季における運動不足や発達障害などにより運動の機会が少ないこと等が原因の一つと考えられる。このことに対し、基本的な生活を築くための体力づくりを行うことは重要なこととして本校では毎朝体力づくりを行ってきた。意欲を保つため季節や雨天時などでいくつかの種目を換えて行い、結果が理解納得できるグラフ化などを行うことで体力の向上に向けた一定の成果がみられた。

〈性の指導〉

性の指導については様々な見方や考え方があり、教育現場においても未だにタブー視する実態もみられる。本校においては、以前より計画的に指導者一人一人の共通理解のもと行われている。今回、参加された方々の話では、性的な事案に対応ができていない実態や校内の指導体制が整っていないなど、今回の公開にはとても興味を持って参加頂けたことが伺える。助言者の安井教授のご指導にもあるとおり「被害者とならない」だけではなく「加害者にならない」ことも大切。さらに、加害者になっても加害者の意識がないこともあり、深刻な問題として扱うべきとのことであった。情報化の時代にあって、間違った情報によりトラブルを防ぐためにも役立つ公開授業であったと思われる。

〈球技：グラウンドゴルフ〉

大会主題である「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」を念頭に公開されたグラウンドゴルフの学習であった。障害を持ち運動に接することが不足しがちな生徒に対し、北海道発祥のレクリエーションスポーツとしてグラウンドゴルフを体験することは卒業後の生活にも大いに役立つことが考えられる。地域性を生かし、リラックスして楽しみつつ、目標や結果がはっきりとして取り組みやすい。また、今回の学習では、コースを生徒自ら協働して作ることや学習を進めるなど、卒業後の社会生活で必要となるコミュニケーションや協力・他者への配慮、更には自分自身の心身のコントロールといった学習も知らず知らずのうちに行われていることも見逃せない。楽しみながら未来へつながる学習として役立てられる公開授業となった。

(2) 課題

特別支援学校高等部として、卒業後は社会の中で生活するための多くの事を身につけなければならない本校の生徒にあって、全ての学習において課題が多くある。より効果的に連携を持って学習を進めることはとても重要なことと思われる。今回、多くの意見を聞き、同じように困っていること、より良い意見や考え方などの交換が行われたことを生かせる事が大切。特に、卒業後の実際の生徒の生活を配慮し、どのような力や知識が必要か、またどのように学んだことを実生活の中で実践することができるか、生徒一人一人がそれを生かす自覚を育むことが課題と考えられる。

平成24年度全国学校体育研究

最優秀校・優良校・功労者表彰一覧 受賞校／受賞者



豊平峡ダム 定山湖(札幌市 南区)

平成24年度 全国学校体育研究 最優秀校（文部科学大臣賞）一覧

都道府県	NO.	学 校 名	校長名	主任名	〒	所 在 地
秋田県	1	大仙市立大曲中学校	石井 義広	佐藤 秀敏	014-0016	秋田県大仙市若竹町7-17
埼玉県	2	越谷市立城ノ上小学校	若田 範之	鈴木 勇人	343-0011	埼玉県越谷市増林6066-1
熊本県	3	菊池市立花房小学校	田中 正浩	坂本 一真	861-1313	熊本県菊池市出田2516

平成24年度 全国学校体育研究 優良校一覧

都道府県	NO.	学 校 名	校長名	主任名	〒	所 在 地
北海道	5512	札幌市立上野幌中学校	下山 信弘	太田 吏	004-0032	札幌市厚別区上野幌2条3丁目10-1
	5513	北見市立端野中学校	田巻 司史	仲野 桂司	099-2103	北見市端野町3区1045番地3
	5514	北海道岩内高等学校	佐藤 敏行	山本 直洋	045-0012	北海道岩内郡岩内町字宮園43-1
青森県	5515	十和田市立大不動小学校	苔米地庸子	渡辺 浩美	034-0211	青森県十和田市大字大不動字漆久保24-28
	5516	十和田市立十和田中学校	小川 和俊	上野 道	034-0035	青森県十和田市東十六番町27-1
	5517	青森県立七戸高等学校	松木 一幸	和田 寿博	039-2516	青森県上北郡七戸町館野47-31
岩手県	5518	九戸村立江刺家小学校	盛島 寛	菅原 一季	028-6505	岩手県九戸郡九戸村大字江刺家10-12-2
	5519	盛岡市立黒石野中学校	佐藤 孝	阿部 幸子	020-0111	盛岡市黒石野3-15-1
宮城県	5520	仙台市立八乙女小学校	紺野 利次	前川 昭子	989-3111	仙台市泉区松森字不動148番地
秋田県	5521	湯沢市立湯沢東小学校	姉崎 克則	大内 秀朗	012-0803	秋田県湯沢市杉沢新所字八斗場33
		湯沢市立湯沢北中学校	後藤美喜子	鈴木恵美子		
山形県	5522	山形市立大郷小学校	高木 祐治	小林 桂子	990-0892	山形市大字中野506番地
	5523	南陽市立宮内中学校	油井 直樹	芳賀 彰洋	992-0472	山形県南陽市宮内2303番地の2
	5524	山形県立荒砥高等学校	奥山 康夫	佐藤 大輔	992-0831	山形県西置賜郡白鷹町大字荒砥甲367
福島県	5525	福島大学附属小学校	菅家 礼子	落合 和将	960-8022	福島県福島市新浜町4番6号
茨城県	5526	東海村立舟石川小学校	白井 嘉彦	小沼 正美	319-1111	茨城県那珂郡東海村舟石川690番地1
	5527	水戸市立妻里小学校	仁平 良治	鈴木 章以 生田目みつ子	319-0305	茨城県水戸市中原町682番地
群馬県	5528	高崎市立南陽台小学校	熊倉 幸子	滝川 考八	370-2101	群馬県高崎市吉井町南陽台3-16-1
	5529	中之条町立六合中学校	黒岩 祐子	中澤 昌宏	377-1702	群馬県吾妻郡中之条町生須543番地1
埼玉県	5530	越谷市立城ノ上小学校	若田 範之	鈴木 勇人	343-0011	埼玉県越谷市増林6066-1
	5531	川口市立柳崎小学校	高田信一郎	國原 健介	333-0861	埼玉県川口市柳崎4-4-1
	5532	本庄市立児玉中学校	荒井 敦	鎌田 聖治	367-0217	埼玉県本庄市児玉町八幡山438番地
	5533	埼玉県立大宮高等学校	黒岩 和秀	小田川 功	330-0834	埼玉県さいたま市大宮区天沼町2-323
千葉県	5534	船橋市立宮本小学校	磯野 一男	藤井 隼人	273-0003	千葉県船橋市宮本7-10-1
	5535	印西市立西の原小学校	小島 洋子	松 田 翼	270-1334	千葉県印西市西の原2-7
東京都	5536	葛飾区立高砂小学校	木室 忠明	太田 博士	125-0054	東京都葛飾区高砂3-30-1
	5537	青梅市立第四小学校	酒井 俊夫	小野 光典	198-0042	東京都青梅市東青梅6-1-1
	5538	町田市立三輪小学校	増川 知子	小川 祐治	195-0054	東京都町田市三輪町330-1
	5539	中野区立第十中学校	関 年隆	中村 真紀	164-0011	東京都中野区中央1-41-1
	5540	昭島市立瑞雲中学校	喜多野雅司	近藤 美咲	196-0012	東京都昭島市つつじヶ丘2-2-6
	5541	東京都立篠崎高等学校	関 毅彦	山中すすむ	133-0063	東京都江戸川区東篠崎1-10-1

都道府県	NO.	学 校 名	校長名	主任名	〒	所 在 地
神奈川県	5542	川崎市立菅生小学校	玉井 弘孝	小泉 昌和	213-0015	川崎市宮前区菅生1丁目5番地1号
	5543	相模原市立星が丘小学校	古井 邦一	蛭田 慶太	252-0238	神奈川県相模原市中央区星が丘3-1-6
	5544	川崎市立稲田中学校	小田嶋 満	福井 玲子	214-0021	川崎市多摩区宿河原4丁目1番地1号
	5545	神奈川県立菅高等学校	岡田 健	邑楽 栄二	214-0004	川崎市多摩区菅馬場4丁目2番1号
新潟県	5546	新潟市立亀田小学校	近藤 文男	出頭久美子	950-0125	新潟市江南区亀田新明町1-1-46
	5547	五泉市立大蒲原小学校	齋藤多美子	岸本 武彦	959-1741	新潟県五泉市南田中646-2
福井県	5548	福井市社南小学校	安竹 良則	川端 弘樹	918-8031	福井市種池2丁目128番地
	5549	鯖江市吉川小学校	尾形 清衛	笹木 雅高	916-0085	福井県鯖江市大倉町22-1
	5550	永平寺町松岡中学校	小林 仁章	亀井 大介	910-1127	福井県吉田郡永平寺町松岡吉野堺61-10-1
長野県	5551	長野市立通明小学校	石塚 弘登	西瀬 修二	388-8006	長野市篠ノ井御幣川270
	5552	長野市立篠ノ井東中学校	宮澤 真一	松田 幸一	388-8003	長野市篠ノ井小森840
	5553	長野県篠ノ井高等学校	関田 了	脇坂 清志	388-8007	長野市篠ノ井布施高田1161-2
	5554	長野県長野養護学校	原山 総男	渋川 宗宣	381-0041	長野市大字徳間字宮東1360番地
岐阜県	5555	恵那市立飯地小学校	丹羽 雅彦	松岡 初子	505-0003	岐阜県恵那市飯地町26番地4
	5556	東白川村立東白川中学校	林 茂富	井上 誠	509-1302	岐阜県加茂郡東白川村神土647-4
	5557	岐阜県立長良特別支援学校	若園 仁	橋田 直也	500-0071	岐阜市長良1237-1
静岡県	5558	浜松市立県居小学校	山本 益弘	北村 宏樹	432-8036	静岡県浜松市中区東伊場2丁目5-1
	5559	静岡市立城北小学校	末高 義美	榊原 道伸	420-0881	静岡市葵区北安東4丁目27番3号
	5560	磐田市立豊田南小学校	金子 豊三	小澤 亮太	438-0834	静岡県磐田市森下300番地
	5561	静岡県立静岡南高等学校	藤原 岳彦	篠原 康治	422-8017	静岡市駿河区大谷5762
山梨県	5562	南アルプス市立豊小学校	澤登 義洋	米山 隆男	400-0304	山梨県南アルプス市吉田787
愛知県	5563	名古屋市立猪高小学校	森 茂巳	浅田 幸臣	465-0027	名古屋市名東区丁田町32番地
	5564	新城市立八名小学校	夏目 真治	山本 佳明	441-1335	愛知県新城市富岡字半ノ木15番地1
	5565	犬山市立犬山中学校	鍵野 英夫	西井 一博	484-0079	愛知県犬山市木津宮前15
	5566	愛知県立安城養護学校	伊澤 裕司	柴田 一則	444-1154	愛知県安城市桜井町伝左20番地
三重県	5567	三重県立桑名西高等学校	寺井 啓子	深井 博実	511-0937	三重県桑名市大字志知字東山2839
滋賀県	5568	守山市立河西小学校	西村 達	松田 大央	524-0002	滋賀県守山市小島町1843
	5569	高島市立マキノ中学校	柏原 甚也	中村 久昭	520-1833	滋賀県高島市マキノ町蛭口601番地
	5570	滋賀短期大学附属高等学校	村田千栄子	乙須 一心	520-0052	滋賀県大津市朝日が丘1-18-1
大阪府	5571	高槻市立奥坂小学校	鎌田ひとみ	澤部 勇氣	569-1112	大阪府高槻市別所本町35-5
	5572	堺市立東百舌鳥小学校	戸井智重子	辻本 峻	599-8234	大阪府堺市中区土塔町139番地
	5573	大阪市立菅北小学校	野田 昌樹	瀧瀬 智史	530-0031	大阪府大阪市北区菅栄町9-5
	5574	寝屋川市立友呂岐中学校	河本 和人	吉田千賀子	572-0028	大阪府寝屋川市日新町2-25
	5575	大阪府立摂津高等学校	伊藤 義孝	西林 厚	566-0033	大阪府摂津市学園町1-5-1

都道府県	NO.	学 校 名	校長名	主任名	〒	所 在 地
兵庫県	5576	丹波市立芦田小学校	足立 宏規	村山 次郎	669-3804	兵庫県丹波市青垣町田井縄371
	5577	たつの市立御津中学校	西谷 和憲	樽本 正彦	671-1342	兵庫県たつの市御津町朝臣414番地
	5578	たつの市立龍野西中学校	竹内 孝之	灘 俊明	679-4003	兵庫県たつの市揖西町小神30番地
	5579	兵庫県立尼崎北高等学校	瀬子 吉久	三上 進	661-0002	兵庫県尼崎市塚口町5丁目40番地の1
奈良県	5580	桜井市立初瀬小学校	藤本 和義	倉西 崇明	633-0112	奈良県桜井市初瀬1556番地
	5581	御所市立葛上中学校	加納 弘	近藤 直也	639-2325	奈良県御所市大字佐田1-1
	5582	奈良県立西和清陵高等学校	榊井 恒好	西川 祐子	636-0813	奈良県生駒郡三郷町信貴ヶ丘4-7-1
和歌山県	5583	和歌山市立東中学校	有本 晴彦	大畑 昌之	640-0342	和歌山市松原337
	5584	和歌山市立西和中学校	梅野 芳作	高山 勉	640-8272	和歌山市砂山南3丁目3-9
鳥取県	5585	三朝町立三朝中学校	生原 清明	伊藤 文男	682-0152	鳥取県東伯郡三朝町本泉425番地
島根県	5586	雲南市立寺領小学校	松本 泰治	島 裕司	699-1322	島根県雲南市木次町寺領612
岡山県	5587	岡山市立富山小学校	都築 勉	塩見 利夫	703-8262	岡山市中区福泊233番地
	5588	倉敷市立下津井中学校	安倉 宏明	林 圭介	711-0926	倉敷市下津井吹上140番地
	5589	岡山県立笠岡商業高等学校	伊東 伸介	須田 考一	714-0081	岡山県笠岡市笠岡3203番地
広島県	5590	広島市立本川小学校	河野 一則	秦 賢二	730-0802	広島市中区本川町1丁目5-39
徳島県	5591	名西郡石井町高原小学校	山本 信子	遠藤 岳哉	779-3205	徳島県名西郡石井町高原字東高原250番地1
	5592	板野郡上板町立上板中学校	横田 茂則	本村 賢二	771-1320	徳島県板野郡上板町神宅字西金屋44番地
香川県	5593	仲多度郡まんのう町立満濃中学校	環 修	山本 利明	766-0022	香川県仲多度郡まんのう町吉野下957
愛媛県	5594	伊予市立伊予中学校	山本 恵	小笠原洋司	799-3103	愛媛県伊予市上野2326番地
	5595	愛媛県立宇和島東高等学校	川上 千代	浅野 秀夫	798-0066	愛媛県宇和島市文京町1番1号
福岡県	5596	福岡市立塩原小学校	堀江 保夫	金田 徹	815-0032	福岡市南区塩原1丁目27-1
	5597	北九州市立白銀中学校	石田 英久	前田 孝二	802-0074	北九州市小倉北区白銀1丁目13番1号
佐賀県	5598	小城市立桜岡小学校	南里 敏	小柳 隆弘	845-0001	佐賀県小城市小城町166
	5599	佐賀市立川副中学校	陣内 弘文	船津 法大	840-2213	佐賀県佐賀市川副町大字鹿江710番地
	5600	佐賀市立諸富中学校	大藪日左恵	谷口 淳三	840-2104	佐賀県佐賀市諸富町大字徳富2058の3
長崎県	5601	長崎市立女の都小学校	小川 博行	尾下 知巳	852-8144	長崎県長崎市女の都4丁目7番1号
	5602	松浦市立今福中学校	力武 一喜	年徳谷辰也	859-4528	長崎県松浦市今福町浦免431-5
	5603	長崎県立川棚高等学校	荒木 典子	藤原 昌史	859-3616	長崎県東彼杵郡川棚町白石郷64-1
熊本県	5604	菊池市立花房小学校	田中 正浩	坂本 一真	861-1313	熊本県菊池市出田2516
	5605	長洲町立腹栄中学校	坂本 裕文		869-0103	熊本県玉名郡長洲町腹赤732番地
	5606	熊本県立盲学校	本田 達也	出田貴美子	862-0901	熊本県熊本市東区東町3丁目14-1
大分県	5607	由布市立挾間小学校	加藤 淳一	後藤 俊之	879-5502	大分県由布市挾間町向原89番地
	5608	日田市立三隈中学校	小野 充之	中島 靖彦	877-0076	大分県日田市亀川町402-1

都道府県	NO.	学 校 名	校長名	主任名	〒	所 在 地
宮崎県	5609	日南市立北郷小中学校	森下 洋一	神野 浩二	889-2402	宮崎県日南市北郷町郷之原甲50番地
				西田 栄二		
	5610	宮崎県立日南高等学校	岩田 英男	日高 康	889-2533	宮崎県日南市大字星倉5800番地
鹿児島県	5611	鹿児島市立名山小学校	田之上 齊	東山崎洋一	892-0816	鹿児島県鹿児島市山下町6番43号
	5612	南さつま市立大浦小学校	大脇 清之	西 浩司	897-1201	鹿児島県南さつま市大浦町7182番地
	5613	姶良市立帖佐中学校	牧蘭 浩志	下田 啓介	899-5431	鹿児島県姶良市西餅田1586番地
	5614	鹿児島市立甲南中学校	中西 昭郎	麻生 貴宣	890-0151	鹿児島市高麗町36番32号
沖縄県	5615	沖縄市立沖縄東中学校	新垣 利雄	古波蔵 淳	904-2164	沖縄県中頭郡沖縄市桃原260番地の2
	5616	沖縄県立豊見城高等学校	與那嶺善道	森田 高弘	901-0223	沖縄県豊見城市字真玉橋217

平成24年度 全国学校体育研究 功劳者一覧

都道府県	NO.	氏 名	所 属
北海道	5377	山 本 孝 幸	札幌市立福井野小学校長
	5378	吉 川 正 彦	北見市立高栄小学校長
	5379	小 松 一 保	函館市立八幡小学校長
	5380	黒 井 育 子	札幌市立本町小学校長
	5381	加 藤 和 美	北海道江別高等学校長
	5382	林 俊 夫	北海道千歳北陽高等学校長
青森県	5383	尾 崎 官 一	五戸町立五戸小学校長
	5384	丸 岡 博	三戸町立三戸中学校長
	5385	柴 田 正 人	青森県立青森西高等学校長
岩手県	5386	佐 賀 文 行	盛岡市立北陵中学校長
	5387	伊 藤 晃 二	宮古市立第一中学校長
	5388	伊 藤 張 二	岩手県立大迫高等学校長
宮城県	5389	紺 野 利 次	仙台市立八乙女小学校長
	5390	鈴 木 淳 一	蔵王町立平沢小学校長
	5391	佐 藤 輝 子	前 仙台市立五城中学校長
秋田県	5392	大 山 裕一郎	湯沢市立湯沢南中学校長
	5393	佐 藤 英 樹	秋田県立秋田北鷹高等学校長
山形県	5394	小 林 正 次	山形市立第六小学校長
	5395	沼 澤 靖 浩	戸沢村立戸沢中学校長
	5396	遠 藤 啓 司	山形県立山形中央高等学校長
福島県	5397	尾 下 峰 夫	福島市立御山小学校長
	5398	鈴 木 浩 一	福島県立田村高等学校長
	5399	鈴 木 則 喜	福島県立平工業高校長
茨城県	5400	鈴 木 宏 実	高萩市立高萩小学校長
	5401	松 本 義 哉	阿見町立阿見小学校長
	5402	外 岡 利 治	日立市立助川中学校長
	5403	齊 藤 孝 子	茨城県立藤代紫水高等学校長
栃木県	5404	渡 邊 敏 夫	宇都宮市立今泉小学校長
	5405	市 村 勝 義	宇都宮市立宝木中学校長
	5406	坪 山 正 克	栃木県立那須拓陽高等学校長

都道府県	NO.	氏 名	所 属
群馬県	5407	山 口 正 夫	玉村町立上陽小学校長
	5408	樺 澤 正 美	渋川市立子持中学校長
	5409	清 水 邦 夫	前 群馬県立前橋商業高等学校長
埼玉県	5410	小 川 光 昭	本庄市立本庄西小学校長
	5411	井 上 馨	さいたま市立大宮南中学校長
	5412	角 屋 房 男	羽生市立西中学校長
	5413	廣 川 貞 夫	埼玉県立熊谷女子高等学校長
千葉県	5414	齊 藤 利 明	成田市立下総中学校長
	5415	諸 持 耕太郎	旭市立海上中学校長
	5416	足 立 清 志	千葉市立加曽利中学校長
	5417	佐久間 嘉 宏	千葉県立幕張総合高等学校長
東京都	5418	山 田 修 司	豊島区立駒込小学校長
	5419	菊 井 道 子	府中市立府中第六小学校長
	5420	土 屋 隆 之	杉並区立松庵小学校長
	5421	大河原 嘉 朗	板橋区立赤塚第一中学校長
	5422	大 沼 昇	世田谷区立船橋希望中学校主幹教諭
	5423	渡 辺 一 信	港区立港南中学校長
	5424	杉 山 正 明	東京都立六郷工科高等学校非常勤教員
	5425	小 巻 優 子	東京都立第一商業高等学校主幹教諭
神奈川県	5426	前 田 隆	横浜市立間門小学校長
	5427	君 塚 一 夫	川崎市立木月小学校長
	5428	三 宅 則 良	横須賀市立大楠小学校長
	5429	江 藤 道 典	相模原市立上溝小学校長
	5430	田 村 幸 久	元 神奈川県立秦野曾屋高等学校長
新潟県	5431	渡 邊 強	長岡市立東北中学校長
	5432	齋 藤 英 男	上越市立浦川原中学校長
	5433	流 石 光 信	妙高高原中学校長
	5434	渡 辺 耕 司	元 新潟市立白根北中学校長
富山県	5435	舟 木 浩 二	富山市立奥田小学校長
	5436	山 下 均	小矢部市立石動中学校長
	5437	廣 田 英 世	富山県立高志支援学校教頭

都道府県	NO.	氏 名	所 属
石川県	5438	北 本 幸 男	金沢市立安原小学校長
	5439	田 上 雅 治	小松市立南部中学校長
	5440	正 吉 喜久夫	金沢市立高尾台中学校長
福井県	5441	宮 崎 義 幸	永平寺町永平寺中学校長
	5442	吉 田 淳 夫	若狭町立上中中学校長
	5443	五十嵐 淳 子	元 福井市進明中学校教諭
長野県	5444	森 泉 慶 二	前 長野市立寺尾小学校長
	5445	柳 澤 睦 治	前 長野市立古牧小学校長
	5446	柳見沢 宏	前 長野市立西部中学校長
	5447	松 崎 旻	前 岡谷東高等学校長
岐阜県	5448	斉 藤 敦 司	多治見市立滝呂小学校長
	5449	後 藤 茂 伸	岐阜県立岐阜総合学園高等学校長
	5450	青 木 廣 志	元 関市立南ヶ丘小学校長
静岡県	5451	植 田 治 仁	湖西市立岡崎中学校長
	5452	滝 口 兼 光	御殿場市立御殿場中学校長
	5453	野 澤 輝 男	静岡市立長田南中学校長
	5454	松 田 清 孝	静岡県立焼津水産高等学校長
山梨県	5455	八 野 耕 一	甲府市立玉諸小学校長
	5456	清 水 満	前 甲府市立南中学校長
	5457	荊 沢 貞 夫	前 山梨県立白根高等学校長
愛知県	5458	荒 木 修	名古屋市立天白小学校長
	5459	堀 田 知 人	岩倉市立岩倉中学校長
	5460	寺 田 廣 貴	元 豊田市立上郷中学校長
	5461	縣 靖 治	愛知県立刈谷高等学校教頭
三重県	5462	鈴 木 忠 彦	四日市市立河原田小学校長
	5463	峯 悦 司	松阪市学校組合立多気中学校長
	5464	馬 場 一 美	三重高等学校教頭
滋賀県	5465	大 方 晃 顕	彦根市立稲枝東小学校長
	5466	木 村 貞 樹	守山市立明富中学校長
	5467	岩 本 忠 晴	滋賀県立安曇川高等学校長
京都府	5468	赤 羽 清	前 京都市立朱雀第三小学校長

都道府県	NO.	氏 名	所 属
大阪府	5469	虎 谷 吉 則	茨木市立西小学校長
	5470	長 原 浩	八尾市立高美小学校長
	5471	大 塚 栄 嗣	大阪市立生魂小学校長
	5472	家 鋪 良 行	大阪市立阿倍野中学校長
	5473	梶 原 一 憲	大阪府立長尾高等学校長
兵庫県	5474	久保田 幸 久	姫路市立東小学校長
	5475	高 附 祥 喜	姫路市立豊富中学校長
	5476	加 藤 浩 一	兵庫県立伊川谷高等学校教諭
	5477	河 野 泰 明	兵庫県立高等特別支援学校教諭
奈良県	5478	西 浦 正 翁	奈良市立鼓阪小学校長
	5479	下 村 雅 一	生駒市立生駒小学校長
	5480	井 岡 陽 子	奈良県立橿原高等学校長
和歌山県	5481	平 逸 男	和歌山市立楠見西小学校長
	5482	岩 本 章	和歌山市立西和中学校長
	5483	大 橋 義 久	和歌山県立橋本高等学校教頭
鳥取県	5484	西 尾 幹 雄	鳥取市立美保小学校長
	5485	長谷川 郁 代	米子市立福生中学校教諭
	5486	隅 坂 義 之	倉吉市立東中学校教諭
島根県	5487	玉 野 桂 子	松江市立川津小学校教頭
	5488	宮 本 夏 子	前 松江市立鹿島中学校長
	5489	井 上 和 朋	島根県立平田高等学校長
岡山県	5490	武 田 肅	総社市立昭和中学校教諭
	5491	青 山 敦 子	岡山県立総社南高等学校教諭
	5492	瀬 島 和 美	元 倉敷市立豊洲小学校長
広島県	5493	磯 部 正 義	福山市立山手小学校長
	5494	寺 田 宣 文	府中市立上下北小学校長
	5495	阪 田 福 三	広島市立川内小学校長
徳島県	5496	片 山 京 子	徳島市富田小学校長
	5497	富 田 充 宏	徳島県立海部高等学校長
	5498	分 木 秀 樹	徳島県体育協会専務理事
香川県	5499	中数賀 重 幸	丸亀市立飯山南小学校長

都道府県	NO.	氏 名	所 属
愛媛県	5500	林 格	前 宇和島市立住吉小学校長
	5501	土 居 和 博	伊予市立港南中学校長
	5502	森 藤 博 明	愛媛県立大洲高等学校長
高知県	5503	秋 森 眞 五	高知市立泉野小学校長
	5504	筒 井 清	前 高知市立鏡中学校長
福岡県	5505	松 岡 恒 人	福岡市立四箇田小学校長
	5506	荒 石 正	前 北九州市立星ヶ丘小学校長
	5507	西 村 博 之	福岡市立当仁中学校長
	5508	石 井 保 幸	筑前町立三輪中学校長
	5509	柳 昭 博	前 福岡県立八幡南高等学校長
佐賀県	5510	田 代 高 規	神崎市立神埼小学校長
	5511	竹 下 敬 教	基山町立基山中学校長
	5512	松 永 龍 男	佐賀県立佐賀北高等学校副校長
長崎県	5513	若 杉 晴 久	長崎市立上長崎小学校長
	5514	本 多 五 稔	対馬市立久田中学校長
	5515	阿比留 和 裕	長崎県立西陵高等学校指導教諭
熊本県	5516	本 田 栄 二	熊本市立山ノ内小学校長
	5517	西 龍三郎	球磨郡錦町立錦中学校長
	5518	後 藤 正 興	熊本県立荒尾高等学校長
大分県	5519	佐 藤 嘉 郎	由布市立大津留小学校長
	5520	首 藤 賢 一	大分市立南大分中学校教頭
	5521	鈴 木 基 史	大分県立大分支援学校長
宮崎県	5522	三 浦 順 一	宮崎市立加納小学校長
	5523	古 川 徹	宮崎市立櫛中学校長
	5524	秋 田 義 久	元 宮崎県立宮崎南高等学校教諭
鹿児島県	5525	小 篠 元 生	前 鹿屋市立鹿屋東中学校長
	5526	岩 切 和 良	前 鹿児島市立緑丘中学校長
	5527	高 城 国 昭	前 鹿児島県立鹿児島南高等学校長
	5528	山 上 浩 司	前 鹿児島市立鹿児島商業高等学校長
沖縄県	5529	仲 西 起 實	浦添市立仲西小学校長
	5530	永 山 清 勝	八重瀬町立東風平中学校長
	5531	比 嘉 律 子	沖縄県立沖縄水産高等学校教諭

平成24年度全国学校体育表彰者代表謝辞

北海道北見市立高栄小学校 吉 川 正 彦

名誉ある賞をいただきました105校と155名を代表いたしまして、一言謝辞を申し上げます。

本日、ここに平成24年度全国学校体育研究大会優秀校表彰並びに功労者表彰の名誉に賜りましたことは、受賞者一同身に余る光栄であり、心より感謝申し上げます。

私たちは、地域や環境は異なれど、学校体育の授業研究実践者として、またスポーツ指導者として、体育スポーツ活動の楽しさや喜びを仲間や子どもたちと共有してまいりました。何よりも体育・スポーツをこよなく愛してまいりました。スポーツは人生に生き甲斐をもたらし、世代を超えて大きな感動や連帯感、勇気をも育みます。

私たちは今回の受賞を機に、それぞれの地域に戻り、微力ではありますが、将来の日本を背負う子どもたちの育成に、そして、体育スポーツ活動の普及振興に精進いたすつもりであります。今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりましたが、文部科学省財団法人日本学校体育研究連合会の皆様、そして、ここにご列席の全ての皆様方のご健勝とご多幸を心より祈念いたしまして、お礼の言葉といたします。本日は、本当にありがとうございました。



主 催 ・ 共 催 団 体 関 係

□ 文部科学省

ス ポ ー ツ ・ 青 少 年 局 長	久 保 公 人
大臣官房審議官(スポーツ・青少年局担当)	山 脇 良 雄
スポーツ・青少年局スポーツ・青少年総括官	山 口 敏
ス ポ ー ツ ・ 青 少 年 局 体 育 参 事 官	長 登 健
スポーツ青少年局体育参事官付教科調査官	白 旗 和 也
スポーツ青少年局体育参事官付教科調査官	石 川 泰 成

□ 財団法人日本学校体育研究連合会

会 長	片 岡 暁 夫
副 会 長	高 橋 健 夫
副 理 事	本 村 清 一
理 事	後 藤 藤 一
理 事	岡 出 美 則
理 事	友 添 秀 則
理 事	菅 原 健 次
理 事	池 田 延 行
参 事	村 上 み な 子
参 事	櫻 井 康 治
参 事	加 藤 正 克
参 事	古 川 浩 洋
参 事	田 中 美 智 子
監 事	手 打 和 明
監 事	関 奈 彦
監 事	奈 寺 力
監 事	藤 井 井 代
務 務	文 か ね 子

□ 北海道教育委員会

教 育 長
教 育 次 長
健 康・体 育 課 長
健 康・体 育 課 主 幹
健 康・体 育 課 主 査
健 康・体 育 課 主 査
健 康・体 育 課 指 導 主 事

高 橋 教 一 昭
吉 田 一 彦
土 井 寿 崇
蓑 島 一
佐々木 純 和
駒 井 博 範
瀬 越 義

□ 札幌市教育委員会

教 育 長
教 育 次 長
学 校 教 育 部 長
指 導 担 当 部 長
教 育 研 修 担 当 部 長
幼 児 教 育 セ ン ター 担 当 課 長
指 導 室 指 導 主 事
指 導 室 指 導 主 事

北 原 敬 文
町 田 隆 敏
金 山 正 彦
池 上 修 次
大 友 裕 之
松 田 昌 樹
三 戸 部 文 彦
秀 島 起 也

□ 北海道学校体育研究連盟

委 員 長
副 委 員 長
副 委 員 長
副 委 員 長
副 委 員 長
監 事
監 事
事 務 局 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長
事 務 局 次 長

飯 沼 晃
成 田 一
黒 井 子
下 山 弘
藤 岡 朗
山 本 幸
佐 藤 保
松 井 一
渡 井 元
矢 辺 雄
山 口 希
登 本 宏
吉 尾 治
林 田 樹
夫

平成24年度 第51回全国学校体育研究大会 北海道大会実行委員会役員

顧問	北海道教育委員会教育長	高橋教一
	札幌市教育委員会教育長	北原敬文

参与	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	鈴木	豊
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	栗城	正
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	石原	金治
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	杉本	幸一
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	金井	孝
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	永田	弘
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	山越	正敏
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	炭谷	邦弘
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	竹本	征雄
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	宮崎	岩次
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	西村	正
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	工藤	誠
	北海道学校体育研究連盟歴代委員長	鈴木	眞行
	北海道国公立幼稚園園長会会長	上千	田道子
	札幌市立幼稚園長会会長	千蔵	葉理恵子
	北海道小学校長会会長	飯沼	本康彦
	札幌市小学校長会会長	谷	直晃
	北海道中学校長会会長	後藤	文裕
	札幌市中学校長会会長	山本	伸弘
	北海道高等学校長協会会長	守屋	開
	北海道高等学校教育研究会会長	伊藤	政勝
	北海道特別支援学校長会会長	土井	寿彦
	北海道教育委員会学校教育局健康・体育課長	森岡	毅
	札幌市教育委員会学校教育部指導担当課長	檜田	英樹
	札幌市教育委員会学校教育部指導担当課長	松田	昌樹

札幌市立白楊幼稚園長
 札幌市立白楊小学校長
 札幌市立宮の森小学校長
 札幌市立福住小学校長
 札幌市立資生館小学校長
 札幌市立上野幌中学校長
 札幌市立月寒中学校長
 札幌市立向陵中学校長
 北海道恵庭南高等学校長
 北海道北広島高等学校長
 北海道札幌市立豊明高等養護学校長

綿屋圭子
 飯塚泰久
 飯沼晃
 大久保雅人
 益村豊
 下山弘
 南野昭博
 塚岡二臣
 藤品純朗
 三嶋智一
 北嶋史

委員長 北海道学校体育研究連盟
 副委員長 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟
 監事 北海道学校体育研究連盟
 〃 北海道学校体育研究連盟

飯沼晃
 成田純一
 黒井育子
 下山弘
 藤岡二朗
 山本孝幸
 佐藤善保

平成24年度 第51回全国学校体育研究大会 北海道大会実行委員会事務局・専門部役員

委員長	飯沼晃	(札幌市立宮の森小学校長)
副委員長	成田純一	(札幌市立あやめ野小学校長)
〃	黒井育子	(札幌市立本町小学校長)
〃	下山信弘	(札幌市立上野幌中学校長)
〃	藤岡二朗	(北海道恵庭南高等学校長)
監事	山本孝幸	(札幌市立福井野小学校長)
〃	佐藤善保	(札幌市立中の島中学校長)
事務局長	松井光一	(札幌市立手稲北小学校長)
事務局次長	矢口宇希雄	(札幌市立豊平小学校長)
〃	山本宏	(札幌市立藻岩小学校長)
〃	登尾俊治	(札幌市立南白石小学校長)
〃	渡辺元	(札幌市立西岡北小学校長)
〃	吉田俊樹	(札幌市立厚別南中学校長)
〃	林俊夫	(北海道千歳北陽高等学校長)

【総務部】

顧問	山室隆幸	(札幌市立石山東小学校長)
	猪股徹	(札幌市立北白石中学校長)
部長	長尾明也	(札幌市立厚別北小学校長)
副部長	大山勉	(北海道恵庭南高等学校副校長)
	金子博之	(札幌市立福井野小学校教頭)
	金星野正彦	(札幌市立西岡北中学校教頭)
部員	石塚洋紀	(札幌市立豊平小学校)
	田川則紀	(札幌市立もみじの森小学校)
	野村淳一	(札幌市立西岡北小学校)
	岩田悟	(札幌市立白楊小学校)
	芳賀康平	(札幌市立月寒東小学校)

【研究部】

顧問	高井雅一	(札幌あすかぜ高等学校長)
	北嶋智史	(北海道札幌市立豊明高等養護学校長)
部長	引地秀美	(札幌市立平岡公園小学校長)
副部長	山本興嗣	(札幌市立ふくいの幼稚園長)
	綿屋圭子	(札幌市立白楊幼稚園長)
	中野正毅	(札幌市立緑丘小学校教頭)
	大牧眞一	(札幌市立資生館小学校教頭)
	小野寺正	(札幌市立八軒東中学校教頭)
	富川浩	(札幌市立米里中学校教頭)

部	員	松西橋嶋道前村佐	林川本本佛田岡藤	正浩由智美孝	比呂司貴剛志潤世一	(北海道北広島高等学校教頭) (北海道札幌市立豊明高等養護学校教頭) (札幌市立白楊幼稚園) (札幌市立幌南小学校) (札幌市立もみじの森小学校) (札幌市立宮の森小学校) (札幌市立福住小学校) (札幌市立伏見中学校)	
		【編集部】					
		顧問	部長	副部長			
		山加星宇平鈴松岸相永	口藤留間野木田馬井	哲和紀雅昭泰敬	司美生準嗣真雄弘聡仁	(札幌市立定山溪小学校長) (北海道江別高等学校長) (札幌市立常盤小学校長) (札幌市立北野台中学校長) (北海道北広島西高等学校副校長) (札幌市立北白石小学校教頭) (札幌市立東札幌小学校教頭) (札幌市立琴似小学校教頭) (札幌市立月寒小学校) (札幌市立発寒東小学校)	
		部	員				
		【式典部】					
		顧問	部長	副部長			
		新藤渡大金西牧村堀	見本辺野光坂内田江	一勝寛朋健敏邦	美芳志子二彦夫仁仁	(札幌市立元町小学校長) (北海道野幌高等学校長) (札幌市立元町北小学校長) (札幌市立北陽中学校長) (札幌市立新琴似小学校教頭) (札幌市立清田南小学校教頭) (札幌市立平岸中学校教頭) (札幌市立真駒内桜山小学校教頭) (札幌市立東川下小学校)	
部	員						
【事業部】							
顧問	部長	副部長					
畠山成清今小石木千石	山脇田水井甲岡村葉橋	貴代義則修悟之樹郎明二	志栄則修悟之樹郎明二	(札幌市立伏古小学校長) (札幌市立豊園小学校長) (札幌市立厚別西小学校長) (札幌市立東月寒中学校長) (北海道野幌高等学校副校長) (札幌市立藻岩小学校教頭) (札幌市立美香保中学校教頭) (札幌市立羊丘小学校) (札幌市立苗穂小学校) (札幌市立陵陽中学校)			
部	員						

北海道大会運営委員

分科会	第1分科会	第2分科会	第3分科会	第4分科会	第5分科会
会場校	札幌市立 白楊幼稚園	札幌市立 白楊小学校	札幌市立 宮の森小学校	札幌市立 福住小学校	札幌市立 資生館小学校
会場校校長 会場校副校長 会場校教頭	綿屋 圭子	飯塚 泰久 石原 和人	飯沼 晃 佐藤 辰也	大久保雅人 神島 正和	益村 豊 大牧 眞一
運営委員長 運営副委員長	山本 興嗣 串山 昇	新見 一美 茂木 清貴 松野三津夫 樫山 正直 神谷 敦	山室 隆幸 鈴木 真 島津 伸宏 島貫 修 三浦 史人	山口 哲司 成田 義則 橋本 均 辻 雅夫 小野 正裕	矢口宇希雄 小甲 雅之 小笠原教夫 吉田 雅昭 金野 智
会場校主任 会場校副主任	渡辺 元 金光 健二 渋谷かおり	畠山貴代志 石原 和人 金子 博之 井出 光典	黒井 育子 佐藤 辰也 中野 正毅	山本 宏 神島 正和 西坂 敏彦 岸 泰弘	登尾 俊治 大牧 眞一 松田 昭雄 村田 仁司
司 会 記 録	野村 淳一 石塚 洋 神 充哲	千葉 智明 秋元 洋一 藤塚 圭一	山形 昇平 田川 則紀 渡邊 裕治	相馬 聡 島内 英延 樺澤 聡	田中 徳光 矢野 聡史 金田 和也
運営チーフ 運営委員	井村 隆夫 森 美由紀 青柳 貴子 上月 暁子 川口いずみ 本間 真純 木村亜矢子 太田 縁 村上由規乃 今 たち子 和田 尚美 加藤 由紀 山下 洋一 横山 理子	永井 敬仁 清水 健史 成田 慶輔 後藤 良太 井上 直哉 石川 瞳 高瀬 勇人 山本由紀子 山田 健 余田 峻也 水上 健志 五十嵐康夫 菅野 順一 伊藤 倫朗 辰田 章人 本間 大介	安藤 九一 谷 寧 山口 耕昌 武田 洋樹 宮崎 直也 川島 貴裕 鎌田 直広 西村 義仁 越山 絃州 河本 岳哉 勝沼 大空 村上 雅之 石黒 智志 服部 隆 石橋 恭 山本 三楽	木村 哲郎 田牧 亜紀 浅野 純子 安藤 信宏 田口 牧 吉田 康人 佐藤 倫子 米代 直美 吉田 潔 菅原 貴広 佐藤 錦一 平林 莉恵 久保 陽平 高橋 俊介 立野 弘高	堀江 仁 佐賀 主昌 三浦 祐大 鈴木 英恵 安達 隆之 濱田 風太 今野 大介 嘉藤 尋信 中塚 宗太 吉野令欧奈 生駒 大地 下岡 幸織 井上 貴臣 青山 拓也 宇留間 歩
授 業 者	青柳 貴子, 上月 暁子 本間 真純, 川口いずみ 木村亜矢子, 太田 縁 村上由規乃, 今 たち子 和田 尚美, 渋谷かおり	千葉なつき 岩田 悟	石村 宣人 山崎 稔英	上木 一也 石田 愉良	山本 敦史 長谷部舞里
研究発表者 研究主任	橋本 由貴(授業者) 橋本 由貴	岩田 悟 道佛 智志	前田 潤 前田 潤	村岡美千世 村岡美千世	生駒 大地 嶋本 剛

第6分科会	第7分科会	第8分科会	第9分科会	第10分科会	第11分科会
札幌市立 上野幌中学校	札幌市立 月寒中学校	札幌市立 向陵中学校	北海道 恵庭南高等学校	北海道 北広島高等学校	北海道札幌市立 豊明高等養護学校
下山 信弘 山根 弘之	南 博 前田 寿嗣	塚野 昭臣 相原 正典	藤岡 二郎 大山 勉 堀内 雅史	三品 純一 洪川 誠人 松林正比呂	北嶋 智史 西川 浩司
佐藤 善保 大野 朋子	宇留間 準 猪股 徹	吉田 俊樹 清水 修	藤岡 二郎 大山 勉	林 俊夫 松林正比呂	山本 孝幸 西川 浩司
石岡 直樹 小野寺 正 吉田 幸司 佐田 利典	林原 昌生 土田 英之 和田 正教 長谷川 仁	牧内 邦夫 星野 正彦 富川 浩 荒川 芳央	加藤 忠	堀川 政彦	四戸 基樹 正武家重治
熊谷 圭悟 木村 由久 牧内奈保巳	佐藤 孝一 駒込 幸則 小林 大介	桑原 俊二 牧内 志友 鈴木 隆史	佐藤 恒司 山石 裕司 岩渕 裕介	井戸 利樹 黒田 祥嗣 南原 賢二	西川 浩司 今野 邦彦 黒江 貴志
佐藤 典明 奥山 隆敏 西下 賀恵 木口 朋子 堀 貴博 吉田摩里子 高橋 正年 竹内 吉徳 遊佐嘉寿美 谷内 公一 山下 康則 渡部 堅 佐藤寿美子 上山 敦司 木下 雅裕 栗城 正宏 村山 直樹 秋川 直慶 長島 周平 今井 聖子	佐藤 克也 石橋 秀二 金野 睦子 網島 七恵 笹川 恒春 大崎 聡 岸本 淳志 佐藤 公規 坂本 純 大良 友美 川田 佑一 岩本 良一 長岡 訓子 山崎 武司	池田 恵美 島田 誠大 牧内 泰子 勝平 愛 内海 力男 大賀 郁恵 中濱 絵里 野沢 周 広瀬恵理子 高橋伸素美 塚本 真澄 林 功 菅原 伸一 高橋 舞 家内賢一郎 大井 一雄 阿部 義秀 尾崎 英弥	加藤 忠 数馬田奈津紀 川島 圭司 竹田 麻衣 繁野 昌司 工藤 高司 森河 浩 太刀川建一 佐藤 真吾 塚原 康隆 田中 眞 赤松 幸広 酒井 伸哉 吉岡ゆかり 佐賀るみ子 三上 明美 (運営アドバイザー) 高井 雄一 平野 雅嗣 今井 悟	堀川 政彦 重成珠里恵 仲見 孝仁 柴田 宏樹 中川 暁 尾形 一彦 西川 剛 山田 信雄 清水 大策 橋本 裕也 数馬田 基 寺内晋太郎 池下美由紀 相馬 優子 浅野 雅子 (運営アドバイザー) 加藤 和美 藤本 勝芳	矢口 知巳 藤江 和輝 長内 伸子 前川 慈彦 真島 毅 菊地美智子 西野 昭子 中村 和愛 二本柳一穂
伊東美美枝 齊藤 研介 太田 吏 太田 吏	佐藤 光 津村 昌彦 (研究発表者) 藤田ゆきえ 山口 肇 藤田ゆきえ	片山 慎司 市川 みお 大川 潤 大川 潤	工藤 直人 栄花 英幸 加藤 忠 加藤 忠	森田 有 堀川 政彦 内海 久 内海 久	伊藤沙保里 小原 要 兒玉 亜来 矢口 知巳

===== 全国学校体育研究大会開催地及び研究主題一覧 =====

回	年 度	開催地	研 究 主 題
1	昭和37 (1962)	千葉	「新学習指導要領による体育学習は、どのように展開したらよいか」
2	38 (1963)	兵庫	—
3	39 (1964)	鳥取	—
4	40 (1965)	東京	「学習内容の精選と指導の質の向上」
5	41 (1966)	岐阜	「運動技能の効果的な指導はどのようにしたらよいか」
6	42 (1967)	大阪	「運動技能の効果的な指導はどのようにしたらよいか」
7	43 (1968)	福島	「学校体育の中で体力づくりをどのように進めたらよいか」
8	44 (1969)	高知	「体育の効果的な学習指導をどのように進めるか」 —とくに、体力づくりの面から—
9	45 (1970)	長崎	「自主的体育学習はどのようにすすめるか」 —とくに体力技能づくりの面から—
10	46 (1971)	埼玉	「運動の特性や発達段階に応じた効果的な学習指導はどのようにしたらよいか」
11	47 (1972)	福井	「運動の特性や発達段階に応じた効果的な体育指導」 —次代をきりひらくたくましい児童生徒の育成をめざして—
12	48 (1973)	和歌山	「体育学習における効果的な指導を行うにはどうすればよいか」 —とくにたくましい人間形成をめざして—
13	49 (1974)	山形	「生涯学習の基礎を築く児童・生徒のいきいきとした授業の開発」 —技能習得過程における子どもの意識—
14	50 (1975)	東京	「体育指導の充実をめざして」
15	51 (1976)	滋賀	「体育指導と体力の向上」
16	52 (1977)	熊本	「すすんで実践する体育学習をめざして」
17	53 (1978)	群馬	「体力向上の在り方をもとめて」
18	54 (1979)	東京	「心身の健康をめざして」
19	55 (1980)	東京	「望ましい態度・習慣の育成をめざして」
20	56 (1981)	大阪	「たくましいからだと心を育てる」
21	57 (1982)	新潟	「生涯スポーツを志向した学校体育の推進を目指して」
22	58 (1983)	神奈川	「運動の実践力を高める学習過程はどうあるべきか」
23	59 (1984)	沖縄	「運動の特性に基づく楽しさを味わうための学習の指導はどうすればよいか」
24	60 (1985)	鹿児島	「生涯体育を指向し、豊かな人間性を育成する学習指導のあり方」
25	61 (1986)	兵庫	「学習効果をより高める体育指導はいかにあるべきか」
26	62 (1987)	宮城	「21世紀をたくましく生きぬく児童生徒の育成を目指す学校体育の創造」

回	年 度	開催地	研 究 主 題
27	63 (1988)	愛知	「いのちを尊び、心と体を鍛え、たくましく生きる子供の育成をめざす体育学習指導」
28	平成元 (1989)	千葉	「自ら運動に親しみ、豊かな心と健やかな体を育て、生涯スポーツをめざす新しい学校体育を求めて」
29	2 (1990)	北海道	「21世紀を豊かに、たくましく生きる子どもの育成を目指す学校体育の在り方を求めて」
30	3 (1991)	大分	「生涯スポーツを指向し、豊かな人間性を育成する学校体育の推進をめざして」
31	4 (1992)	静岡	「生涯体育・スポーツの基礎を培い、心身ともに健康で活力に満ちた幼児・児童・生徒を育成する学校体育の在り方」
32	5 (1993)	山梨	「21世紀を心豊かに、たくましく生きる幼児児童生徒を育成する学校体育の在り方」
33	6 (1994)	石川	「一人一人が、運動の楽しさを味わい、ゆたかな心とすこやかな身体を育てる生涯スポーツをめざした学校体育のあり方」
34	7 (1995)	香川	「自ら運動を求め、楽しみ、生涯にわたって運動に親しむ子供の育成を目指して」
35	8 (1996)	秋田	「生涯スポーツをめざして、一人一人が運動する喜びを味わえる体育学習のあり方」
36	9 (1997)	奈良	「21世紀を生き抜く、生涯体育・スポーツの深化を図る体育学習・運動あそびの在り方をもとめて」
37	10 (1998)	岡山	「遊び・スポーツのある豊かな社会」 ー学校体育の役割ー
38	11 (1999)	茨城	「ともに、すこやかなスポーツライフをはぐくむあそび・スポーツの在り方」
39	12 (2000)	青森	「発達段階に応じ、喜びや感動を与える体育学習の在り方を求めて」
40	13 (2001)	宮崎	「仲間と一緒に夢中になって取り組む運動遊び・体育学習の在り方」
41	14 (2002)	北海道	「はずむ心と体、共に高め合う体育学習」
42	15 (2003)	三重	「学びをひらく体育の創造」 ー体育ってなに？今を生きる子どもたちにとってー
43	16 (2004)	徳島	「未来を生きる力を育む体育学習を求めて～心と体をひとつに～」
44	17 (2005)	富山	「基礎・基本を身につけ、学び続ける力をはぐくむ体育学習」
45	18 (2006)	栃木	「生涯にわたる豊かなスポーツライフの基礎を培う体育学習を求めて」
46	19 (2007)	京都	「健やかな心と体を育む体育学習を求めて」
47	20 (2008)	岩手	「いきる わかる できる」 生涯スポーツの基礎を培う、確かな力を育てる授業の創造
48	21 (2009)	島根	「確かな知識と技能を身につけ、学ぶ喜びが味わえる体育学習」
49	22 (2010)	福岡	「運動の楽しさを味わわせ、体育的学力の確かな定着を図る体育授業の創造」ー幼児児童生徒の発達の段階を踏まえてー
50	23 (2011)	長野	「すべての子どもが夢中になり、健康で豊かなスポーツライフの実現をめざす体育学習の創造」ー「わかる」「できる」「かかわる」楽しさの創造ー
51	24 (2012)	北海道	「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」 ー授業から日常へ、授業から未来へー

編 集 後 記

第51回全国学校体育研究大会北海道大会が、時計台の鐘が鳴る北の都札幌にて、平成24年10月25日(木)・26日(金)の2日間日程で、全国各地より1600名を超える参加者を迎えて開催いたしました。北海道での全国研究大会は、平成2年度と平成14年度に次ぐ3度目であり、「未来へつなぐ健やかな心と体をはぐくむ体育学習の充実」とした大会主題の下での開催でした。

「北海 DO! Plus One」のキャッチフレーズの下に、数年にわたり大会開催に向けて組織した実行委員会を中心に、オール北海道で準備をしてまいりました。幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の連携を重視してきた北海道の研究を、各校種ごとに全11分科会場での公開授業と実践発表の下に、研究討議が成され研究を深めることができたことに大きな喜びを感じております。全体会での「基調報告」や「解説」に学び、「シンポジウム」や「特別講演」に感動を覚え、各11分科会での熱心な研究討議に、体育人としての心に、新たな火がつけられた思いがしました。

本研究大会を開催するにあたり、研究から準備・運営に至るまで、多大なご支援とご指導を賜りました、文部科学省や財団法人日本学校体育研究連合会の役員・事務局の皆様方、シンポジストの先生方や分科会等の助言者・講師を務めてくださった全ての方々に厚く感謝申し上げます。

これからも、北海道学校体育連盟へのご支援とご指導をお願い申し上げ、ここに「北海道大会の報告書」発行をもちましてお礼に代えさせていただきます。

ありがとうございました。

第51回全国学校体育研究大会
北海道大会
大 会 報 告 書

発 行 平成25年 3 月31日発行
編 集 北海道大会実行委員会編集部
発行者 北海道大会実行委員会
委員長 飯 沼 晃
連絡先 北海道大会実行委員会事務局
札幌市立手稲北小学校内
事務局長 松 井 光 一
〒006-0860
北海道札幌市手稲区手稲山口653番地 2
tel 011-681-4182 fax 011-681-7359
印 刷 株式会社 大弘社印刷
札幌市中央区北 1 条西28丁目
tel 011-614-4121



(財)日本学校体育研究連合会